宮城県多賀城市山王遺跡多賀前地区
出土木材の樹種

松葉礼子（東京学芸大学教育学部）・鈴木三男（東北大学・理学研究科）

山王遺跡は宮城県多賀城市の多賀城址の南西の低地にあり、そこの多賀前地区から出土した9世紀末期～10世紀初頭にかけての木製品856点の樹種を調査した。樹種の同定は剃刀刃を用いて遺物から横断、放射、接線の3断面の切片をつくり、それをガムクロラールで封入し、光学顕微鏡を用いて現生の対象標本と比較して行った。その結果、同定できなかったもの23点と樹皮4点を除く829点に48のタイプの樹種が確認された。これらの同定結果を標本番号順に付表に掲載し、その集計結果を表1に、そして同定された樹種の同定の根拠を以下に記載し、それらの代表的な標本の顕微鏡写真を図版 1～17に示した。これらの同定された標本はすべて東北大学理学研究科生物学教室植物構造学研究室に保存されている。

同定結果

1. モミ属　*Abies* sp.　Pinaceae　写真図版67：1（MYG-1904）

垂直・水平樹脂道をともに欠く針葉樹材で、時に傷害樹脂道が出る。早材から晩材にかけての移行はゆるやかだが年輪界ははっきりしている。放射組織は、単列同性で、放射柔細胞より構成される。放射組織の垂直および水平壁は厚く、多数の単壁孔を持ち、垂直壁は結節状を呈す。分野壁孔は、小型のスギ型で、一分野に、2～6個含む。

以上の形質よりマツ科のモミ属の材と同定された。日本に生育するモミ属は、ウラジロモミ、トドマツ、モミ、シラビソ、アオモリトドマツの5種が分布しているが、材構造は互いに似ており種の同定には至っていない。しかし、モミのみが本州の冷温帯下部から暖温帯と広く分布していることから、本遺跡の出土材はモミである可能性が強い。モミは、樹高30m、幹径1mになる常緑針葉樹であり、材は、木理通直で、肌目が疎で靭性が低く加工容易であるが割れやすく保存性は低い。

2. アカマツ　*Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.　Pinaceae　写真図版67：2（MYG-2681）

垂直、水平の両樹脂道を持つ針葉樹材で、早材から晩材への移行はゆるやか、年輪界ははっきりしている。樹脂道の周囲には壁の薄いエピセリウム細胞がある。放射組織は、放射柔細胞と放射仮道管から成り、放射仮道管の水平壁は、先の尖った鋸歯状の肥厚が著しい。分野壁孔は、窓型で、通常 1分野にひとつ見られる。

以上の形質よりマツ科マツ属のアカマツの材と同定された。日本に生育するマツ科マツ属の複維管束亜属にはクロマツもあるが、放射仮道管の内壁の肥厚が、鋭利に突起しないことから区別できる。アカマツは、常緑針葉樹林で北海道から九州の冷温帯から暖温帯の山地、丘陵に生え、乾燥した痩せ地に対する適応力が高いため、乱伐後の土地にもよく生育する。材は重硬で、木理は通直、肌目は粗

く、油分が多い。

3. クロマツ　*Pinus thunbergii* Paralatore　Pinaceae　写真図版67：3（MYG-2857）

水平・垂直の両樹脂道を持つ針葉樹材。早材から晩材にかけての移行は緩やかで、年輪界は明瞭である。樹脂道の周囲にはエピセリウム細胞が見られるが、壁が薄く壊れやすい。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管を持ち、放射仮道管の水平壁には、鈍角な短鋸歯状の突起がある。分野壁孔は、窓状で、普通１分野に１個である。

以上の形質により、マツ科マツ属のクロマツと同定した。クロマツは、青森県以南から琉球にかけての暖温帯に分布し、特に海岸沿いに多い。材は樹脂分が多く、重硬で、水湿に耐え強靭である。

4. マツ属　*Pinus*　sp.　Pinaceae　写真図版68：4（MYG-1922）

上記のアカマツ、クロマツと基本構造では一致するが、保存状態が悪いため放射仮道管の壁孔の肥厚がいずれのタイプか確認できず、これ以上の詳しい同定はできなかった。

5. スギ　*Cryptomeria japonica*（L.fil.）D.Don　Taxodiaceae　写真図版68：5（MYG-2657）

水平・垂直の両樹脂道をともに欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は、緩やかなものから急なものまで変異があるが、年輪界は明瞭である。樹脂細胞は、晩材部付近に多く存在する。放射組織は単列、放射柔細胞のみからなり、水平壁は平滑。分野壁孔は、大型のスギ型。1 分野に普通 2 個存在している。

以上の形質によりスギ科のスギの材と同定した。スギは、本州・四国・九州の冷温帯から暖温帯に分布し、特に降水量の多い本州日本海側、東海、四国、九州に多く分布する。材は、木理通直で肌目が疎く、加工が容易で割裂性が高い特徴がある。器具材、建築材、曲物等広く利用される。

6. コウヤマキ　*Sciadopitys verticillata*（Thunb.）Sieb. et Zucc.　Sciadopityaceae　写真図版68：6（MYG-2363）

垂直・水平両樹脂道をともに欠く針葉樹材で、樹脂細胞も持たない。早材から晩材への移行は急で、晩材部の幅が狭い。放射組織は単列で背は低く、放射柔細泡のみからなり、分野壁孔は大型の窓状で、通常１分野あたり１個である。

以上の形質によりコウヤマキ科のコウヤマキの材と同定した。コウヤマキは、本州（福島に隔離分布、長野以南）・四国・九州に分布し、材は、耐水性に優れているため、桶・船材、特に古墳時代の木棺材として利用された。特に高野山に多いのでこの名がある。本遺跡周辺には分布せず曲物の底板として利用されているが、移入材だと思われる。

7. ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endl. Cupressaceae 写真図版 69：7 (MYG-2658)

垂直・水平の両樹脂道をともに欠く針葉樹材。晩材部は少ないが、年輪界は明瞭。樹脂細胞が晩材部付近にある。放射組織は、単列で、柔細胞のみからなる。分野壁孔は、中型の開孔部の狭いトウヒ型～ヒノキ型。1分野あたり通常は2個存在する。

以上の形質によりヒノキ科のヒノキの材と同定した。現在ヒノキは、福島以南の本州、四国・九州の冷温帯に分布し、山地に生えている。材は、緻密で耐朽力が強く、加工が容易である。特に心材は保存性が高く、よく水湿に耐えるという特徴を持つ。そのため、曲物、建築材等に好んで利用される。

8. サワラ *Chanecyparis pisifera* (Sieb. et Zucc.) Endl. Cupressaceae 写真図版 69：8 (MYG-2607)

垂直・水平の両樹脂道をともに欠く針葉樹材。晩材部は少ないが、年輪界は明瞭。樹脂細胞が晩材部付近に散在する。樹脂細胞の水平壁には結節状の肥厚が見られる。放射組織は、単列で、放射柔細胞のみからなる。分野壁孔は、中型のヒノキ型～スギ型で、ヒノキよりもやや孔口が大きいことから区別される。1分野あたり通常2個存在する。

以上の形質によりヒノキ科のサワラの材と同定した。サワラは本州(岩手県以南)・四国・九州の冷温帯に分布するが、ヒノキより量が少ない。材は、ヒノキと良く似るがヒノキより保存性が低い。

9. ヒノキ属 *Chanecyparis* sp. Cupressaceae 写真図版69：9 (MYG-2376)

垂直・水平樹脂道をともに欠く針葉樹材で、早材から晩材にかけての移行は、やや急。樹脂細胞は、晩材部に散在し、水平壁は結節状になる。放射組織は、単列、放射柔組織よりなるが、分野壁孔が確認できないか、もしくはヒノキ型でヒノキかサワラか区別できないもので、これをヒノキ属の材とした。

10. アスナロ *Thujopsis dolabrata* Sieb. et Zucc. Cupressaceae 写真図版70：10 (MYG-2387)

垂直・水平樹脂道をともに欠く針葉樹材。早材から晩材への移行はヒノキ類に比して緩やかで、年輪界ははっきりしている。樹脂細胞は、晩材部に散在し、水平壁は、結節状に肥厚する。放射組織は単列で比較的背が低く、放射柔組織からなる。分野壁孔は、小型のトウヒ～ヒノキ型で、1 分野に 1～4 個存在する。

以上の形質によりヒノキ科のアスナロの材と同定した。本州・四国・九州の冷温帯から亜高山帯に分布する。材は軽軟で、木理は通直、割裂は容易で、耐朽力が強い。

11. ヒノキ科 Cupressaceae 写真図版70：11 (MYG-2507)

垂直、水平樹脂道をともに欠く針葉樹材。樹脂細胞の水平壁は、結節状になる。放射組織は、単列同性で、放射柔細胞のみからなるが、分野壁孔がまったく確認できないもので、属の区別も困難であ

ることから、ヒノキ科の材とした。

12、13. カヤ　*Torreya nucifera*（L.）Sieb. et Zucc.　Taxaceae　写真図版 70：12（MYG-2589）、71：13（MYG-2832）

水平・垂直樹脂道を欠き、早材から晩材にかけての移行は緩やかだが、年輪界は明瞭。樹脂細胞は認められず、仮道管内壁にらせん肥厚が、2～3 本ずつまとまって斜めに存在する。放射組織は、単列で背が低く放射柔細胞からなる。分野壁孔は、非常に小型のヒノキ型で、一分野 2～6 個。

以上の形質により、イチイ科のカヤの材と同定した。本州（宮城県以南）・四国・九州の暖温帯に分布する。材は、木理通直で、堅硬、緻密、弾性が強く耐朽力は強い。

14. オニグルミ　*Juglans mandshurica* Maxim. Var. *sachalinensis*（Miyabe et Kudo）Kitamura　Juglandaceae　写真図版 71：14（MYG-2665）

中型で楕円形の管孔が、晩材部に向かって徐々に径を減じながら放射方向に配列する散孔材で、管孔は単独と放射方向に 2～3 個複合するものがある。木部柔組織は、1 細胞幅で接線状に配列する。道管の穿孔は単一。道管内にはチローシスが見られる。放射組織は、2～4 細胞幅で、同性。

以上の形質により、クルミ科のオニグルミの材と同定した。北海道・本州・四国・九州の冷温帯から暖温帯の川沿いの湿気の多いところに生え、実は食用とされる。

15. サワグルミ　Pterocarya rhoifolia Sieb. et Zucc.　Juglandaceae　写真図版 71：15（MYG-1954）

中型の丸い道管が、単独、あるいは放射方向に 2～3 個複合して放射方向にややまとまって散在する散孔材。管孔の直径は、年輪界に向けて徐々に減少する。道管の穿孔は、単一。木部柔組織は、接線状で著しく、放射組織は 2 列同性。

以上の形質により、クルミ科のサワグルミの材と同定した。北海道・本州・四国・九州の冷温帯の山地の川沿いに生える。

16. ヤナギ属　*Salix* sp.　Salicaceae　写真図版 72：16（MYG-2892）

単独あるいは、放射方向に 2～3 個複合した小型の道管が、やや密に均一に散在する散孔材。管孔の直径は、年輪界に向け減少する。道管の穿孔は単独で、道管相互の壁孔は、比較的大きな多角形で、交互状で密に分布する。放射組織は、単列異性。放射組織、道管相互の壁孔が蜂の巣状を呈す。

以上の形質により、ヤナギ科のヤナギ属に同定した。ヤナギ属は、日本に 2 亜属 34 種があり、材の形質でこれらを区別する事は、できていない。

17. ハンノキ属ハンノキ節　*Alnus* sect. *Gymnothyrsus*　Betulaceae　写真図版 72：17（MYG-2867）

単独あるいは、放射方向に複合した小型のやや角張った薄壁の管孔が、均一に分布する散孔材。道管の穿孔は、横棒が 20 本以上の階段状。道管相互壁孔は、交互状で小さく、密に分布している。木部柔組織は、散在状で目立たない。放射組織は、単列同性のものと、集合状のものがある。

以上の形質により、カバノキ科のハンノキ属のうち集合放射組織が普遍的に見られる、ハンノキ節と同定した。ハンノキ節にはケヤマハンノキ、ハンノキなど 7 種が知られているが、材の形質での区別はできていない。

18. クマシデ属イヌシデ節　*Carpinus* sect. *Eucarpinus*　Betulaceae　写真図版 72：18（MYG-2928）

単独あるいは、放射方向に 2～3 個複合した小型の丸い管孔が、放射方向に幅広い帯状をなして、散在する散礼材。道管の穿孔は、単一だが、まれに数本の横棒からなる階段状が混じる。道管内壁には、かすかにらせん肥厚があり、木部柔組織は、一細胞幅で、接線状をなしている。放射組織は、1～3 細胞幅くらいの同性に近い異性で、時に集合放射組織を含む。

以上の形質により、カバノキ科クマシデ属イヌシデ節の、イヌシデかアカシデの材だと同定した。両種とも本州・四国・九州の冷温帯から暖温帯に分布し、イヌシデは、平野部の 2 次林に多い。

19. クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　Fagaceae　写真図版 73：19（MYG-1183）

大型で丸い道管が、年輪のはじめに 1～2 層ならび、そこから徐々に径を減じた薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は、単一。時にチローシスが見られ、木部柔組織は、晩材部で単接線状。放射組織は、単列同性。

以上の形質によりブナ科のクリの材と同定された。クリは、北海道・本州・四国・九州の冷温帯から暖温帯にかけて広く分布する。特に平野丘陵部の 2 次林に多い。実を食用とするほか、薪炭材等にも使われる。

20. ブナ属　*Fagus* sp.　Fagaceae　写真図版 73：20（MYG-2853）

小型でやや角張った管孔が、単独、または複合して年輪界に向け徐々に径を減じながら密に散在する散孔材。道管の穿孔は単一、または横棒の少ない階段状。放射組織は、1～数細胞幅のものと、非常に幅広いものまであり、同性に近い異性。

以上の形質より、ブナ科のブナ属の、ブナ、イヌブナのどちらかの材と同定された。ブナは、北海道から九州にかけての冷温帯に、イヌブナは本州・四国の太平洋側の冷温帯下部に多い。

21. コナラ属コナラ節　*Quercus* sect. *Prinus*　Fagaceae　写真図版 73：21（MYG-2566）

年輪のはじめに大型で丸い管孔が、1～2 層ほどならび、晩材部では、小型で薄壁の角張った管孔

が、幅のせまい火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は、単一、時にチローシスが見られる。木部柔組織は、接線状。放射組織は、単列同性のものと複合放射組織からなる。

以上の形質により、ブナ科のコナラ属コナラ節の、カシワ、ミズナラ、コナラ、ナラガシワのいずれかの材と同定された。

22. コナラ属クヌギ節　*Quercus* sect. *Aegilops*　Fagaceae　写真図版 74：22（MYG-1905）

大型で丸い管孔が、年輪のはじめに 1～2 層ほどならび、晩材部では、中～小型で厚壁の丸い管孔が放射状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。時にチローシスも見られ、木部柔組織は、1～3 細胞幅の接線状～短接線状。放射組織は、単列同性のものと、複合放射組織からなる。放射組織と道管の壁孔は、柵状。

以上の形質より、ブナ科コナラ属クヌギ節のクヌギ、アベマキ、いずれかの材と同定された。クヌギは本州の暖温帯に広く分布し、アベマキは本州中部以西の暖温帯分布することから、本遺跡出土材は、クヌギであると考えられる。

23. コナラ属　*Quercus* sp.　Fagaceae　写真図版 74：23（MYG-2816）

小型で丸い管孔が晩材部に見られる。道管の穿孔は単一。放射組織は、単列同性のものと、複合放射組織からなる。

以上の形質よりブナ科のコナラ属の材と同定した年輪界が取得できておらず、木口面がはっきりしないため属までの特定にとどめた。

24. ムクノキ　*Aphananthe aspera*（Thunb.）Planch　Ulmaceae　写真図版 74：24（MYG-2475）

中型で厚壁の丸い管孔が、単独あるいは放射方向に 2～3 個複合してまばらに散在する散孔材。道管の穿孔は、単一。木部柔組織は、連合翼状から数細胞幅の帯状。道管の穿孔は、単一。放射組織は 1～4 細胞幅の比較的きれいな紡錘形をした異性。時に、直立細胞に結晶を持つ。

以上の形質によりニレ科のムクノキの材と同定したムクノキは本州（関東以南）・四国・九州・琉球の暖温帯の向陽適潤地に生える。材は強靭で、葉は研磨用に利用される。

25. エノキ属　*Celtis* sp.　Ulmaceae　写真図版 75：25（MYG-1920）

大型で丸い管孔が、年輪のはじめに 1～2 層ならび、そこから急に径を減じた薄壁の角張った小道管が多数斜め接線方向に配列する環孔材。道管の穿孔は、単一。小道管内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は、1～8 細胞幅くらいの紡錘形となり、ふつう鞘細胞を持つ。

以上の形質により、ニレ科エノキ属の材と同定された。日本には、エゾエノキ、エノキ、コバノチョウセンエノキ（近畿以西）、クワノハエノキ（山口・九州・琉球・小笠原）の 4 種があるものの、材の形質からは区別できていない。

26. ニレ属　*Ulmus* sp.　Ulmaceae　写真図版 75：26（MYG-2271）

大型で丸い管孔が、年輪界のはじめに 1～2 層ならび、そこから急に径を減じた薄壁の小道管が、帯状あるいは、斜め接線方向に配列する環孔材。道管の穿孔は、単一。小道管の内壁には、らせん肥厚がある。放射組織は、1～5 細胞幅で、同性。木部柔細胞に大型の数珠状の結晶細胞が見られる。

以上の形質によりニレ科ニレ属の材と同定された。ニレ属には、ハルニレ、オヒョウ、アキニレの 3 種があるが、材の形質からは区別できていない。

27. ケヤキ　*Zelkova serrata*（Thunb.）Makino　Ulmaceae　写真図版 75：27（MYG-2828）

大型で丸い管孔が年輪のはじめに並び、そこから急に径を減じた薄壁の角張った小道管が、多数集まって帯状から斜め接線方向に連なる環孔材。道管の穿孔は、単一。小道管の内壁には、顕著ならせん肥厚がある。放射組織は、1～8 細胞幅くらいの紡錘形の異性。時に、放射組織の上下端や多列部の縁には、大型の結晶細胞が見られる。

以上の形質によりニレ科ケヤキの材と同定された。本州・四国・九州の冷温帯から暖温帯に広く分布し、温暖な地方の肥沃地や渓畔に良く生、また農家の屋敷林や、社寺林によく植えられる。

28. ヤマグワ　*Morus bonbycis* Makino Moraceae　写真図版 76：28（MYG-2656）

大型で丸い管孔が、単独あるいは 2～3 個接線放射方向に数個複合して年輪のはじめにならび、晩材部では、やや小さい管孔が集まって、斜め方向に複合する傾向のある環孔材。道管の穿孔は、単一で、小道管の内壁には、らせん肥厚がある。木部柔組織は、周囲状。放射組織は、1～7 細胞幅くらいの異性。

以上の形質から、クワ科のヤマグワの材と同定した。北海道・本州・四国・九州・琉球の亜寒帯～暖温帯の林内及び川沿いの湿潤地に生える。

29. モクレン属　*Magnolia* sp.　Magunoliaceae　写真図版 76：29（MYG-2817）

小型で薄壁の管孔が、単独あるいは数個放射方向に複合して密に分布する散孔材。管孔の直径は、年輪界に向けて徐々に減少する。道管の穿孔は、単一。道管相互の壁孔は階段状。放射組織は、1～3 細胞幅、同性に近い異性。道管との壁孔は、対列状～階段状。

以上の形質から、モクレン科のモクレン属の材と同定した。モクレン属には、落葉性の、ホオノキ、オオヤマレンゲ、シデコブシ、コブシ、タムシバがある。本遺跡出土材は分布の仕方などからホオノキである可能性が高いが、材の構造からは、はっきりと種を認識できていない。

30. カツラ　*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc. Cercidiphyllaceae　写真図版 76：30（MYG-1984）

小型で薄壁の角張った管孔が単独で、密に分布する散孔材。道管の穿孔は、20～30 本ほどの横棒からなる階段状。道管の内部には、チローシスが著しい。放射組織は、異性で、2 細胞幅。道管との壁

孔は、階段状。

以上の形質から、カツラ科のカツラの材と同定された。カツラは、北海道・本州・四国・九州の亜高山帯から冷温帯に分布し、山地の特に谷沿いに生育する。

31. ウツギ　*Deutzia crenata* Sieb. et Zucc.　Saxifragaceae　写真図版77：31（MYG-2641）

きわめて小さな小道管が、ほぼ単独で、まばらに散在する散孔材。道管の穿孔は、きわめて多数の横棒からなる階段状。木部柔組織は散在していて目立たない。放射組織は、1～3 細胞幅で、異性で、背が極めて高く、直立細胞・平伏細胞ともに形・大きさなどが不揃いである。

以上の形質から、ユキノシタ科のウツギの材と同定された。北海道・本州・四国・九州の冷温帯～暖温帯の路傍、崖などの山野の日当たりの良い場所に見られる。

32. ヤマザクラ　*Prunus jamasakura* Sieb. et Zucc.　Rosaceae　写真図版77：32（MYG-1950）

丸い単独あるいは、数個複合した中～小型の道管が、密に分布する散孔材。道管内部には、しばしば茶褐色のゴム状物質が充填されている。道管穿孔は、単一で、内壁には、らせん肥厚を持つ。道管相互の壁孔は、小孔紋状。木部柔組織は、散在状で目立たない。放射組織は、同性に近い異性で、2～5 細胞幅くらい。時に結晶を持つ。

以上の形質により、バラ科サクラ属のヤマザクラの材と同定した。本州（宮城・新潟以西）・四国・九州の冷温帯～暖温帯に分布する。

33. フジ　*Wisteria floribunda*（willd.）DC.　Leguminosae　写真図版77：33（MYG-1934）

大型で丸い管孔が、ほぼ単独で年輪のはじめに 1～2 層ならび、晩材部では、きわめて小型で薄壁の道管が、木部柔組織とともに多数集まって帯状に分布する。時に中型の道管が、単独あるいは塊状に分布する。道管の穿孔は、単一で、小道管の内壁には、らせん肥厚がある。木部柔組織は、周囲状で、晩材部では、小道管とともに階層状に配列する。放射組織は、異性で、1～6 細胞幅程度。

以上の形質により、マメ科のフジの材と同定した。本州・四国・九州の低山地や、平地の林縁、崖、林中などに普通に見られる。

34. シラキ　*Sapinum japonicum*（Sieb. et Zucc.）Pax et K. Hoffm.　Euphorbiaceae　写真図版78：34（MYG-2453）

小型で厚壁の丸い管孔が、2～4 個放射方向に複合し、まばらに散在する散孔材。道管の穿孔は単一で、壁孔は交互状を呈す。木部柔組織は、短接線状である。放射組織は、単列異性。

以上の形質により、トウダイグサ科のシラキの材と同定された。本州（岩手・山形以南）・四国・九州・琉球の山地に生える。名は、樹皮が白いことに因むといわれている。

35. カエデ属　*Acer* sp.　Aceraceae　写真図版 78：35（MYG-2722）

やや小型で丸い管孔が、単独あるいは 2～4 個複合してまばらに散在する散孔材。道管の穿孔は単一で、内壁には微細ならせん肥厚がある。道管内部には時として淡褐色のゴム状の物質が詰まっている。木繊維は、雲紋状を呈すこともあり、木部柔組織は、年輪界付近でしばしば結晶を持つ。放射組織は、同性で 5～8 細胞幅ぐらいである。

以上の形質により、カエデ科のカエデ属の材と同定された。カエデ属には 28 種含まれるが、材により区別はできていない。

36. トチノキ　*Aesculus turbinata* Blume　Hippocastanaceae　写真図版 79：36（MYG-2740）

小型の楕円の管孔が、放射方向に 2～4 個複合して密に散在する散孔材。道管の穿孔は単一で、道管内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は、単列同性で階層状に配列する。

以上の形質により、トチノキ科のトチノキの材と同定した。トチノキは、北海道・本州・四国・九州の主として冷温帯の、深山の渓流沿いの肥沃地に生える。

37. ミツバウツギ　*Staphylea bumalda*（Thumb.）DC. Staphyleaceae　写真図版 79：37（MYG-2291）

小型で薄壁の角張った管孔が、ほぼ単独、あるいは、2、3 個複合して散在する散孔材。道管の穿孔は、横棒が 30 本を越えるものがある階段穿孔。放射組織は 1～6 細胞幅の異性。多列部は平伏細胞のみから、単列部と単列放射組織はすべて直立細胞からなりいずれも背が高い。放射組織と、道管の壁孔はやや大振りの楕円形が、対列状に並ぶ。

以上の形質により、ミツバウツギ科のミツバウツギの材と同定した。北海道・本州・四国・九州の林縁や薮に自生する。

38. ツゲ　*Buxus microphylla* Sieb. et Zucc. Var. *japonica*(Muell. Arg. Ex Miq) Rehder et Wils.　Buxaceae　写真図版 79:38(MYG-2438)

きわめて小型で、丸い厚壁の管孔が、単独でややまばらに均一に分布する散孔材。道管穿孔は、横棒の少ない階段状。木部柔組織は、短接線状。放射組織は、1～2 細胞幅の典型的な異性。

以上の形質により、ツゲ科のツゲの材と同定された。本州（関東以西）・四国・九州・屋久島の暖温帯に稀に分布する。

39. ケンポナシ属　枝・幹材　*Hovenia* sp.　Rhamnaceae　写真図版 79：39（MYG-2769）

幹材：大型で丸い厚壁の管孔が、単独あるいは 2～3 個放射方向に複合して年輪界に並び、晩材部では、小型で厚壁の管孔が、単独あるいは放射方向に 2～3 個複合して、まばらに散在する環孔材。管孔の直径は、早材から晩材にかけて緩やかに減少する。道管穿孔は、単一で、内部にはチローシスが見られる。木部柔組織は、周囲状～連合翼状。放射組織は、1～6 細胞幅程度で異性。単列部は背

が低い。

以上の形質によりクロウメモドキ科のケンポナシ属の幹あるいは枝の材と同定された。

40. ケンポナシ属　根材　*Hovenia* sp.　Rhamnaceae　写真図版 80：40（MYG-1928）

根材：幹材に比べ、大型の管孔が放射方向に複合して年輪界に沿って並ぶ。中心に随がないことより板材とわかる。

以上の形質により、クロウメモドキ科のケンポナシ属の根の材と同定された。ケンポナシ属には、奥尻島・本州・四国・九州に分布するケンポナシと、本州（西部に多い）・四国に分布する、ケケンポナシがあるが、材構造では区別されていない。

41. ミズキ　*Cornus controversa* Hemsley Cornaceae　写真図版 80：41（MYG-2800）

小型で丸い管孔が、単独あるいは 2、3 個放射方向に複合してややまばらに散在する散孔材。管孔の直径は、年輪界に向けて、緩やかに減少する。道管の穿孔は、横棒が 20～30 本ほどの階段状。木部柔組織は異性で、2～4 細胞幅で上下端に直立細胞を持つ細長い紡錘形のものと、直立細胞からなる背の低い単列のものがある。

以上の形質により、ミズキ科のミズキの材と同定された。北海道・本州・四国・九州の冷温帯～暖温帯に広く分布する。

42. クマノミズキ類　*Cornus* cf. *brachypoda* C. A. Meyer　Cornaceae　写真図版 80：42（MYG-2648）

やや小型で丸い管孔が、ほぼ単独で散在する散孔材。道管の穿孔は、20～30 本ほどの横棒からなる階段状。木部柔組織は、短接線状。放射組織は、異性で 2～4 細胞くらい、上下端に直立細胞を持つ紡錘形のものと、直立細胞からなる単列のものがある。

以上の形質から、ミズキ科のクマノミズキ、もしくは、ヤマボウシのいずれかの材と同定された。ミズキとは、管孔が単独であることで区別される。

43. ウコギ属　*Acanthopanax* sp.　Araliaceae　写真図版 81：43（MYG-2452）

小型で薄壁の角張った道管が、多数複合しながら接線方向～斜め接線方向に配列した散孔材で、道管の穿孔は単一。管孔の直径は、年輪界に向けて徐々に減少し、内部には、チローシスが著しい。放射組織は、異性で、8 細胞幅くらい、背が高く、構成細胞が大きく、粗雑なさや状を呈す。

以上の形質により、ウコギ科のコシアブラを除いたヤマウコギ、オカウコギなどのウコギ属の材と同定された。

44. タラノキ　*Aralia elata* (Miq.) Seemann　Araliaceae　写真図版 81：44（MYG-2649）

やや大型で丸い管孔が、単独かあるいは 2、3 個複合して年輪のはじめに数列集合し、晩材部では、

小型で薄壁の管孔が斜め接線方向～接線状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一で、チローシスが著しい。放射組織は異性で、5 細胞幅くらいで、さや状になる傾向がある。道管放射組織間の壁孔は、大振りの楕円形で交互状。

以上の形質により、ウコギ科のタラノキの材と同定された。北海道・本州・四国・九州の冷温帯～暖温帯の低地の 2 次林に生える。

45. ハリギリ　*Kalopanax pictus*（Thunb.）Nakai　Araliaceae　写真図版 81：45（MYG-1907）

大型で丸い管孔が、年輪界にほぼ 1 層に並び、晩材部では、薄壁で丸みを帯びた小道管が、多数集まって接線状から、斜め接線状に帯状に連なる環孔材。管孔の直径は、早材から晩材にかけて、急に減少する。道管の穿孔は単一で、らせん肥厚は見えない。放射組織は、細胞が粗雑な異性で、4～6 細胞幅くらい。道管と放射組織間の壁孔は、比較的大振りな楕円形で交互状。

以上の形質により、ウコギ科のハリギリの材と同定した。北海道・本州・四国・九州の冷温帯～暖温帯の山地の林内に生育する。

46. エゴノキ属　*Styrax* sp.　Styracaceae　写真図版 92：46（MYG-2178）

小型で薄壁の道管が、放射方向に、2～4 個複合して散在し、晩材部では道管は減り、木繊維とあまり変わらない程度まで径を減じる。道管の穿孔は、横棒が 10 本前後からなる階段状。木部柔組織は晩材で目立ち、1 細胞幅の短接線状。放射組織は、3 細胞幅の異性。

以上の形質により、エゴノキ科のエゴノキ属の材と同定した。エゴノキ属には、エゴノキ、ハクウンボク、コハクウンボクがあるが、材構造では区別できていない。

47. トネリコ属　*Fraxinus* sp. Oleaceae　写真図版 82：47（MYG-1918）

大型で厚壁の丸い道管が、年輪のはじめに並び、そこから急に径を減じた中～小型の厚壁で丸い小道管が、放射方向に数個複合して散在する環孔材である。木部柔組織は、周囲状および連合翼状。道管の穿孔は、単一で、道管相互の壁孔は、きわめて小さく密に交互状に配列する。放射組織は、2～4 列同性で、背があまり高くない。

以上の形質より、モクセイ科のトネリコ属の材と同定した。トネリコ属は、ヤチダモ、アオダモ、トネリコ等 9 種があるが、材構造では区別できていない。

48. ムラサキシキブ属　*Callicarpa* sp.　Verbenaceae　写真図版 82：48（MYG-2508）

小型で、やや丸い厚壁の道管が、単独、あるいは、放射方向に数個複合して散在する散孔材。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔が小型で密に分布する。放射組織は、不揃いな配列で、3 細胞幅、異性で背が高い。

以上の形質により、クマツヅラ科のムラサキシキブ属の材と同定された。ムラサキシキブ属は、暖温帯に多い落葉低木でムラサキシキブ、ヤブムラサキ等 9 種が含まれているが、材構造では区別でき

ていない。

49. ニワトコ　*Sambucus racemosa* L. subsp. *Sieboldiana*（Miq.）Hara Caprifoliaceae　写真図版83：49（MYG-2476）

小型で角張った薄壁の管孔が、年輪界に向けて少しずつ径を減じながら散在する散孔材。年輪界付近では、平たい小道管が並ぶ。晩材部では、単独あるいは、2～3個複合した管孔が斜め接線方向に連なる傾向を見せ、年輪の終わり部分では、ごく小型の道管が帯状になる。道管の穿孔は単一。木部柔組織は目立たず、放射組織は、2～4細胞幅の異性。不揃いな鞘状細胞を持ち、輪郭は比較的整った紡錘形をしている。

以上の形質により、スイカズラ科のニワトコの材と同定した。本州・四国・九州に分布し標高1800ｍまでの低地と、山地の薮や林に普通に見られる。

50. 散孔材の一種　Diffuse porous wood　写真図版83：50（MYG-2869）

中～小型で丸い管孔が、単独あるいは、2、3個複合して密に散在する。道管穿孔は、横棒の多い階段状。道管相互の壁孔は、小さく対列状で密に存在する。放射組織は、1～4細胞幅、異性。

一見、ミズキの材に似るが、道管の大きさ、分布密度などから異なる材である可能性があるため同定には至っていない。

51. 樹皮　Bark　写真図版83：51（MYG-2529）

樹皮部分の切片を作成したもの。記載がないので、木質部が全くなかったかどうかはわからないが、樹皮部分が、使用されていたことになる。製品は、漆器の椀の口縁部と、不明品である。

考　察

以上同定された結果を集計したものが第30表である。もっとも多いのはクリ(197点、23%)とモミ属(173点、20.2%)で、他の樹種はこれらに比べると少なく、比較的多いのはヒノキ(59点、6.9%)、ケヤキ(53点、6.2%)、スギ(52点、6.1%)、アカマツ(37点、4.3%)、サワラ(31点、3.6%)、コナラ属のコナラ節(29 点、3.3%)などである。後述するように、クリはその多くが建築、土木用材等であり、モミ属も多くはそうであるが、その他、曲物、祭祀具等広い用途を見せている。このような用途を各器種ごとに見ていくと次のようになる。

第30表　山王遺跡多賀前地区出土木製品の樹種

樹種	容器等	祭祀具	工具等	服飾具等	木簡等	食膳発火具	建築材等	その他	自然木	合計
モミ属	31	6	4	3	6		98	22	3	173
アカマツ	2	0	1			14	15	4	1	37
クロマツ			1			10	6	3		20
マツ属	1					5	5	3	2	16
スギ	33	8	2	1	0	4	2	2		52
コウヤマキ	1									1
ヒノキ	37	10	1	3	3	2	1	2		59
サワラ	20	4		1	2	2		2		31
ヒノキ属	2									2
アスナロ	2									2
ヒノキ科	4	1								5
カヤ	2						11	1		14
オニグルミ									1	1
サワグルミ									1	1
ヤナギ属		1					6	2	8	17
ハンノキ節							2	6	5	13
イヌシデ節			1				2	4		7
クリ		1	2	3	1		152	31	7	197
ブナ属	3						8	2	1	14
コナラ節	3	0	1				16	6	2	28
クヌギ節			1				2	11		14
コナラ属								1		1
ムクノキ								1		1
エノキ属									1	1
ニレ属	2			1			2			5
ケヤキ	27						23	3		53
ヤマグワ								1		1
モクレン属							4	4		8
カツラ	1						1		1	3
ウツギ						1		1	1	3
ヤマザクラ								1		1
フジ								1		1
シラキ			1							1
カエデ属			1				7	3	6	17
トチノキ							1	1		2
ミツバウツギ							1			1
ツゲ				1						1
ケンポナシ属							1		1	2
ミズキ							1	1	1	3
クマノミズキ類							1	2		3
ウコギ属			1					2		3
タラノキ								2		2
ハリギリ				1					1	2
エゴノキ属	1							1		2
トネリコ属							2	2		4
ムラサキシキブ属			1			1				2
ニワトコ								1		1
散孔材									1	1
樹皮	1							3		4
同定不可能	15			1			4	3		23
計	188	31	18	15	12	39	374	135	44	856

1　容器等（第 31 表）

曲物

曲物は、土器では不足する用途を補う日常容器として広く使われ、木製容器として最も多く出土している。曲物の樹種を決定する要因である、製作上一番困難なことは、鋸を使わずに薄い板を取ることである。曲物は、薄板を円形に曲げて作る容器であるから、分厚い板では曲げにくい。しかし、鋸を使えば曲げたときに裂け目がでる。そのため、割裂性が良く道管等が無く均質な針葉樹が選ばれた(農商務省山林局　1912)。

一般的に遺跡出土の曲物用材としては、ヒノキが圧倒的に多く約 70%を占め、スギ、モミ、アスナロ、サワラも用いられる。特に近畿地方でヒノキが多いという傾向が激しく、東海・関東ではスギ材が比較的多く使われ、針葉樹材が曲物全体の 97%を占める(島地・伊東　1988)。今回は、曲物計 131 点中モミ属 30 点、スギ 32 点、ヒノキ 35 点と三種がほぼ同数と並んだ(三種合計で 74%)。特にモミ属がヒノキ、スギとほぼ同数になるほど使用されたことが山王遺跡の特徴である。特にヒノキに匹敵するほどモミ属が使われた例は、他に知られていない。モミ属は、曲物として使えないことはないが、材が軽軟で木瘠をなすため、ヒノキやスギより材質が劣り、水漏れに対して弱いのであまり使用されない。これら 3 種以外でもアスナロは「あて」と呼ばれ好んで使用され、マツ属は、小物の曲物で用いられることがある(農商務省山林局　1912)。実際、山王遺跡でもアスナロ 2 点とアカマツの曲物（側板）が 2 点確認されている。

他の針葉樹材は、カヤ 13 点、ヒノキ科 5 点、コウヤマキ 1 点等の樹種が使われている。これらの中で、特徴的な樹種はコウヤマキである。コウヤマキは、福島に隔離分布しているが、主に関西地方の材である。ごく普通の底板の破片であるが、中央から国司の派遣とともに流入した移入品だと考えられる。

広葉樹材ではケヤキが 1 点のみ使用されていた。これは蓋板であるので、側板のように曲げに耐える必要性がなく、針葉樹の代用材であろう。

曲物の形状を詳しく見てみると、最も多く出土しているのは曲物の底板である。表 31 中で蓋板、底板、側板に分けて集計したが、これら曲物の部品毎の特徴ははっきりと認められず部品別の樹種の使い分けはしないようである。

挽物

最古の挽物は、弥生時代の唐古遺跡出土のものであるとされているが、一般集落への普及は、11 世紀以降である。9 世紀当時は、朝廷下で轆轤工という専業集団がいて、彼らが製品を朝廷や官衙に供給していた。多賀城もその例外ではなかったようで、城柵内に工房跡と考えられる半製品や木製品が出土する鴻池地区が見つかっている。更に木簡も、「合四種　大佐良十枚　足坏佐良十枚（欠損）」と書かれたものが見つかっており、注文票であると考えられている。挽物の法量に斉一性がみられ、山王遺跡とほぼ一致することからも、何らかの規格があったか、限られた人数で制作していることが指摘できる。

挽物に用いられた材は、ケヤキへの集中が著しく9割を占める。轆轤成形という特徴を持つ挽物に適合する樹種は、刃物を当てたとき滑らかに削れるような、材中の硬軟の差が無く靭性があり質堅い樹種がよい。堅い樹種は加工しにくいと考えがちだが、挽物では材質が堅くなければ光沢がでず、轆轤成形の際横摺りが出る。適応樹種としては、白木の光沢の良さから、サクラ、イタヤカエデ、ウメ、モモ等の散孔材が珍重されるが、材料が大量に手に入らないため、環孔材を示すが材は堅く、靭性があって狂いも少ないケヤキの材が挽物には多用される（農商務省山林局　1912）。

ケヤキ以外では、今回の調査ではサワラとカツラが1点ずつ出土している。カツラの材質は、柔らかいが靭性があり、保存性という点はケヤキに劣る。だが、カツラを挽物として製作する事に困難な点は特にない。しかし、針葉樹のサワラは挽物用材として適した使用とは言い難い。

しかし、8〜9世紀の主に平城京・平安京の挽物用材は計51点中16点までがヒノキで他には、トチノキ6点、ケヤキ6点、ホオノキ、モクレン属、サクラ属、カツラ、マツ属、カヤ、クスノキが各1点で残りは不明材である(島地･伊東 1988)。広葉樹材は、前述した理由より適材であるが、針葉樹材であるヒノキが一番多い。ヒノキの材質としては晩材がわずかであるから、モミ属やスギのような硬軟の差が激しい針葉樹材よりは適材だが、現代的な考え方では山王の方が適材利用だと言える。

日常的にヒノキを多用していたことの一環とは考えにくい。周辺から挽物が取れるだけの大きさの広葉樹が調達しにくくなっていたと考えるほうが妥当であろう。

第31表　容器等の用材の樹種

樹種	曲物・折敷等							その他				
	蓋	底	側板	楕円形	方形	その他	小計	挽物	刳物	蓋板	栓	漆器
モミ属	4	9	2	6		9	21			1		
アカマツ			1			1	1					
マツ属		1					1					
スギ	2	20	1	1		8	24			1	1	
コウヤマキ		1					1					
ヒノキ	4	16	4	1	1	9	26		1			1
サワラ	6	7	1			4	14	1				1
アスナロ		2					2					
ヒノキ属	1					1	1					
ヒノキ科		1	1			1	2				1	
カヤ		1				1	2					
クリ												
ブナ属												3
コナラ節											3	
ニレ属												2
ケヤキ	1						1	22				5
カツラ								1				
エゴノキ属												1
同定不可	2						2					14
計	20	58	10	8	1	34		24	1	2	5	27

漆器

今回の調査対象となった山王遺跡での漆器は、基本的に木地の部分は挽物でできているので使用用材の特性としては、挽物と変わらずケヤキが最多である。しかし、より高級だと考えがちな漆器の用材は、漆塗膜により内部が保護されるので、実際は白木のものより材には選択性が見られない。挽物に適したケヤキが多いものの、同定できた漆器14点中5点とケヤキは4割にも満たない。

漆工芸の木地の最適材とは、漆を塗布したとき材の乾湿で生ずる狂いがないもの、瘠の原因である不均一な収縮の少ないものが良く、ヒノキ、サワラ等が最適とされる。これらを木地とした場合は、組物のようなものに適しており今回のような挽物の木地には適さない。(農商務省山林局　1912)。

刳物

今回は、1点ヒノキのみの出土であった。

蓋板

樹種は、モミ属とスギである。曲物の蓋として使用されていた可能性がある製品だが、樹種も曲物と一致するため曲物の付属物ではないかと思われる。

2　食膳具・発火具（第32表）

箸

箸も挽物と同じく、9 世紀頃に村落跡より出土することはほとんどなく、主に、都城遺跡から出土しており、粗製品が多いことも特徴である。

形状からでは、いわゆる「柳箸」と言われる両端を細く削ったものと、断面形の四角い角箸と言われるものが2種出土した。箸の種類として、杉箸と柳箸は一度きりの使用にとどまるもの、という性格がある。そのようにして考えると、完形品の出土がある柳箸のサワラ、スギと角箸のスギは、消耗品とも考えられる。

箸の適材の条件は、臭味が無く、肌目が細かく粘りのある木が良いとされる（農商務省山林局1912）。ムラサキシキブ属はスギの角箸と共に旧河川跡から出土したが、杉箸と同じように消耗品か、代用材として使用した製品であろう。

第32表　食膳・発火具の用材の樹種

	箸	火錐具	つけ木
アカマツ			14
クロマツ			10
マツ属			5
スギ	2	2	
ヒノキ		2	
サワラ	2	1	
ウツギ			1
ムラサキシキブ属	1		
計	5	5	30

火鑽具

発火具としての杵や臼の適性についてはいろいろな考え方があるが、今回は火鑽杵や臼も適性は同じと考え一括して取り扱った。材自身の火付けの良さとしては、ヒノキ・マツ等が挙げられるが、これらはあくまでもすでに起こっている火に対する着火性である。今回の結果では、用材は、スギ、ヒノキ、サワラ等全て針葉樹であった。出土火鑽具の一般的傾向は、スギ、ヒ

ノキが最も多く、未調査事例でも針葉樹と報告されている物が、ほとんどである(高嶋 1985)。今回の結果も、これと一致した。

つけ木

形状的な問題は、「6. 木製品の分類 6. 2. 4 つけ木」の項で扱っている。ここでは、材質的な問題を考察する。今回これらの不定形の遺物を同定した結果、ウツギ 1 点を除き調査点数 30 点中 29 点が全て、いわゆるマツ材(アカマツ 14 点、クロマツ 10 点)と同定された。マツは、樹脂分が多いため火付けがよく、明かりとして松明に用いられる。

端が炭化していることからも火を使っていた可能性が指摘されるし、もし火を使わない他の用途に使用すると想定するならば、マツ材に限定する必要性はなく明らかに例らかの用途の為に樹種を限定したものと考えられる。一時的な火の使用でないとすれば、焦げ跡が端にだけ偏るのはおかしい。そのため今回は、これら不定形の製品をつけ木と同定した。

3. 祭祀具（第 33 表）

斎串

斎串用材は、ヒノキが 8 点と最も多く、続いてスギ 7 点、サワラ、モミ属各 4 点、ヒノキ科 1 点、クリ 1 点である。用材自体は近畿で見られるようなヒノキへの集約は見られなかった。近畿での 90% を越えるヒノキ使用率に対して(奈良文化財研究所　1980)、山王遺跡は 3 割強にとどまる上に、スギとたった 1 点しか差がない。用材から見れば、山王遺跡では祭祀具としてヒノキを用いる特殊性は見受けられない。曲物の転用材も含まれる事を考えても祭祀具として素材を重要視をしているようには見えない。これらのことを考えると、材質は、ヒノキを好むがたやすく手に入る地域ではなかった為に、モミ属等を代用材として使い、転用材等から祭祀用具はその形状が重要であり材質は 2 次的要因と考えられる。

形代

用材から見るに、形象（人形はヒノキ・モミ属計 2 点、鳥形はヒノキ 1 点、馬形はスギ 1 点、立体のヘビ形はヤナギ属 1 点）ごとの用材特性は、出土点数が 1、2 点とごく少数のため遺跡内では明らかな特徴は見出せなかった。そこで、ここでは形代として一括して考えていきたい。平城京の事例（奈良文化財研究所　1980）などを見るに、薄板状の形代もヒノキへの集約が高いが、山王遺跡では出土 6 点中ヒノキは 2 点と 3 分の 1 しか使用しておらず、斎串と同じ傾向を示す。

立体形の形代としては、今回ヘビ形が出土しているが、他にこのような類例は確認されておらず、他の祭祀との関係など興味深い。材はヤナギ属の丸木材を使用している。ヤナギ属の材は、樹皮をはがすと材自体の色調が白っぽいことから、今回のように鱗や目を墨書するような

第33表　祭祀具の用材の樹種

	斎串	形代
モミ属	4	2
スギ	7	1
ヒノキ	8	2
サワラ	4	
ヒノキ科	1	
ヤナギ属		1
クリ	1	
計	25	6

物には適しているため、使用された可能性もある。

4　服飾具等（第34表）

下駄

今回の調査では下駄として、クリ3点、ニレ属1点、ほかにハリギリ1点が確認された。

下駄材として、現代ではその軽さと肌触りの良さからキリが好まれているが、出土例としては一般的ではない。奈良文化財研究所（1980）で樹種のわかっている下駄で最も多いのは、ヒノキ22点、次にスギ8点、クリ3点、ケヤキ2点、マツ亜属、サクラ亜属、センダンとなっている。8〜11世紀の下駄は、全国的には建築材に見られるような針葉樹材を使用する傾向（山田　1993）が見られるが、山王遺跡では広葉樹材のみ使用している。9 世紀の東北では下駄材は周辺植生から直接的に選択していた様子がうかがえる。

民俗事例として雪深い地方では、耐水性を持たせるためクリ製の下駄を使用している事が知られている。中世での事例では、越前朝倉氏遺跡出土の下駄材48点の内、山王遺跡の下駄と同じ一木下駄(48点中10点)の樹種を見ると（中世以降では差歯下駄があるため）コシアブラ3点、ホウノキ2点、アカマツ、クリ、カエデ属、トチノキ、キリ各1点ずつで特定の材への集約は見られない。クリを除けば、散孔材もしくは道管のない針葉樹材で均質な材を好む傾向がある。

櫛

古来より櫛用材としては、ツゲ、イスノキ、ウメ、ヒイラギが上品とされる(農商務省山林局　1912)。出土品中では、ツゲ、イスノキが多く、山王遺跡ではツゲ1点を使用している。ツゲは、きわめて堅く緻密で肌目も細かく狂いが少ない材である。そのうえ、粘りが強いことから櫛のように刻出しをする細かい細工物、器具材等に賞用される。表面仕上げも至って良好で磨くと光沢がでて、耐久保存性も良いため、櫛には最も適している。

桧扇

桧扇の名の由来どおり、奈良文化財研究所(1980)によれば、桧扇20点中18点まではヒノキ（スギ2点）であった。しかし、山王遺跡では、桧扇8点中モミ属とヒノキが各3点ずつで、スギとサワラは各1点ずつであった。基本的には、細長い薄板を紐でつなげて扇とするので材の粘りや加工面、芳香などからヒノキが使用されたことは想像に難くない。だが、材に粘りのないモミ属は、扇いで風を送るような製品には向いていない。本来はヒノキで作るところ、ヒノキ材が手に入りにくい為にやむなく代用材で作った飾り物的な製品である可能性がある。

桧扇自身は、都城周辺に出土することが多い製品であり、その装飾性から考えても相応の人物の居住が考えられる。烏帽子や、櫛などの服飾品などからもそのことは

第34表　服飾具等の用材の樹種

	下駄	櫛	桧扇
モミ属			3
スギ			1
ヒノキ			3
サワラ			1
クリ	3		
ニレ属	1		
ハリギリ	1		
ツゲ		1	
計	5	1	8

うかがえる。

5　工具（第35表）

工具の柄

何の工具であるかが特定できていないため適正な用材使用については考察できないが、棒状の製品が多く、磨滅などの使用痕が見られる。樹種も、アカマツ、ウコギ属、コナラ属クヌギ節、シラキ、ムラサキシキブ各1点ずつと多岐にわたり、傾向は捉えられなかった。

刷毛

山王遺跡で出土した2点中1点を調査したが、ヒノキ材であった。近畿地方の類例を見てもヒノキのみである。刷毛の製作は、良く乾燥したヒノキ材を板目に割り、板を割った部分に毛を挟み、糸等で固定する。板を割り毛を挟むことがヒノキ以外の樹種には耐えきれないためヒノキが使用される(農商務省山林局　1912)が、今回の事例はこれに一致する。

箆

適性樹種等があると思われるが、スギ1点だけの出土のため傾向がつかめなかった。箆に漆が付着しており、添付きの刷毛、内面漆の曲物とあわせて考えても漆工芸の技術者が存在していたと考えられる。

木鍾

礎板として転用されていた物1点を含む2点の出土であった。樹種は、クロマツとクリである。

第35表　工具等の用材の樹種

	工具の柄	刷毛	箆	屋根針	木鍾	横槌	机
モミ属						1	1
アカマツ	1						
クロマツ					1		
マツ属							1
スギ			1				
ヒノキ		1					
イヌシデ節							1
クリ				1	1		
コナラ節							1
クヌギ節	1						
シラキ	1						
カエデ属							1
ウコギ属	1						
ムラサキシキブ属	1						
計	5	1	1	1	2	1	5

横槌

1点のみの出土。樹種は、モミ属であった。

6　建築材（第36表）

井戸枠材

樹種はモミ属とクリに集約し、井戸枠材計102点中モミ属とクリ各36点で、全体の約7割を占めている。モミ属とクリの製品形状的な特徴は、厚板状の組物が多いのに対して、他の樹種は、丸木や加工の粗雑な製品が多く、正式な井戸粋材としては、モミとクリであったことがわかる。(ヒノキとコナラ属コナラ節には厚板状の井戸枠がある。)クリ材は、建築材全般として最も使用頻度が高い。クリは耐湿性と保存性に大変優れるため、井戸枠材のような長期間の使用に耐えなくてはならないような構造材として重用される。当時の近畿地方(8～11 世紀)では建築材にヒノキ等の針葉樹材の利用が進み、近隣の広葉樹材が使われなくなるが(山田　1993)、この傾向は、東北地方には少し遅れ12世紀以降に見られる。地方国衙である多賀城に近い山王遺跡では近畿的要素も強く見られ、建築材としてヒノキ等を使用する事が望まれたようだが、山王遺跡ではヒノキは付近に生育せず貴重品であった。そのため、ヒノキ、スギよりも劣るが大量に手に入り易いモミ属が、建築材に多用されたのではないだろうか。

近畿地方の事例を主とした出土井戸枠事例を概観するに島地・伊東（1988）井戸枠材総計94点中37点までスギで、次にヒノキ20点で針葉樹材が8割強を占める。近畿地方では、他の地域より早く8～11世紀に、建築材として、ヒノキ、スギ、コウヤマキ等を多用している。しかし、山王遺跡ではそれらに代わってモミ属が多くなり、クリの利用も盛んである。曲物の項でも述べたように、針葉樹材としてモミ属が多いのが山王遺跡の特徴である。

杭

計46点出土している。最も多いのがクリ8点、アカマツ8点、モミ属5点、カエデ属、ヤナギ属各4点、マツ属3点で、残りはクマシデ属イヌシデ節、ブナ属、コナラ属コナラ節、ニレ属、ケヤキ、モクレン属、ミズキ、クマノミズキ、トネリコ属名1点ずつである。杭は基本的に土木用材であるが、山王遺跡では何らかの樹種に集約することはなく、ほぼ雑木利用だと思われる。

出土事例でも杭材は、シイ、クリ、カシ、コナラ、ヒノキ、スギ等が多いが、多種多様な樹種が報告されている。仙台市山王遺跡の平安時代の杭材も、コナラ12点、クリ8点以外にも、カヤ、イヌガヤ、ヤナギ属、ミズメ、イヌシデ、アサダ、イヌブナ、カシワ、ヤマグワ、ホウノキ、カツラが1点ずつ出土している(島地・伊東　1988)。そのうえ山王遺跡では、杭は主に溝跡や井戸から出土しており、塀などの区画線のような杭列が、大量に出土したわけではないということも、これらに関係しているであろう。

柱

計44点中30点がクリであり柱の約7割弱をクリが占める。日本の古代住居のようにピットに、木製の柱を立てる場合には、前述するようにクリは、保存性がよく柱自身が腐朽する可能性が少ない柱に

適した材と言える。

都城の試料を中心とする出土柱材の全体的傾向を見ると、計804点中ヒノキ266点とコウヤマキ113点が突出し、針葉樹材全体では総計の66%も占め、山王の傾向に反する(島地・伊東　1988)。この2種も耐湿性に優れていることから建築材として利用されるのは当然と言えるし、この時期から全体的に山地の針葉樹材を使用する傾向が強くなってくる(山田　1993)。しかし、東北の山王遺跡ではヒノキ、コウヤマキは、建築材として利用されることはほぼなく、井戸枠材1点（ヒノキ）のみである。柱のような大型の木質遺物は現地性が高く他からの流入は難しく、山王遺跡付近にヒノキがなかったと考えられる根拠の一つとなり得る。山王遺跡では、ヒノキ等は手に入りにくいため、材質的に適し、な

第36表　建築材等の樹種

樹種	井戸枠	杭	柱	礎板	合　計
クリ	36	8	30	78	152
モミ属	36	5	2	55	98
ケヤキ		1	2	20	23
コナラ節	9	4	1	2	16
アカマツ	2	8		5	15
カヤ	3		4	4	11
ブナ属	6	1		1	8
カエデ属	2	4		1	7
クロマツ		3		3	6
ヤナギ属		4		2	6
マツ属		1	4		5
モクレン属		1	1	2	
イヌシデ節	1	1			
ニレ属	1	1			
スギ				2	2
ハンノキ節				2	
クヌギ節		1		1	2
トネリコ属		1		1	
ヒノキ	1				1
ミツバウツギ	1				
カツラ				1	1
トチノキ				1	1
ケンポナシ属				1	
ミズキ		1			1
クマノミズキ類		1			
同定不可能	4				
計	102	46	44	182	374

おかつ付近に多いクリ材を使用する結果となったのであろう。他の製品では、針葉樹の代用材としてモミ属を用いられていたが、モミ属は2点と少ない。これは、柱を土中に埋める住居形態では保存性からモミ属が適さないためである。

ほかには、針葉樹としてマツ属4点、カヤ4点、広葉樹としては4世紀以前には建築材として多用されたケヤキ2点、コナラ属コナラ節1点、モクレン属1点が出土している。

礎板

クリが最も多く、計182点中78点約42%を占める。次に、モミ属が多く55点約31%、ケヤキ20点約11%以下は、アカマツ、カヤ、クロマツ、スギ、ヤナギ属、ハンノキ節、モクレン属、コナラ節、と続くが突出した樹種はない。柱材と同じく、クリは耐湿性があるために、礎板のような土中に埋まっているものには適した材と言える。しかし、礎板自体転用材が多く、何らかの建築材の一部を荒割りした物と思われる物も多い。そのため、礎板自身の材質は多岐にわたり、柱などの地上部建築材ほどには選択性が見受けられない。集約の見られるモミ属とクリが多いのは、他製品と同じ傾向として考えて良いと思われる。しかし、ケヤキに集約が見受けられ柱等とは違う傾向を示している。8〜11 世紀では、材利用の傾向として周辺の平地で得られる広葉樹材利用から、山地から製材製品として針葉樹材を切り出すようになる移行期にあたる。東北地方もこれらは例外ではなく、7 世紀頃まではコナラ属やクリ、ケヤキ材を建築材として使用していたにも関わらず、8 世紀頃から建築材に針葉樹材を使用するようになる(山田　1993)。地中に埋まる礎板は、柱自体ほど重要視をしていなかったためケヤキ材を使用する名残が残ってこのような結果になったものとと考えられる。

扉

3 点ともクリ材である。礎板として地中に埋没していたために残存したが、具体的に地上部の建築物が出てくる数少ない例であるが、これらもクリであったことから、井戸枠、礎板と違い山王遺跡での柱や扉などの地上部建築材は主にクリ材を用いている傾向をさらに裏づけられた。

7　木簡（第37表）

山三遺跡としては、モミ属6点、ヒノキ3点、サワラ2点、クリ、エゴノキ属各1点、計13点が確認された。

一般的な出土事例としては、総計1839点中ヒノキが1291点を占め約70%ヒノキが使われている。それ以外の樹種は、スギが次に多く307点、マツ3点、ヒノキアスナロ、コウヤマキ、カシ、アカガシ亜属、シイ、クヌギ各1点である(島地・伊東 1988)。木簡の中ではごく少数であるが、移動の際の破損防止のためか、堅い広葉樹材も使われている。木簡の形状から、薄板が作りやすく、墨のりの良い樹脂分の少ない針葉樹材が使われていたようだ。

第37表　木簡用材の樹種

	木簡
モミ属	6
ヒノキ	3
サワラ	2
クリ	1
エゴノキ属	1
計	13

山王遺跡では、木簡においてもモミ属の使用が多いこ

とは、他の針葉樹を用いる製品と同様である(計 13 点中 6 点)。ヒノキ 3 点、サワラ 2 点とサワラを使用する事例は前述した中にはないものの、樹脂の少ない針葉樹が優占する事はかわらない。広葉樹材が、エゴノキ属とクリが各 1 点ずつ出土しているが、クリは、前述したような強度が買われて使用されたものか、単なる代用材である可能性も否定できない。エゴノキ属については、肌目が細かくやや堅く弾性もある材であるが、クリと同じ理由で使われたのかもしれない。

8　その他不明品・加工・自然木の樹種（第 38 表）

何らかの製品であるがその使用目的のわからないものを不明品とした。山王遺跡全体の特徴であるモミ属とクリがそれぞれ 18 点ずつと多いのを除けば、様々な樹種に平均的にばらついている。雑多な製品・半製品の集合体であると考えられるため、このような雑多な樹種が集合したと思われる。

何らかの加工痕を持つものを加工としたが加工も基本的には木製品の分類としては加工の程度の差のみで、樹種的性質は不明品と同じだと考えられる。加工計 42 点中クリが最多で 12 点であるが、山王遺跡の全体の特徴と重なるため、加工は半製品や未製品・破片の集合体なのであろう。

自然木としては、計 44 点を調べたがオニグルミ、サワグルミ、エノキ属（各 1 点ずつ）は、製品には全く含まれず自然木のみの出土である。また、オニグルミ、サワグルミ、ヤナギ属（8 点）等湿り気を好む樹木が出土したことは、木製品の主な出土地が旧河川跡であったことの反映で、流木等で残存したと考えられる。他には、製品にはあまり含まれなかったカエデ属が 6 点と多かったことも特徴である。製品としても挽物などの適用があるにもかかわらず、カエデ属総計 17 点中一番多いのは自然木であった。周辺の植生としてカエデ属は多く存在したが、挽物等製品として使用するには、かなりの大きさを必要とするので、利用できるほどの大木は少なかったのではないだろうか。逆に、モミ属は、製品での利用率が高く、自然木中では、44 点中 3 点のみという結果に終わった。モミ属は、山王遺跡全体の総計 863 点中 173 点と 20%を占め、クリに次ぐ多さを示している。モミ属は、仙台市周辺では丘陵地の気候的極相林(菅原　1978)であり、平野中にある山王遺跡より少し離れた場所が材の供給源となり、加工材としては多いものの周辺には少なかったものと考えられる。クリも総計中 197 点と約 23%を占め最も多く使用された材であるにも関わらず、周辺植生の比率はそれと同じではなく、意識的に建築材等にクリ材を集め利用していたと言える。

自然木の傾向を現在の仙台市周辺の植生と比較すると、山王遺跡ではカシ類の出土が無いことに気が付く。吉岡（1947）によると、現在仙台市内にウラジロカシ、アカガシ、シラカシ、アラカシが分布しているが、これらの分布は自然分布ではなく、神社仏閣の境内林や屋敷林として保存されているものであるとしている。そして、仙台市青葉区霊屋（おたまや）のカシ林は、付近に植栽されたものから鳥類によって運ばれた種子が、スギ林内に散布されそれがスギの保護の下に成長した半自然的なものであるとしている。吉岡の指摘が正しいとするならば、9 世紀頃の山王遺跡周辺にはまだカシ類が植栽されていなかったとも考えられる。カシは農具を主として優良な材質で、付近に存在していれば必ず何らかの製品として利用されていたと思われる。カシ類が使われることの多い農具の調査例がないためはっきりとは言えないものの、付近にはないと言ってよいと思われる。

仙台市周辺の丘陵地ではモミ・イヌブナ林、ブナ・イヌブナ林、コナラ2次林、アカマツ林、オニグルミ林、ケヤキ林、アカシデ林が代表的な植生である(内藤他　1994)。モミ・イヌブナ林が、広瀬川流域の海抜 300～400mでの丘陵地の気候的極相林(菅原　1978)とする報告がなされている。現在、この群落は広瀬川流域の丘陵地に小面積で点在している。しかし、東北大理学部付属植物園内でモミ林が丘陵地の斜面から尾根にかけて広く分布していることや山王遺跡での利用点数の多さを考えても9 世紀前後には伐採が進んでおらず、モミ林が現在より多く残っていたようである。現在丘陵地に広く分布しているコナラ二次林は、モミ・イヌブナ林の伐採が繰り返されてできた二次林であり、山王遺跡からもコナラ属は調査総数の 3%程度でしかない。これらのことを考えても、当時は、モミの天然植生が多く残っており、ヒノキ等が手に入りにくい山王遺跡で最も手に入り易い針葉樹材として多用された様子がうかがいしれる。

山地では広い面積を持つブナ林も丘陵地帯ではブナ・イヌブナ林として極めて小面積で分布している。東北地方の木材利用傾向としてはブナ属材の利用は8～11 世紀頃をはじめとして時代を下るにつれ多くなっていく。9 世紀の山王遺跡のブナ属材はまだ少なく（総計 863 点中 14 点,1.6%）遠方の山地まで材を取りに行くと言うよりも、丘陵地のブナ属材を利用していたと考える方が妥当であろう。

一般的に木材利用の傾向として平地の広葉樹林（近距離材）から山地の針葉樹林（遠距離材）へと時代とともに移り変わる傾向がある（山田　1993）が、これまで見てきた山王遺跡の材供給源は主に付近の丘陵地であり、その当時の近畿地方で見られるような針葉樹材を主とした山地材（遠距離材）ではないことがわかる。

まとめ

山王遺跡での木製品は、その製作上あるいは使用上の理由から樹種を限定する要因がある場合（例えば挽物のケヤキなど）には、樹種を確実に選択している。それ以外の祭祀具や桧扇のような材質等の選択が不必要な製品では、近畿圏におけるような、ヒノキへ集中は見られなかった。これらは、ヒノキが山王遺跡では分布圏外であるということが最大の要因である。だが、逆に言えば必ずヒノキを利用しなければならないという制約は、存在していないことが分かる。

近畿での祭祀具におけるヒノキの偏重は著しく、その斉一性の高さによりヒノキ自身を神聖化して見てしまう傾向もある。今回の結果では、祭祀具において材質は二次的要因であると考えられた。斎串のような木製模造品と呼ばれる祭祀具自身7 世紀後半の天武・持統朝に確立し、都城・地方官衙に政治的な祭祀として広まった。木製模造品と「延喜式」の祭料を比較した場合いくつかの共通項目を見いだせることを挙げ、木製模造品は律令的祭祀が反映されたものだと解釈された(金子　1980)。しかし、山王では、これらの祭祀具が出土したことで、律令祭祀として一定の規格を持った祭祀は実際行なわれていたと考えられるが、その材質や素材はあまり問題ではなく、祭祀具としてはまず形が表現できる事が第一であったと考えられる。

祭祀具を含めて、山王遺跡の木製品の器種構成を考えるに、ある一定以上の階層を想定される遺物が多く、多賀城と言う地方国衙のレベルの高さが示された。挽物などの一部の器種では法量に斉一性

が高い器種がいくつか見られるので、専門的に木地を挽く職業がある、もしくは何らかの規格があったものと思われる。多賀城内部には、木材の集積した工房跡と思われている区画があるので、一定の職業として木地を扱っていた専門的集団がいた可能性はある。漆器についても内面漆の曲物、添付着の刷毛・箆から、同様のことが言える。また、桧扇・烏帽子等服飾品からは、それらを必要とする階層の存在が想定され、専門的職業を持つ人々と、政庁関係者という住人の構成が考えられる。

山王遺跡全体の用材の特性としては、前述したようにモミ属の多さが挙げられる。曲物、井戸枠、祭祀具、服飾具など針葉樹材を使用する製品にモミ属が使用された。その他不明品等の項でも述べたように、現地性が高い建築材中計 370 点中スギ、ヒノキがわずか 3 点しか出土しないこと、自然木中にスギ、ヒノキが無いことを考えても付近にこれらの樹種はなかったと考えられる。そのため、材質的には劣るもののそれらの代用材として、モミ属が多用されたと考えた。ヒノキやスギは、容器のような小型製品からは、計 104 点も出土している。これらの小型製品は曲物のコウヤマキが示すように現地性の高い素材とは言えず、長距離を動かしにくい大型の製品の方が現物性が高く付近の植生を反映すると考えられる。

今回木材を調査した 9 世紀の山王遺跡では、その他不明品等の項で述べたように付近の丘陵地から材を切り出し使用していた。製品ごとの使用樹種では、9 世紀当時の近畿地方の材利用と比較して見てきたが、その当時の山王遺跡と近畿地方では丘陵部の材の豊富さにおいて大幅な違いがある。一般的傾向として近距離材（広葉樹）から遠距離材（針葉樹材）への移行、その後潅木類の使用が減る（山田　1993）傾向があるとすると、4 世紀以前から近畿地方では 3 回の都城の建築や、耕地拡大の影響もあるため付近の平地や丘陵部では供給量が足りず山地から切り出した針葉樹材を多く使用するようになっていたと思われる。しかし、山王遺跡では多賀城建設当初まで蝦夷と境界争いをしていたことを考えれば、9 世紀とは言え近畿地方と違い平地や丘陵部の自然植生がまだ大量に使えた状態であったと考えられる。そのような状態の地域に近畿地方から派遣された国司が来ることで直接的に中央の文化が流入するようになった。そのためヒノキ・スギを中心とした針葉樹材を使用した製品が流入し、利用も増えたが、ヒノキ等の入手はモミに対して困難なため大型製品を中心にモミ属を取り入れていったと思われる。そのため山王遺跡では、広葉樹材や潅木類の利用が盛んなまま、針葉樹材が多く取り入れられた結果になったと考える。

今まで、宮城県の木質遺物については、その樹種的考察があまりなされなかった。今回の樹種の調査の結果、山王遺跡では近畿的要素と東北地方の植生の混合した結果が得られ、当時の山王遺跡の木材利用の様子が捉えられた。以後、近隣の類例が増えれば、さらに具体的な内容が解ると考えられる。

第38表　その他・加工材・自然木の樹種

樹　種	その他の木製品・加工材									自然木
	不明品	棒	板	部材	杭	把手	浮子	加工	計	
クリ	5	7	3	2	1			12	30	7
モミ属	5	1	10	1		1		4	22	3
クヌギ節	1		6	1	1			2	11	
ハンノキ節					1			5	6	5
コナラ節	1	1		2				2	6	2
アカマツ			1	1				2	4	1
イヌシデ節	2							2	4	
モクレン属		1	3						4	
クロマツ				1				2	3	
マツ属	1		2						3	1
ケヤキ		1	2						3	
カエデ属								3	3	6
スギ	1		1						2	
ヒノキ	1		1						2	
サワラ	1		1						2	
ヤナギ属			1					1	2	8
クマノミズキ類		1		1					2	
ウコギ属	1			1					2	
タラノキ		2							2	
トネリコ属			1					1	2	
カヤ								1	1	
ブナ属								1	1	
コナラ属	1								1	
ムクノキ	1								1	
ヤマグワ			1						1	
ウツギ	1								1	
ヤマザクラ								1	1	
フジ								1	1	
トチノキ			1						1	
ミズキ				1					1	1
エゴノキ属				1					1	
ニワトコ							1		1	
オニグルミ										1
サワグルミ										1
エノキ属										1
カツラ										1
ケンポナシ属										1
ハリギリ										1
散孔材										1
樹皮			3						3	
同定不可			1					2	3	
計	22	14	38	12	3	1	1	42	133	44

〈引用・参考文献〉

林弥栄．1969．有用樹木図説 材木編．472pp，誠文堂新光社，東京．

岩井宏實．1994．曲物．310pp，法政大学出版局．東京．

金子裕之．1980．古代の木製模造品．奈良国立文化財研究所学報，38：3‐28．

木村陽二郎．1991．図説 草木名語彙辞典．481pp，柏書房，東京．

宮城県教育委員会．1994．山王遺跡八幡地区の調査－県道泉塩釜線関連調査報告書1．200pp．

内藤俊彦・滝口政彦・佐々木洋．1994．広瀬川流域の植生．広瀬川流域の自然環境，311－377pp，仙台市環境部．

奈良国立文化財研究所．1985．木器集成図録　近畿古代編．

島地 謙・伊東 隆夫・林 昭三・鈴木 三男・光谷 拓実・布谷 知夫・能城 修一．1988．日本の遺跡出土木製品総覧，296pp，雄山閣．東京．

山田昌久．1993．日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史．植生史研究，特別一号：242pp．

佐竹善輔・原 寛・亘理俊次・冨成忠夫．1989．日本の野生植物　木本Ⅰ．321pp，平凡社，東京．

佐竹善輔・原 寛・亘理俊次・冨成忠夫．1989．日本の野生植物　木本Ⅱ．305pp，平凡社，東京．

農商務省山林局（編纂）．木材ノ工芸的利用．1308pp，大日本山林会，東京．

鈴木三男・能代修一．1991．越前朝倉氏遺跡から出土した木製品の樹種(2)．福井県立朝倉氏遺跡資料館紀要　1991：17－19．

吉岡邦二．1947．東北地方森林群落の研究 第5報　カシ林北限地帯の森林群落．福島大学理科報告5：13－23．

第39表　山王遺跡多賀前地区出土木製品の樹種一覧

標本番号	樹　種	木製品の種類	木取り等	地区	遺構	遺物番号
MYG-1901	クロマツ	加工	丸木			10001
MYG-1902	モミ属	自然				10002
MYG-1903	ウツギ	自然	芯なし			10003
MYG-1904	クヌギ節	加工	板目			10004
MYG-1904	モミ属	加工	板目			10004
MYG-1905	クヌギ節	加工	板目			10005
MYG-1905	モミ属	加工	板目			10005
MYG-1906	クリ	自然				10006
MYG-1907	ハリギリ	自然				10007
MYG-1908	クリ	加工				10008
MYG-1909	マツ属	自然				10009
MYG-1910	カエデ属	自然				10010
MYG-1911	ヤナギ属	自然				10011
MYG-1912	カヤ	自然				10012
MYG-1913	ヤナギ属	自然				10013
MYG-1914	同定不能	加工				10014
MYG-1915	アカマツ	加工				10015
MYG-1916	ヤナギ属	自然	丸木			10016
MYG-1917	カエデ属	加工	丸木			10017
MYG-1918	トネリコ属	加工				10018
MYG-1919	クリ	加工				10019
MYG-1920	エノキ属	自然				10020
MYG-1921	クリ	自然	丸木			10021
MYG-1922	マツ属	加工	板目			10022
MYG-1923	ケヤキ	加工	板目			10023
MYG-1924	クロマツ	自然	丸木			10024
MYG-1925	モミ属	自然				10025
MYG-1926	クヌギ節	加工	丸木			10026
MYG-1927	トネリコ属	加工	柾目			10027
MYG-1928	ケンポナシ？	自然	丸木			10028
MYG-1929	アカマツ					10029
MYG-1930	クリ	加工	丸木			10030
MYG-1931	クヌギ節	加工	板目			10031
MYG-1932	クリ	加工	半割			10032
MYG-1933	ハンノキ節	加工				10033
MYG-1934	フジ	加工	丸木			10034
MYG-1935	ハンノキ節	自然	丸木			10035
MYG-1936	ヤナギ属	自然	丸木			10036
MYG-1937	カエデ属	自然	枝			10037
MYG-1938	クヌギ節	加工	半割			10038
MYG-1939	ブナ属	自然				10039
MYG-1940	アカマツ	加工				10040
MYG-1941	クヌギ節	加工	板目			10041
MYG-1942	クヌギ節	加工	柾目			10042
MYG-1943	カエデ属	加工	丸木			10043
MYG-1944	クヌギ節	加工	柾目			10044
MYG-1945	樹皮	加工	板目			10045

MYG-1946	樹皮	加工	板目			10046
MYG-1947	樹皮	加工	柾目			10047
MYG-1948	同定不能					10048
MYG-1949	クリ	自然	丸木			10049
MYG-1950	ヤマザクラ	加工	割木			10050
MYG-1951	ハンノキ節	自然	丸木			10051
MYG-1952	クリ		丸木			10052
MYG-1953	クヌギ節	加工	割材			10053
MYG-1954	サワグルミ	自然	丸木			10054
MYG-1955	ハンノキ節	加工	丸木			10055
MYG-1956	ヤナギ属	自然	丸木			10056
MYG-1957	クリ	加工	柾目			10057
MYG-1958	ハンノキ節	自然	丸木			10058
MYG-1959	同定不能	加工	柾目			10059
MYG-1960	イヌシデ節	加工	割材			10060
MYG-1961	ハンノキ節	加工	丸木			10061
MYG-1962	モミ属	加工				10062
MYG-1963	クリ	加工				10063
MYG-1964	クリ	加工				10064
MYG-1965	ハンノキ節	加工	丸木			10065
MYG-1966	ハンノキ節	自然	丸木			10066
MYG-1967	ヤナギ属	自然				10067
MYG-1968	クリ	自然				10068
MYG-1969	クヌギ節	加工	割材			10069
MYG-1970	ハンノキ節		丸木			10070
MYG-1971	ヤナギ属		丸木			10071
MYG-1972	クリ	加工				10072
MYG-1973	クリ					10073
MYG-1974	クリ	加工				10074
MYG-1975	モミ属					10075
MYG-1976	アカマツ	加工	板目			10076
MYG-1977	ハンノキ節	加工	割材			10077
MYG-1978	ヤナギ属	加工	柾目			10078
MYG-1979	ハンノキ節	自然				10079
MYG-1980	クヌギ節	加工	柾目			10080
MYG-1981	カエデ属	自然				10081
MYG-1982	クヌギ節	自然				10082
MYG-1983	カエデ属	自然	芯なし			10083
MYG-1984	カツラ	自然				10084
MYG-1985	マツ属	自然				10085
MYG-1986	同定不能					10086
MYG-1987	同定不能					10087
MYG-1988	同定不能					10088
MYG-1989	同定不能					10089
MYG-1990	同定不能					10090
MYG-1991	クリ	礎板	半割	FX	PIT2117	2007
MYG-1992	カヤ	礎板	板目	FX	SB586	2043
MYG-1993	クリ	柱	芯なし	FX	SB862b	2170
MYG-1994	クリ	柱	芯なし	FX	SB857	2166

MYG-1995	クリ	柱	芯なし	FX	SB859	2168
MYG-1996	クリ	礎板	芯なし	FX	SB586	2039
MYG-1997	カツラ	礎板　破片		FX	SB937	2040
MYG-1998	モミ属	井戸枠材		FX	SE821	2315
MYG-1999	クリ	礎板	半割材	FX	SB586	2040
MYG-2000	クリ	柱	芯なし	FX	SB862	2169
MYG-2171	モミ属	井戸枠材	板目	FX	SE821	2317
MYG-2172	クリ	井戸枠材	柾目	FX	SE821	2320
MYG-2173	モミ属	井戸枠材	板目	FX	SE821	2319
MYG-2174	モミ属	井戸枠材	柾目	FX	SE821	2325
MYG-2175	モミ属	井戸枠材	板目	FX	SE821	2318
MYG-2176	モミ属	井戸枠材	柾目	FX	SE821	2321
MYG-2177	モミ属	井戸枠材	板目	FX	SE821	2315
MYG-2178	エゴノキ属	木簡	芯なし削出し	FX	SE659	11
MYG-2179	ヒノキ	人形	板目	FX	SD2000	16
MYG-2180	スギ	馬形	板目	FX	SD2000	17
MYG-2181	ヒノキ	鳥形	板目	FX	ＳＤ2000	18
MYG-2182	ヤナギ属	ヘビ形	丸木	FX	ＳＤ2000	19
MYG-2183	サワラ	曲物　底板	板目	FX	ＳＤ-129	5
MYG-2184	モミ属	木簡	板目	FX	SD189	3
MYG-2185	モミ属	木簡	板目	FX	SD173	2
MYG-2186	ヒノキ	木簡	板目	FX		4
MYG-2187	モミ属	木簡	柾目	FX	SD-130	6
MYG-2188	モミ属	木簡	ななめ	FX	SD-125	1
MYG-2189	サワラ	木簡	柾目	FX	SD-171	7
MYG-2190	サワラ	木簡	板目	FX	SD-195	8
MYG-2191	サワラ	板	柾目	FX	SD-314	9
MYG-2192	モミ属	木簡	板目	FX	SD2000	14
MYG-2193	モミ属	木簡　絵付き木簡　題せん軸	柾目　削りだし	FX	SE3038	15
MYG-2194	ヒノキ	木簡　(弘仁11年)	板目	FX	D-315	10
MYG-2195	クリ	木簡　小型題せん軸	板目	FX	SK-410	12
MYG-2196	ヒノキ	木簡	板目	FX	SD2000	13
MYG-2197	クヌギ節	井戸枠材　厚板	板目	FX	SE-821	2322
MYG-2198	クヌギ節	井戸枠材　厚板	板目	FX	SE-821	2576
MYG-2199	クヌギ節	井戸枠材　厚板	板目	FX	SE-821	2577
MYG-2200	クヌギ節	井戸枠材　厚板	板目	FX	SE-821	2578
MYG-2201	ケヤキ	礎板	芯持ち	FX	SB-3122	2113
MYG-2202	クリ	柱	芯持ち	FX	SB-3450	2185
MYG-2203	クリ	柱	芯持ち	FX	SB-3440	2571
MYG-2204	クリ	柱	芯持ち	FI	SB3450	2183
MYG-2205	クリ	柱　炭化柱材		FI	SX230	309
MYG-2206	クヌギ節	布巻き具　炭化割材		FI	SX230	249
MYG-2207	クヌギ節	杭　建築部材　炭化杭	ミカン割り	FI	SX230	286
MYG-2208	クリ	杭	四角割り	FI	SX230	309
MYG-2209	クリ	柱		FX	SB510	2154
MYG-2210	クリ	柱	芯なし	FX	SB862	2172
MYG-2211	クリ	柱	芯持ち	FX	SB862	2171
MYG-2212	クリ	柱	芯持ち	FX	PIT79	2572
MYG-2213	クリ	柱	芯持ち	FX	SB589	2160

MYG-2214	クリ	柱	芯持ち	FX	SB589	2159
MYG-2215	クリ	柱	芯なし	FX	SB586	2039
MYG-2216	クリ	柱	芯なし	FX	PIT869	2152
MYG-2217	クリ	柱　多角	芯なし　半割	FX	SB1086	2173
MYG-2218	マツ属	柱	芯持ち丸太	FX	SB1552	2174
MYG-2219	マツ属	柱	芯持ち丸太	FX	SB1552	2175
MYG-2220	マツ属	柱	芯持ち丸太	FX	SB1552	2177
MYG-2221	マツ属	柱	半割材	FX	SB1552	2176
MYG-2222	ケヤキ	柱　多角	芯持ち	FX	SB3035	2179
MYG-2223	クリ	柱　多角	芯持ち	FX	SB3035	2178
MYG-2224	クリ	柱　多角	芯持ち	FX	SD589	2158
MYG-2225	クリ	礎板	ななめ	FX	SD750	2062
MYG-2226	クリ	井戸枠材　厚板	板目	FX	SE3026	2390
MYG-2227	クリ	井戸枠材　厚板	柾目	FX	SE50	2205
MYG-2228	モミ属	机天板　厚板	柾目	FX	SE659	269
MYG-2229	モミ属	井戸枠材　厚板	板目	FX	SE659	2223
MYG-2230	ヒノキ	曲物　底板　楕円形	板目	FX	SE659	131
MYG-2231	クリ	井戸枠材　井戸隅柱	芯持ち	FX	SE659	2231
MYG-2232	モミ属	井戸枠材　厚板	板目	FX	SE659	2229
MYG-2233	モミ属	井戸枠材　厚板	板目	FX	SE50	2216
MYG-2234	モミ属	井戸枠材　厚板	板目	FX	SE864b	2333
MYG-2235	モミ属	井戸枠材　厚板	板目	FX	SE864b	2331
MYG-2236	ヒノキ	井戸枠材　厚板	板目	FX	SE864b	2330
MYG-2237	モミ属	井戸枠材　厚板	板目	FX	SE864b	2327
MYG-2238	モミ属	井戸枠材　厚板	板目	FX	SE864b	2326
MYG-2239	モミ属	井戸枠材　厚板	板目	FX	SE864b	2337
MYG-2240	モミ属	井戸枠材　厚板	板目	FX	SE892	2360
MYG-2241	同定不能	井戸枠材　井戸側板	サンプリング不可能	FX	SE3026	2375
MYG-2242	同定不能	井戸枠材　井戸側板	サンプリング不可能	FX	SE3026	2376
MYG-2243	同定不能	井戸枠材　井戸側板	サンプリング不可能	FX	SE3026	2377
MYG-2244	同定不能	井戸枠材　井戸側板	サンプリング不可能	FX	SE3026	2378
MYG-2245	ヒノキ科	曲物　側板　樺皮結合	柾目	FX	SE2265	136
MYG-2246	ヒノキ	曲物　側板	柾目	FX	SE864b	137
MYG-2247	ヒノキ	曲物　側板	柾目	FX	SE3728	3001
MYG-2248	クリ	井戸枠材　材片	半割	FX	SE864b	2345
MYG-2249	アカマツ	礎板　杭転用		FX	SB3122	2113
MYG-2250	クリ	井戸枠材　枝材	半割	FX	SE864b	2350
MYG-2251	モミ属	礎板	板目	FX	SB762	2100
MYG-2252	モミ属	礎板	板目	FX	SB756	2081
MYG-2253	クリ	礎板	板目	FX	SB749	2055
MYG-2254	モミ属	井戸枠材　板	板目	FX	SE864b	2349
MYG-2255	クリ	礎板	芯持ち丸木	FX	SB3440	2117
MYG-2256	カヤ	柱	芯持ち丸木	FX	SB858	2167
MYG-2257	クリ	井戸枠材　枝		FX	SE864b	2344
MYG-2258	モミ属	井戸枠材	柾目	FX	SE864b	2348
MYG-2259	ブナ属	礎板	板目	FX	SB312	2112
MYG-2260	モミ属	礎板	板目	FX	SB756	2080
MYG-2261	クリ	礎板	芯なし半割材	FX	SB762	2099
MYG-2262	クリ	礎板	柾目	FX	SB750	2057

MYG-2263	モミ属	曲物　蓋		FX	SE50	1098
MYG-2264	サワラ	曲物　底板		FX	SD312	1100
MYG-2265	モミ属	曲物　楕円形	板目	FX	SE659	130
MYG-2266	クリ	井戸枠材　厚板	柾目	FX	SE3026	2375
MYG-2267	モミ属	井戸枠材　厚板	板目	FX	SE3026	2376
MYG-2268	クリ	井戸枠材　厚板	柾目	FX	SE3026	2377
MYG-2269	クリ	井戸枠材　厚板	柾目	FX	SE3026	2378
MYG-2270	モミ属	井戸枠材　厚板	板目	FX	SE3026	2379
MYG-2271	ニレ属	井戸枠材　厚板	柾目	FX	SE3026	2380
MYG-2272	クリ	井戸枠材　厚板	柾目	FX	SE3026	2381
MYG-2273	モミ属	礎板	板目	FX	SB756	2079
MYG-2274	モミ属	井戸枠材　厚板	板目	FX	SE864b	2352
MYG-2275	カエデ属	井戸枠材　厚板	柾目	FX	SE864b	2347
MYG-2276	クリ	井戸枠材　井戸側板		FX		2377
MYG-2277	クリ	礎板	柾目	FX	SB750	2056
MYG-2278	ケヤキ	礎板	芯なしミカン割り	FX	SB3447	2118.1
MYG-2279	モミ属	礎板		FX	SB3447	2118.2
MYG-2280	カヤ	井戸枠材　等	芯持ち丸木	FX	SE892	2361.1
MYG-2281	カヤ	井戸枠材　等	芯持ち丸木	FX	SE892	2361.2
MYG-2282	クリ	井戸枠材　等	枝	FX	SE892	2361.3
MYG-2283	イヌシデ節	井戸枠材　等		FX	SE892	2361.4
MYG-2284	クリ	井戸枠材　等		FX	SE892	2361.5
MYG-2285	ブナ属	井戸枠材　等		FX	SE892	2361.6
MYG-2286	クリ	井戸枠材　等	枝	FX	SE892	2361.7
MYG-2287	クリ	井戸枠材　等	枝	FX	SE892	2361.8
MYG-2288	クリ	井戸枠材　等	丸木	FX	SE892	2361.9
MYG-2289	クリ	井戸枠材　等	丸木	FX	SE892	2361.1
MYG-2290	ブナ属	井戸枠材　等	ミカン割り材	FX	SE892	2361.11
MYG-2291	ミツバウツギ	井戸枠材　等	丸木	FX	SE892	2361.12
MYG-2292	クヌギ節	井戸枠材　等		FX	SE892	2361.13
MYG-2293	クリ	柱　四角	芯持ち	FX	PIT892	2601
MYG-2294	モミ属	礎板	芯持ち柾目	FX	SB14	2011
MYG-2295	ケヤキ	礎板	板目	FX	SB3122	283
MYG-2296	クリ	材片	半割材	FX	PIT862	2599
MYG-2297	クリ	材片		FX	PIT901	2603
MYG-2298	モミ属	礎板	柾目	FX	SB14	2016.1
MYG-2299	モミ属	礎板	芯なし	FX	SB14	2016.2
MYG-2300	モミ属	礎板	柾目	FX	SB14	2014
MYG-2301	クロマツ	礎板	芯持ち	FX	SB3112	285.1
MYG-2302	クロマツ	礎板	柾目	FX	SB3112	285.2
MYG-2303	クリ	材片	芯持ち	FX	SI892	2605.1
MYG-2304	クリ	材片	芯持ち	FX	SI892	2605.2
MYG-2305	クリ	材片	芯持ち	FX	SI892	2605.3
MYG-2306	アカマツ	杭	芯持ち	FX	SD2000	2407
MYG-2307	モミ属	杭	丸木	FX	SD2000	2408
MYG-2308	アカマツ	杭	丸木	FX	SD2000	2409
MYG-2309	クロマツ	杭	丸木	FX	SD2000	2410
MYG-2310	同定不能	材片		FX	PIT863	2600
MYG-2311	クリ	礎板	ミカン割	FX	PIT861	2567

MYG-2312	クリ	材片	板目	FX	PIT913	2602
MYG-2313	モミ属	礎板	板目	FX	SK1736	2127.1
MYG-2314	アカマツ	礎板	柾目	FX	SK1736	2127.2
MYG-2315	クリ	杭	ミカン割	FX	SE3026	2436.1
MYG-2316	クリ	杭	ミカン割	FX	SE3026	2436.2
MYG-2317	ケヤキ	挽物　皿	柾目	FX	SK3023	1
MYG-2318	ケヤキ	挽物　皿	柾目	FX	SD3702	5
MYG-2319	ケヤキ	挽物　皿	柾目	FX	SK3023	6
MYG-2320	ケヤキ	挽物　皿	柾目	FX	SD2000	7
MYG-2321	ケヤキ	挽物　底部	柾目	FX	SD189	8
MYG-2322	ケヤキ	挽物　皿	柾目	FX	SD1020A	10
MYG-2323	ケヤキ	挽物　蓋	柾目	FX	SD172	13
MYG-2324	ケヤキ	挽物　蓋	柾目	FX	SK410	23
MYG-2325	ケヤキ	挽物　蓋片	柾目	FX	SD4055	24
MYG-2326	カツラ	挽物　盤	柾目	FX		25
MYG-2327	ケヤキ	挽物　盤	柾目	FX	SK714	26
MYG-2328	サワラ	挽物　盤	柾目	FX	PIT458	27
MYG-2329	ケヤキ	挽物　盤	柾目	FX	SD172	28
MYG-2330	ケヤキ	挽物　椀	柾目	FX	SD2000	33
MYG-2331	ケヤキ	挽物　椀（底）		FX	SX20	38
MYG-2332	ケヤキ	挽物　椀	柾目	FX		39
MYG-2333	ケヤキ	挽物　鉢	柾目	FX	SE3026	40
MYG-2334	ケヤキ	漆器　皿	柾目	FX	SX20	42
MYG-2335	ケヤキ	漆器　皿	柾目	FX	SD130	43
MYG-2336	同定不能	漆器　皿		FX	SK560	44
MYG-2337	ニレ属	漆器　皿	柾目	FX	SD2000	45
MYG-2338	ニレ属	漆器　8角形箱	柾目	FX	SD1240	46
MYG-2339	同定不能	漆器		FX	SD1306	47
MYG-2340	ケヤキ	漆器		FX	SD4	48
MYG-2341	同定不能	漆器　鉢		FX	SK573	49
MYG-2342	サワラ	曲物　釘結合	柾目	FX	SD2000	50
MYG-2343	サワラ	曲物　釘結合	柾目	FX	SD315	55
MYG-2344	スギ	曲物　釘結合	柾目	FX	SK410	56
MYG-2345	スギ	曲物　漆付き　釘結合	柾目	FX	SX10	57
MYG-2346	ヒノキ	曲物　漆付き　釘結合	柾目	FX	SD127	58
MYG-2347	モミ属	曲物　底板　釘結合	柾目	FX	SE659	59
MYG-2348	スギ	曲物　底板　釘結合	柾目	FX	SD127	60
MYG-2349	スギ	曲物　底板　釘結合	板目	FX	SX10	61
MYG-2350	スギ	曲物　底板　釘結合	板目	FX	SD130	62
MYG-2351	スギ	曲物　底板　釘結合	板目	FX	SD315	63
MYG-2352	モミ属	曲物　底板　釘結合	柾目	FX	SD130	64
MYG-2353	スギ	曲物　底板　釘結合	柾目	FX	SD154	65
MYG-2354	ヒノキ？	曲物　底板　釘結合	板目	FX	SD2000	66
MYG-2355	スギ	曲物　底板　釘結合	柾目	FX	SD4057	67
MYG-2356	スギ	曲物　底板　釘結合	板目	FX	SD130	68
MYG-2357	サワラ	曲物　底板　釘結合	柾目	FX	SD127	69
MYG-2358	スギ	曲物　底板　釘結合	柾目	FX	SD4059	70
MYG-2359	ヒノキ	曲物　底板　釘結合	柾目	FX	SD2000	71
MYG-2360	ヒノキ	曲物　底板　釘結合	板目	● X	SD312	72

MYG-2361	ヒノキ	曲物　底板　釘結合	柾目	FX	SD154	73
MYG-2362	カヤ	曲物　底板　釘結合	板目	FX	SD156	74
MYG-2363	コウヤマキ	曲物　底板　釘結合	板目	FX	SX4053	75
MYG-2364	ヒノキ	曲物　底板　釘結合	板目	FX	SD125	76
MYG-2365	ヒノキ	曲物　底板　釘結合	柾目	FX	SD314	77
MYG-2366	ヒノキ	曲物　底板　釘結合	柾目	FX	SD191	78
MYG-2367	スギ	曲物　底板　釘結合	板目	FX	SD129	79
MYG-2368	スギ	曲物　底板　釘結合	板目	FX		80
MYG-2369	スギ	曲物　底板　釘結合	柾目	FX	SD172	81
MYG-2370	スギ	曲物　底板　片面漆　釘結合	板目	FX	SD172	82
MYG-2371	サワラ	曲物　底板　釘結合	柾目	FX	SD1350C	83
MYG-2372	ヒノキ	曲物　底板　釘結合	板目	FX	SD173	84
MYG-2373	ヒノキ	曲物　底板　片面漆　釘結合	柾目	FX	SD128	85
MYG-2374	スギ	曲物　底板　釘結合	板目	FX	SD2000	86
MYG-2375	スギ	曲物　釘結合	板目	FX	SE2265	87
MYG-2376	ヒノキ属	曲物　釘結合	板目	FX	SD312	88
MYG-2377	モミ属	曲物　釘結合	板目	FX	SE659	89
MYG-2378	スギ	曲物　磯板転用　釘結合	板目	FX	SB1086	90
MYG-2379	スギ	曲物　底板・側面　樺皮結合	底板-板目　側面-柾目	FX	SE2265	92
MYG-2380	サワラ	曲物　底板　樺皮結合	板目	FX	SE2265	93
MYG-2381	ヒノキ	曲物　樺皮結合	底板-板目　側面-柾目	FX	SK3023	94
MYG-2382	スギ	曲物　底板　樺皮結合	柾目	FX	SK3023	96
MYG-2383	モミ属	曲物　底板　樺皮結合	柾目	FX	SD4057	97
MYG-2384	スギ	曲物　底板　樺皮結合	柾目	FX	SD4055	98
MYG-2385	ヒノキ	曲物　底板　樺皮結合	柾目	FX	SD2000.3	99
MYG-2386	スギ	曲物　底板　樺皮結合	柾目	FX	SD315	100
MYG-2387	アスナロ	曲物　底板　樺皮結合	板目	FX	SX4053	101
MYG-2388	ヒノキ科	曲物　樺皮結合	柾目	FX	SK579	102
MYG-2389	ヒノキ属	曲物　蓋板　樺皮結合	柾目	FX	SD4057	103
MYG-2390	モミ属	曲物　蓋板　樺皮結合	柾目	FX	SD129	104
MYG-2391	ヒノキ	曲物　底板　樺皮結合	板目	FX	SD2000	105
MYG-2392	ヒノキ	曲物　底板　樺皮結合	板目	FX	SD3625	106
MYG-2393	ヒノキ	曲物　樺皮結合	板目	FX	SD310	107
MYG-2394	ヒノキ	曲物　蓋板　樺皮結合	柾目	FX	SD160	108
MYG-2395	ヒノキ科	曲物　底板　樺皮結合	柾目	FX	SD4063	109
MYG-2396	スギ	曲物　樺皮結合	柾目	FX	SK410	110
MYG-2397	スギ	曲物　蓋板　樺皮結合	柾目	FX	SD1020	111
MYG-2398	アスナロ	曲物　底板　樺皮結合	柾目	FX	SX30	112
MYG-2399	スギ	曲物　蓋板　樺皮結合	板目	FX	SK410	113
MYG-2400	モミ属	曲物　底板　樺皮結合	柾目	FX	SD172	114
MYG-2401	同定不能	曲物　蓋板　樺皮結合	柾目	FX	SD1020	115
MYG-2402	ヒノキ	曲物　蓋板　樺皮結合	板目	FX	SD189	116
MYG-2403	モミ属	曲物　蓋板　樺皮結合	板目	FX	SD1020A	117
MYG-2404	ヒノキ	曲物　蓋板　樺皮結合	柾目	FX	SD194	118
MYG-2405	サワラ	曲物　蓋板　樺皮結合	柾目	FX	SD748	119
MYG-2406	サワラ	曲物　蓋板　樺皮結合	柾目	FX	SD128	120
MYG-2407	サワラ？	曲物　蓋板　樺皮結合	柾目	FX	SD192	121
MYG-2408	ケヤキ	曲物　蓋板　樺皮結合	柾目	FX	SD1356	122
MYG-2409	モミ属	曲物　蓋板　樺皮結合	板目	FX		123

MYG-2410	モミ属	曲物　底板　樺皮結合	板目	FX		124
MYG-2411	同定不能	曲物　蓋板　樺皮結合	柾目	FX	SE50	125
MYG-2412	スギ	蓋板	柾目	FX		126
MYG-2413	モミ属	蓋板	柾目	FX	SD172	127
MYG-2414	ヒノキ	曲物　長方形	柾目	FX		128
MYG-2415	ヒノキ	曲物　楕円形	板目	FX	SB892	132
MYG-2416	モミ属	曲物　楕円形	板目	FX	SD1020B	134
MYG-2417	スギ	曲物		FX	SK502	1062
MYG-2418	トチノキ	礎板		FX	SB751	2073
MYG-2419	マツ属	つけ木	片端焦げ	FX	SX20	184
MYG-2420	クロマツ	つけ木	両端焦げ	FX	SX20	185
MYG-2421	アカマツ	つけ木	片方焦げ	FX	SX20	186
MYG-2422	マツ属	つけ木	片方焦げ	FX	SD156	187
MYG-2423	クロマツ	つけ木	片方焦げ	FX		188
MYG-2424	アカマツ	つけ木	両端焦げ	FX	SD315	189
MYG-2425	アカマツ	つけ木	片方焦げ	FX	SK410	190
MYG-2426	クロマツ	つけ木	片方焦げ	FX	SE502	191
MYG-2427	クロマツ	つけ木	片方焦げ	FX	SK3023	192
MYG-2428	アカマツ	つけ木	片方焦げ	FX	SK3023	193
MYG-2429	クロマツ	つけ木	片方焦げ	FX		194
MYG-2430	アカマツ	つけ木		FX		195
MYG-2431	アカマツ	つけ木	両端焦げ	FX	SD2000	196
MYG-2432	アカマツ	つけ木	片方焦げ	FX	SD2000	197
MYG-2433	マツ属	つけ木	両端焦げ	FX	SD2000	198
MYG-2434	アカマツ	つけ木	両端焦げ	FX	SD2000	199
MYG-2435	クリ	下駄		FX	SD194	201
MYG-2436	クリ	下駄	片方焦げ	FX	SD31	202
MYG-2437	ニレ属	下駄		FX	SD1020B	205
MYG-2438	ツゲ？	櫛		FX	SD2000	207
MYG-2439	モミ属	桧扇	柾目	FX	SE1606	217
MYG-2440	スギ	桧扇	柾目	FX	SD172	218
MYG-2441	サワラ	桧扇	板目	FX	SD173	219
MYG-2442	ヒノキ	桧扇	柾目	FX	SD2000	220
MYG-2443	ヒノキ	桧扇	板目	FX	SD172	221
MYG-2444	モミ属	桧扇	板目	FX	SK410	222.1
MYG-2445	ヒノキ	桧扇	板目	FX	SK410	222.2
MYG-2446	モミ属	桧扇	板目	FX	SD1740	223
MYG-2447	非木製品	烏帽子（漆・布）		FX	SK560	224
MYG-2448	モミ属	横槌	芯持ち	FX	SD127	228
MYG-2449	クリ	屋根針	芯持ち	FX		229
MYG-2450	クロマツ	木錘	丸木	FX	SD1020A	231
MYG-2451	クリ	木錘　礎板として転用	板目	FX	SB756	232
MYG-2452	ウコギ属	工具の柄	芯なし	FX	SE660	234
MYG-2453	シラキ	工具の柄	芯持ち	FX	SE660	235
MYG-2454	ムラサキシキブ属	工具の柄	芯持ち	FX	SE2267	236
MYG-2455	クヌギ節	工具の柄		FX	SE50	237
MYG-2456	アカマツ	工具の柄	芯持ち	FX	SD3625	238
MYG-2457	ヒノキ	刷毛	板目	FX	SD165	241
MYG-2458	スギ	箆（漆付着）	板目	FX	SD1901	242

MYG-2459	イヌシデ節	机脚	斜め	FX	SK410	244
MYG-2460	スギ	机脚	板目	FX	SD172	243
MYG-2461	モクレン属	四角棒	板目	FX	SD1020A	245
MYG-2462	カエデ属	机脚		FX	SD4057	246
MYG-2463	モミ属	台木		FX	SD189	248
MYG-2464	ウコギ属	布巻き具		FX	SD4031	249
MYG-2465	クマノミズキ類	部材　柄の可能性もあり		FX	SD165	250
MYG-2466	モミ属	布巻き具	板目	FX	SD155	251
MYG-2467	クヌギ節	部材	柾目	FX	SX1900	252
MYG-2468	クリ	部材	芯持ち	FX	SD2000	253
MYG-2469	クヌギ節	部材		FX	SD2000	255
MYG-2470	クヌギ節	部材		FX	SD3625	256
MYG-2471	サワラ	不明品	板目	FX	SD2000	258
MYG-2472	モミ属	不明品	芯持ち	FX	SD2000	260
MYG-2473	クリ	不明品	柾目	FX	SD129	261
MYG-2474	モミ属	不明品	板目	FX	SD1240A	262
MYG-2475	ムクノキ	不明品	板目	FX	SD171	263
MYG-2476	ニワトコ	不明品　浮子？		FX	SD172	264
MYG-2477	スギ	不明品		FX	SD172	265
MYG-2478	モミ属	不明品　曲物底板状		FX	SD2000	266
MYG-2479	モミ属	不明品		FX	SD2000	267
MYG-2480	モミ属	不明品		FX	SD2000	268
MYG-2481	クリ	建築部材　眉庇板		FX	SB863b	273
MYG-2482	スギ	斎串	柾目	FX	SE659	139
MYG-2483	ヒノキ	斎串	板目	FX	SE864b	140
MYG-2484	モミ属	斎串	板目	FX	SE2265	141
MYG-2485	スギ	斎串	板目	FX	SE2265	142
MYG-2486	サワラ	斎串	柾目	FX	SE2265	143
MYG-2487	モミ属	斎串	板目	FX	SD1606	144
MYG-2488	サワラ	斎串	板目	FX	SE2265	147
MYG-2489	サワラ	斎串	板目	FX	SE2265	148
MYG-2490	ヒノキ	斎串	板目	FX	SD2000	149
MYG-2491	スギ	斎串	柾目	FX	SE2265	150
MYG-2492	クリ	斎串（木簡の可能性もある）	柾目	FX	SD2000	151
MYG-2493	ヒノキ	斎串	板目	FX	SE864b	152
MYG-2494	ヒノキ	斎串（刻み目8対）	板目	FX	SE2265	153
MYG-2495	ヒノキ	斎串	板目	FX	SD2000	154
MYG-2496	スギ	斎串	板目	FX	SE659	155
MYG-2497	モミ属	斎串	板目	FX	SK579	156
MYG-2498	モミ属	斎串	板目	FX	SE2267	157
MYG-2499	ヒノキ科	斎串	柾目	FX	SK3023	158
MYG-2500	ヒノキ	斎串	柾目	FX	SD2000	159
MYG-2501	ヒノキ	斎串	柾目	FX	SD1606	160
MYG-2502	スギ	斎串	板目	FX	SD129	161
MYG-2503	ヒノキ	くり物	板目	FX	SD3702	170
MYG-2504	クヌギ節	栓	芯持ち	FX	SK560	171
MYG-2505	クヌギ節	栓	芯持ち	FX	SD4055	172
MYG-2506	クヌギ節	栓	芯なし	FX	SD1240	173
MYG-2507	ヒノキ科	栓	芯なし	FX	SD1020A	174

MYG-2508	ムラサキシキブ属	箸　角箸？		FX	SD2000	175
MYG-2509	スギ	箸　角箸？		FX	SD2000	176
MYG-2510	スギ	箸		FX	SD172	177
MYG-2511	サワラ	箸		FX	SD172	178
MYG-2512	スギ	火錐弓		FX	SD2000	179
MYG-2513	スギ	火錐杵　横棒		FX	SD3625	180
MYG-2514	ヒノキ	火錐杵　横棒		FX	SD3625	181
MYG-2515	ヒノキ	火錐杵		FX	SD172	182
MYG-2516	サワラ	火錐臼		FX	SX20	183
MYG-2517	ケヤキ	挽物　皿小破片		FX	SD172	1001
MYG-2518	ケヤキ	挽物　盤小破片		FX	SD188	1002
MYG-2519	ケヤキ	挽物　皿小破片		FX	SK3108	1003
MYG-2520	ケヤキ	挽物　盤小破片		FX	SD1606	1004
MYG-2521	ケヤキ	挽物　皿		FX	SE2265	1005
MYG-2522	ケヤキ	挽物　皿小破片		FX	SE2265	1006
MYG-2523	ブナ属	漆器　椀		FX		1011
MYG-2524	ケヤキ	漆器　皿小破片		FX	SB1183	1012
MYG-2525	同定不能	漆器　椀　漆皮膜のみ		FX	SK3024	1013
MYG-2526	ブナ属	漆器　椀（赤漆）底部		FX		1014
MYG-2527	ブナ属	漆器　椀（赤漆）下地黒		FX		1015
MYG-2528	ケヤキ	漆器　椀　口縁部		FX	SK579	1016
MYG-2529	樹皮	漆器　椀　口縁部		FX	SD2000	1017
MYG-2530	同定不能	漆器　皮膜のみ		FX	SD1350	1018
MYG-2531	同定不能	漆器　皮膜のみ		FX	SD1017	1019
MYG-2532	同定不能	漆器　皮膜のみ		FX	SK66	1020
MYG-2533	同定不能	漆器（赤漆片面付着）	板目	FX	SK937	1021
MYG-2534	同定不能	漆器（黒漆）	柾目	FX	SK1008	1022
MYG-2535	同定不能	漆　皮膜のみ（赤漆か？）	柾目	FX	SK2024	1023
MYG-2536	サワラ	漆器（黒漆）	柾目	FX	SD4046	1024
MYG-2537	同定不能	漆器（黒漆）		FX	SD	1025
MYG-2538	同定不能	漆器（黒漆）		FX	SD1601C	1026
MYG-2539	エゴノキ属	漆器（黒漆）口縁部	板目	FX	SD308	1027
MYG-2540	スギ	斎串　基部だけ	板目	FX	SD2220	1030
MYG-2541	クヌギ節	机脚か？		FX	SD1330	1031
MYG-2542	ウコギ属	部材		FX	SK1705	1032
MYG-2543	クリ	杭	板目	FX	SD410	1033
MYG-2544	ヒノキ	曲物（内面漆付着）	板目	FX	SD3701	1050
MYG-2545	モミ属	曲物（内面に漆付着）側板	柾目	FX	SE2265	1051
MYG-2546	ヒノキ	曲物（内面に漆付着）側板	柾目	FX	SD172	1052
MYG-2547	モミ属	曲物（内面に漆付着）側板	柾目	FX	SD2312	1053
MYG-2548	モミ属	曲物（内面に漆付着）側板	柾目	FX		1054
MYG-2549	スギ	曲物（内面に漆付着）側板	柾目	FX		1055
MYG-2550	ヒノキ	曲物（内面に漆付着）側板	板目	FX	SE2265	1056
MYG-2551	同定不能	漆皮膜のみ（黒漆）		FX	SB1176	1057
MYG-2552	スギ	曲物　底板　釘結合	柾目	FX		1060
MYG-2553	ヒノキ	曲物　底板　釘結合	柾目	FX	SD172.194	1061
MYG-2554	モミ属	曲物	板目	FX	SK502	1062
MYG-2555	ヒノキ	曲物　底板	板目	FX	SD173	1063
MYG-2556	ヒノキ	曲物　側板	板目	FX	SD312	1064

MYG-2557	サワラ	曲物　樺皮結合	板目	FX	SD4057	1065
MYG-2558	モミ属	曲物　釘結合	斜め	FX	SD149	1066
MYG-2559	モミ属	曲物　楕円形　底板	柾目	FX		1067
MYG-2560	ヒノキ	曲物　樺皮結合		FX	SD130	1068
MYG-2561	モミ属	曲物　内面切れ込み斜め		FX	SD172	1069
MYG-2562	サワラ	曲物　樺皮結合		FX	SK410	1070
MYG-2563	クヌギ節	杭？	半割材	FX	SE3026	2436.3
MYG-2564	クヌギ節	杭？	半割材	FX	SE3026	2436.4
MYG-2565	クマノミズキ類	杭？	丸木	FX	SE3026	2436.5
MYG-2566	クヌギ節	杭？	半割材	FX	SE3026	2436.6
MYG-2567	クヌギ節	杭？	半割材	FX	SE3026	2436.7
MYG-2568	クリ	杭？	丸木	FX	SE3026	2436.8
MYG-2569	クリ	杭？	丸木	FX	SE3026	2436.9
MYG-2570	ヤナギ属	礎板	丸木	FX	SB3122	2116
MYG-2571	モミ属	礎板	丸木	FX	SB3440	2117
MYG-2572	クリ	礎板	板目	FX	SB3122	2115
MYG-2573	モミ属	杭	丸木	FX	SD313	2402
MYG-2574	ケヤキ	建築部材	板目	FX	SB3122	284
MYG-2575	モミ属	杭	丸木	FX	SE892	2428
MYG-2576	ミズキ	杭	丸木	FX	SE892	2427
MYG-2577	カヤ	柱	芯持ち	FX	SB3438	2181
MYG-2578	クリ	不明		FX		2376
MYG-2579	モミ属	井戸枠材		FX		2375
MYG-2580	クリ	不明		FX		2378
MYG-2581	クリ	井戸枠材　たってた杭	芯持ち	FX	SE892	2433
MYG-2582	イヌシデ節	不明		FX	SE892	2356
MYG-2583	クリ	礎板	板目	FX	SB112	2594
MYG-2584	カヤ	柱		FX	SB586	2157
MYG-2585	クリ	柱　柱根		FX	SB777	2565
MYG-2586	クリ	杭		FX	SE864b	2341
MYG-2587	モミ属	礎板	板目	FX	SB3440	2573
MYG-2588	クリ	柱　柱根		FX	SB750	2162
MYG-2589	イヌガヤ	柱		FX	PIT861	2567
MYG-2590	クリ	礎板		FX	SB3706	2124
MYG-2591	クリ	礎板		FX	SB755	2564
MYG-2592	クリ	材片		FX	SB595	2561
MYG-2593	モミ属	厚板	柾目	FX	DE660	2252
MYG-2594	クリ	礎板	柾目	FX	SB750	2060
MYG-2595	クリ	柱　柱根	芯持ち	FX	SB595	2584
MYG-2596	クリ	礎板	板目	FX	SB750	2070
MYG-2597	ヒノキ	曲物　釘結合	柾目	FX	SK410	1071
MYG-2598	スギ	曲物　内面漆	板目	FX		1073
MYG-2599	モミ属	曲物　楕円形	板目	FX		1074
MYG-2600	モミ属	曲物　楕円形	柾目	FX		1075
MYG-2601	イヌガヤ	曲物？	板目	FX		1076
MYG-2602	ヒノキ	曲物　樺皮結合	板目	FX	SE2207	1077
MYG-2603	モミ属	曲物　樺皮結合	柾目	FX	SD1358	1078
MYG-2604	モミ属	曲物　側板	柾目	FX	SD1601	1079
MYG-2605	アカマツ	曲物　側板　底板	柾目	FX	SD1601	1080

MYG-2606	スギ	曲物　底板	柾目	FX	SD2000	1081
MYG-2607	サワラ	曲物　蓋板　樺皮結合	柾目	FX	SD2000	1082
MYG-2608	サワラ	曲物　底板　側板　樺皮結合	柾目	FX	SD3625	1083
MYG-2609	モミ属	曲物　側板	柾目	FX	SD2000	1084
MYG-2610	サワラ	曲物　蓋板　樺皮結合	柾目	FX	SD2000	1085
MYG-2611	マツ属	曲物　底板	柾目	FX		1086
MYG-2612	アカマツ	曲物？	板目	FX	SD2000	1087
MYG-2613	ヒノキ	曲物　側板転用	板目	FX	SD2000	1088
MYG-2614	スギ	曲物　側板	柾目	FX	SD2000	1089
MYG-2615	モミ属	曲物　楕円形	板目	FX	SD2000	1090
MYG-2616	ヒノキ	曲物　蓋板	柾目	FX	SF3700	1091
MYG-2617	モミ属	曲物　底板	板目	FX	SD1240B	1092.1
MYG-2618	モミ属	曲物　底板	柾目	FX	SD1240B	1092.2
MYG-2619	サワラ	曲物　蓋板　樺皮結合	板目	FX	SD2000	1093
MYG-2620	サワラ	曲物　側板	柾目	FX	SX3205	1094
MYG-2621	スギ	曲物　楕円形	板目	FX	SE2267	1095
MYG-2622	スギ	曲物　底板を転用	板目	FX	SD165	1096
MYG-2623	モミ属	曲物　底板		FX	SX20	1097
MYG-2624	モミ属	曲物　底板	柾目	FX	SD313	1098
MYG-2625	アカマツ	つけ木		FX	SD2000	1101
MYG-2626	アカマツ	つけ木		FX	SD1240	1102.1
MYG-2627	アカマツ	つけ木		FX	SD1240	1102.2
MYG-2628	クロマツ	つけ木		FX	SD1240	1102.3
MYG-2629	アカマツ	つけ木		FX	SD1240	1102.4
MYG-2630	マツ属	つけ木		FX	SD1240	1102.5
MYG-2631	クロマツ	つけ木		FX	SD1240	1102.6
MYG-2632	クロマツ	つけ木		FX	SD1240	1102.7
MYG-2633	アカマツ	つけ木		FX	SD1240	1102.8
MYG-2634	クロマツ	つけ木		FX	SD1240	1103
MYG-2635	アカマツ	つけ木		FX	SD3701	1104
MYG-2636	ウツギ	つけ木		FX	SD1240	1105.1
MYG-2637	モミ属	部材　棒状	板目	FX	SD1240	1105.2
MYG-2638	クロマツ	つけ木		FX	SD2000	1106
MYG-2639	モミ属	刀子形代	斜め	FX	SD1240A	1110
MYG-2640	クリ	摺りこぎ棒	芯持ち	FX	SD1240	1111
MYG-2641	ウツギ	不明品		FX	SD2000	1112
MYG-2642	モミ属	曲物	柾目	FX	SD2000	1113
MYG-2643	モミ属	板状	柾目	FX	SD2000	1114
MYG-2644	ハリギリ	下駄歯	木口前面	FX	SD2000	1115
MYG-2645	クリ	下駄歯	木口前面	FX	SD2000	1116
MYG-2646	クリ	不明品　棒状	芯持ち	FX	SD2000	1117
MYG-2647	イヌシデ節	不明品　直方体	半割	FX	SD2000	1118
MYG-2648	クマノミズキ類	不明品　棒状	芯持ち	FX	SD2000	1119
MYG-2649	タラノキ	不明品　中空棒状		FX	SD2000	1120.1
MYG-2650	タラノキ	不明品　中空棒状		FX	SD2000	1120.2
MYG-2651	モミ属	不明品　厚板	斜め	FX	SD1020	1121
MYG-2652	モミ属	不明品　板	板目	FX	SE1606	1123
MYG-2653	マツ属	不明品　板	板目	FX	SD3458	1124
MYG-2654	ヒノキ	不明品	柾目	FX	SE1739	1125

MYG-2655	モクレン属	不明品　板	板目	FX	SD172	1126
MYG-2656	ヤマグワ	不明品　板	木口	FX	SD172	1127
MYG-2657	スギ	不明品　板	板目	FX	SD194	1128
MYG-2658	ヒノキ	不明品　板	板目	FX	SD314	1129
MYG-2659	ブナ属	不明品　板	板目	FX	SD315	1130
MYG-2660	モクレン属	不明品　板	斜め	FX	SK410	1131
MYG-2661	ヒノキ	漆器？		FX	SD126	1132
MYG-2662	クヌギ節	流木		FX	SD4060	2419
MYG-2663	カエデ属	流木		FX	SD4060	2422
MYG-2664	カエデ属	杭		FX	SD4060	2420
MYG-2665	オニグルミ	流木		FX	SD4060	2433
MYG-2666	クリ	部材		FX	SD4060	2418
MYG-2667	モミ属			FX	SK502	2222.1
MYG-2668	モミ属	井戸枠材　隅柱		FX	SK502	2222.2
MYG-2669	クリ	礎板	柾目		SB585	2029
MYG-2670	クリ	礎板	柾目	FX	SB585	2037
MYG-2671	クリ	礎板	斜め	FX	SB585	2031
MYG-2672	クリ	礎板	斜め	FX	SB585	2034
MYG-2673	クリ	礎板	柾目	FX	SB585	2033
MYG-2674	クリ	礎板	板目	FX	SB585	2032
MYG-2675	クリ	礎板	板目	FX	SB585	2035
MYG-2676	クリ	礎板	板目	FX	SB585	2036
MYG-2677	クリ	礎板	板目	FX	SB585	2448
MYG-2678	クリ	柱　柱根	芯なし	FX	SB585	2156
MYG-2679	クリ	礎板	芯なし	FX	SB750	2064
MYG-2680	ケヤキ	柱　柱根	板目	FX	SB750	2058
MYG-2681	クリ	礎板	板目	FX	SB750	2063
MYG-2682	モミ属	礎板		FX	SB750	2065
MYG-2683	クリ	礎板	板目	FX	SB750	2066
MYG-2684	モミ属	礎板	芯持ち	FX	SB14	2018
MYG-2685	モミ属	礎板	芯なし	FX	SB14	2010
MYG-2686	モミ属	礎板	半割材	FX	SB14	2019
MYG-2687	モミ属	礎板	半割材	FX	SB14	2449
MYG-2688	モミ属	礎板		FX	SB14	2001
MYG-2689	クリ	井戸枠材　厚板	板目	FX	SE50	2213
MYG-2690	クリ	井戸枠材　厚板	柾目	FX	SE50	2202
MYG-2691	クリ	井戸枠材	板目	FX	SE50	2201
MYG-2692	モミ属	井戸枠材　隅柱	丸木	FX	SE50	2204
MYG-2693	クリ	礎板	板目	FX	SB584	2023
MYG-2694	モミ属	井戸枠材	板目	FX	SE660	2272
MYG-2695	モミ属	井戸枠材	板目	FX	SE2267	2374
MYG-2696	クリ	井戸枠材	板目	FX	SE50	2212
MYG-2697	クリ	井戸枠材	板目	FX	SE50	2214
MYG-2698	クリ	井戸枠材	柾目	FX	SE50	2215
MYG-2699	ブナ属	井戸枠材　横木1	丸木	FX	SE2268	2368
MYG-2700	モミ属	井戸枠材　残骸	板目	FX	SE2265	2365
MYG-2701	モミ属	井戸枠材　側板	板目	FX	SE2265	2366
MYG-2702	クヌギ節	井戸枠材	芯なし	FX	SE2265	2367
MYG-2703	クリ	井戸枠材	芯持ち	FX	SE2265	2373

MYG-2704	クリ	井戸枠材　横木	丸木	FX	SE2265	2369
MYG-2705	アカマツ	井戸枠材　横木	丸木	FX	SE2265	2370
MYG-2706	クヌギ節	井戸枠材　横木	丸木	FX	SE2265	2371
MYG-2707	クヌギ節	井戸枠材　横木	丸木	FX	SE2265	2372
MYG-2708	モミ属	礎板		FX	SB857	276
MYG-2709	モミ属	礎板	芯持ち	FX	SB857	2101
MYG-2710	クロマツ	杭	芯持ち	FX	SD2000	2411
MYG-2711	マツ属	杭	芯持ち	FX	SD2000	2412
MYG-2712	アカマツ	杭	芯持ち	FX	S	2413
MYG-2713	アカマツ	杭	芯持ち	FX	SD2000	2414
MYG-2714	クロマツ	杭	芯持ち	FX	SD2000	2415
MYG-2715	モミ属	杭	芯持ち	FX		2450
MYG-2716	モミ属	把手	芯持ち	FX		290
MYG-2717	クリ	厚板	柾目	FX	SD2000	291
MYG-2718	ブナ属	杭	芯持ち	FX	SX10	2438
MYG-2719	カエデ属	杭	芯持ち	FX	SX10	2439
MYG-2720	アカマツ	杭	芯持ち	FX	SX10	2440
MYG-2721	アカマツ	杭	芯持ち	FX	SA309	2442
MYG-2722	カエデ属		芯持ち	FX	SX10	2443
MYG-2723	モミ属	材片		FX	SK794	2444
MYG-2724	モミ属	厚板	板目	FX	SE502	2221
MYG-2725	モミ属		板目	FX	SE659	2247
MYG-2726	モミ属	厚板　四角杭	板目	FX	SE659	2246
MYG-2727	モミ属	厚板	斜め	FX	SE502	2220
MYG-2728	モミ属	礎板	板目	FX	SB857	277
MYG-2729	モミ属	礎板	板目	FX	SB857	278
MYG-2730	クリ	建築部材		FX	SB862b	275
MYG-2731	カエデ属	礎板	ミカン割	FX	SB862b	2104.1
MYG-2732	クリ	礎板	板目	FX	SB862b	2104.2
MYG-2733	モクレン属	礎板	板目	FX	SB752	2075.1
MYG-2734	モクレン属	礎板		FX	SB752	2075.2
MYG-2735	ハンノキ節	礎板　四角柱	半割材	FX	SB752	2076
MYG-2736	モミ属	礎板	柾目	FX	SB752	2077.1
MYG-2737	モミ属	礎板	板目	FX	SB752	2077.2
MYG-2738	モミ属	厚板	板目	FX	SE2265	2446.1
MYG-2739	クヌギ節		芯持ち	FX	SE2265	2446.2
MYG-2740	トチノキ	板	板目	FX	SE2265	2446.3
MYG-2741	クリ	礎板　厚板	柾目	FX	SB757	2082
MYG-2742	モミ属	礎板　厚板	柾目	FX	SB757	2083
MYG-2743	クリ	礎板		FX	SB757	2084
MYG-2744	クリ	礎板	板目	FX	SB757	2085
MYG-2745	クリ	礎板	板目	FX	SB757	2087
MYG-2746	クリ	礎板	柾目	FX	SB757	2089
MYG-2747	クリ	礎板	板目	FX	SB757	2088
MYG-2748	モミ属	礎板	柾目	FX	SB757	2090
MYG-2749	クリ	礎板　多角柱転用	柾目	FX	SB595	2046
MYG-2750	クリ	礎板　多角柱転用	柾目	FX	SB595	2054
MYG-2751	クリ	礎板　多角柱転用	板目	FX	SB595	2053
MYG-2752	クリ	礎板	柾目	FX	SB595	2047

MYG-2753	モミ属	礎板	板目	FX	SB595	2052
MYG-2754	クリ	礎板	板目	FX	SB595	2051
MYG-2755	モミ属	礎板	板目	FX	SB595	2048
MYG-2756	クリ	礎板	板目	FX	SB595	2045
MYG-2757	モミ属	礎板	板目	FX	SB595	2049
MYG-2758	ケヤキ	礎板 井戸枠側板転用	柾目	FX	SB758	2094
MYG-2759	トネリコ属	礎板 井戸枠側板転用	柾目	FX	SB758	2095.1
MYG-2760	モミ属	礎板	芯持ち	FX	SB758	2095.2
MYG-2761	ケヤキ	礎板　井戸枠側板転用		FX	SB758	2093.1
MYG-2762	クリ	礎板	板目	FX	SB758	2093.2
MYG-2763	クリ	礎板　井戸枠側板転用	板目	FX	SB758	2097.1
MYG-2764	ケヤキ	礎板　井戸枠側板転用	柾目	FX	SB758	2097.2
MYG-2765	ケヤキ	礎板	柾目	FX	SB758	2096
MYG-2766	ケヤキ	礎板	柾目	FX	SB758	2098
MYG-2767	モミ属	礎板	柾目	FX	SB757	2091
MYG-2768	モミ属	礎板	柾目	FX	SB757	2092
MYG-2769	ケンポナシ	礎板	柾目	FX	SB751	2074
MYG-2770	クリ	礎板	板目	FX	SB751	2606
MYG-2771	ケヤキ	礎板	板目	FX	SB750	2059
MYG-2772	ケヤキ	礎板	板目	FX	SB750	2061
MYG-2773	クリ	礎板　多角柱転用	板目	FX	SB750	2068
MYG-2774	クリ	礎板	板目	FX	SB585	2030.1
MYG-2775	クリ	扉　軸受け	芯持ち	FX	SB585	2030.2
MYG-2776	クリ	不明品　四角棒		FX	SB585	2030.3
MYG-2777	クリ	礎板	板目	FX	SB185	2038
MYG-2778	クリ	礎板	芯持ち	FX	SB2010	2110.1
MYG-2779	ケヤキ	礎板	板目	FX	SB2010	2110.2
MYG-2780	モミ属	礎板	板目	FX	SB2010	2110.3
MYG-2781	モミ属	礎板	板目	FX	SB2010	2110.4
MYG-2782	モミ属	礎板	板目	FX	SB2069	2111.1
MYG-2783	モミ属	礎板	板目	FX	SB2069	2111.2
MYG-2784	カエデ属	流木	丸木	FX	SD4060	2445
MYG-2785	ヤナギ属	杭	丸木	FX	SD4060	2421
MYG-2786	クリ	礎板	板目	FX	SB1066	2108
MYG-2787	クリ	礎板	板目	FX	SB1066	2109
MYG-2788	モミ属	礎板　柱転用	芯持ち	FX	SB14	2008
MYG-2789	モミ属	礎板	斜め	FX	PIT844	2005.1
MYG-2790	モミ属	礎板	斜め	FX	PIT844	2005.2
MYG-2791	モミ属	礎板	板目	FX	SB210	2020.1
MYG-2792	モミ属	礎板	板目	FX	SB210	2020.2
MYG-2793	クリ	礎板	板目	FX	PIT408	2151
MYG-2794	モミ属	礎板	板目	FX	SX3005	1034
MYG-2795	モミ属	礎板	板目	FX	SB3122	2112
MYG-2796	クリ	礎板	板目	FX	PIT53	2001.1
MYG-2797	クリ	礎板　柱転用か？	芯なし半割材	FX	PIT53	2001.2
MYG-2798	クリ	礎板		FX	SB3685	2119
MYG-2799	クリ	礎板		FX	SB3685	2120
MYG-2800	ミズキ	部材	芯なし半割	FX	SX3005	1036
MYG-2801	アカマツ	部材	丸木	FX	SX3005	1035

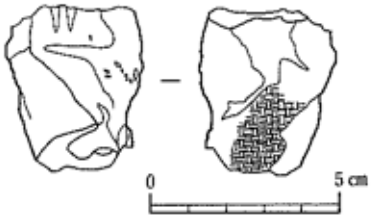
MYG-2802	スギ	礎板　板状部材転用	板目	FX	SB857	2102.1
MYG-2803	スギ	礎板　板状部材転用	板目	FX	SB857	2102.2
MYG-2804	モミ属	礎板　板状部材転用	板目	FX	SB857	2102.3
MYG-2805	モミ属	礎板	板目	FX	SB210	2021.1
MYG-2806	モミ属	礎板	板目	FX	SB210	2021.2
MYG-2807	カヤ	礎板	芯なし半割	FX	SB210	2021.3
MYG-2808	クリ	礎板　多角柱転用		FX	SB595	
MYG-2809	マツ属	つけ木		FX	SB758	292
MYG-2810	クリ	四角棒	片方削り	FX	SD1943	2404
MYG-2811	モミ属	人形	板目	FX		293
MYG-2812	スギ	斎串　8対のきざみ	柾目	FX		294
MYG-2813	ヒノキ	斎串	板目	FX		295
MYG-2814	サワラ	斎串	斜め	FX		296
MYG-2815	エゴノキ属	部材	柾目	FX		257
MYG-2816	コナラ属	不明品		FX	SD4060	289
MYG-2817	モクレン属	柱　柱根	芯なし	FX	SB750	2579
MYG-2818	モミ属	柱		FX	SB749	2580.1
MYG-2819	クリ	柱	ミカン割	FX	SB749	2580.2
MYG-2820	カヤ	礎板	芯持ち	FX	SB3707	2591.1
MYG-2821	カヤ	礎板		FX	SB3707	2591.2
MYG-2822	クヌギ節	柱	丸木	FX	SK541	2581
MYG-2823	クリ			FX	SE864b	2342
MYG-2824	モミ属			FX	SE864b	2340
MYG-2825	ヤナギ属	礎板	板目	FX	SB863	2585
MYG-2826	クリ	柱		FX	SB595	2560
MYG-2827	クリ	柱　柱根		FX	SB595	2562
MYG-2828	ケヤキ	礎板		FX	SB750	2069.1
MYG-2829	クリ	礎板	柾目	FX	SB750	2069.2
MYG-2830	ケヤキ	礎板	板目	FX	SB750	2069.3
MYG-2831	ケヤキ	礎板	板目	FX	SB750	2069.4
MYG-2832	カヤ	井戸枠材		FX	SE892	2355
MYG-2833	クヌギ節	礎板	芯持ち	FX	SB3685	2119.1
MYG-2834	クリ	礎板	板目	FX	SB3685	2119.2
MYG-2835	クヌギ節	礎板	柾目	FX	SB3685	2119.3
MYG-2836	クヌギ節	礎板	柾目	FX	SB3685	2119.4
MYG-2837	クリ	井戸枠材　厚板	柾目	FX	SE50	2589.1
MYG-2838	クリ	井戸枠材　厚板	柾目	FX	SE50	2589.2
MYG-2839	モミ属	井戸枠材	板目	FX	SE660	2253.1
MYG-2840	クヌギ節	井戸枠材　厚板　相欠	板目	FX	SE660	2253.2
MYG-2841	モミ属	井戸枠材　薄板	板目	FX	SE50	2588.1
MYG-2842	クリ	井戸枠材　厚板	柾目	FX	SE50	2588.2
MYG-2843	クリ	礎板	板目	FX	SB3688	2120.1
MYG-2844	クリ	礎板	材片	FX	SB3688	2120.2
MYG-2845	クリ	礎板	板目	FX	SB863	2587
MYG-2846	モミ属	礎板	板目	FX	PIT135	2595
MYG-2847	クリ	礎板	柾目	FX	SB112	2595
MYG-2848	イヌシデ節		芯持ち	FX	SE892	2539
MYG-2849	クリ	柱	芯なし	FX	PIT743	2568
MYG-2850	ケヤキ	杭　多角	芯持ち	FX	SE660	2254

MYG-2851	クリ	柱	芯持ち	FX	PIT755	2566
MYG-2852	ブナ属	井戸枠材	ミカン割	FX	SE892	2360.1
MYG-2853	ブナ属	井戸枠材	ミカン割	FX	SE892	2360.2
MYG-2854	ブナ属	井戸枠材		FX	SE892	2360.3
MYG-2855	モミ属	礎板	丸木	FX	SE892	2575.1
MYG-2856	モミ属	礎板	丸木	FX	SE892	2575.2
MYG-2857	クロマツ	礎板	丸木	FX	SE892	2575.3
MYG-2858	モミ属	礎板	丸木	FX	SE892	2575.4
MYG-2859	クリ		芯持ち	FX	SD4057	2552.1
MYG-2860	ブナ属		丸木	FX	SD4057	2552.2
MYG-2861	アカマツ	礎板	板目	FX	SB3706	2122
MYG-2862	ニレ属	杭	板目	FX	SD4060	2424.1
MYG-2863	カエデ属	杭	丸木	FX	SD4060	2424.2
MYG-2864	イヌシデ節	杭	丸木	FX	SD4060	2424.3
MYG-2865	トネリコ属	杭	柾目	FX	SD4060	2424.4
MYG-2866	ヤナギ属	流木	丸木	FX	SD4060	2554.1
MYG-2867	ヤナギ属	流木	丸木	FX	SD4060	2554.2
MYG-2868	ミズキ	流木	丸木	FX	SD4060	2554.3
MYG-2869	散孔材一種	流木		FX	SD4060	2554.4
MYG-2870	カエデ属	井戸枠材	丸木	FX	SE864b	2343
MYG-2871	クリ	流木		FX		2554
MYG-2872	クリ	井戸枠材　厚板	板目	FX	SE50	2590
MYG-2873	クリ	礎板	柾目	FX	SB3706	2592
MYG-2874	クヌギ節	不明		FX	SX10	2598.1
MYG-2875	マツ属	不明	丸木	FX	SX10	2598.2
MYG-2876	クリ	不明		FX	SX10	2598.3
MYG-2877	クリ	礎板	柾目	FX	SB112	2596
MYG-2878	クロマツ	部材	丸木	FX	SX3005	1035.1
MYG-2879	クリ	柱　柱根	芯持ち	FX	SB510	2153
MYG-2880	アカマツ	杭	芯持ち	FX	DX3005	1035.2
MYG-2881	クリ	礎板　扉板転用	柾目	FX	SB750	2072.1
MYG-2882	クリ	礎板	柾目	FX	SB750	2072.2
MYG-2883	クリ	礎板	柾目	FX	SB750	2072.3
MYG-2884	モミ属	礎板		FX	SB3440	2574.1
MYG-2885	モミ属	礎板	丸木	FX	SB3440	2574.2
MYG-2886	モミ属	礎板	芯持ち	FX	SB3440	2574.3
MYG-2887	モミ属	礎板	半割材	FX	SB3440	2574.4
MYG-2888	アカマツ	礎板	板目	FX	SB4706	2123.1
MYG-2889	アカマツ	礎板	板目	FX	SB4706	2123.2
MYG-2890	モミ属	礎板	板目	FX	SB3707	2126.1
MYG-2891	クリ	杭	丸木	FX	SB3707	2126.2
MYG-2892	クリ		ミカン割	FX	SB749	2161.1
MYG-2893	モクレン属	不明品　板　薄板	柾目	FX	SB749	2161.2
MYG-2894	モミ属	柱　角柱	芯持ち	FX	SB749	2161.3
MYG-2895	モミ属	不明品　角棒	柾目	FX	SB749	2161.4
MYG-2896	ケヤキ	不明品　厚板	柾目	FX	SB749	2161.5
MYG-2897	モミ属	杭	芯持ち	FX	SX3005	1034.1
MYG-2898	モクレン属	杭	丸木	FX	SX3005	1034.2
MYG-2899	クリ	井戸枠材	丸木	FX	SE892	2358.1

MYG-2900	アカマツ	井戸枠材	丸木	FX	SE892	2358.2
MYG-2901	クリ	礎板	柾目	FX	SB750	2071.1
MYG-2902	クリ	礎板	柾目	FX	SB750	2071.2
MYG-2903	クリ	礎板	柾目	FX	SB750	2071.3
MYG-2904	ケヤキ	礎板	板目	FX	SB750	2071.4
MYG-2905	クリ	扉板　軸部分		FX	SB750	2071.5
MYG-2906	ヤナギ属	杭	芯持ち	FX	SD4060	2425.1
MYG-2907	ヤナギ属	杭	丸木	FX	SD4060	2425.2
MYG-2908	アカマツ	杭　枝		FX	SD4060	2425.3
MYG-2909	ヤナギ属	杭	丸木	FX	SD4060	2425.4
MYG-2910	カエデ属	杭		FX	SD4060	2425.5
MYG-2911	ケヤキ	礎板	柾目	FX	SB3438	2570.1
MYG-2912	ケヤキ	礎板	板目	FX	SB3438	2570.2
MYG-2913	ケヤキ	礎板	ミカン割	FX	SB3438	2570.3
MYG-2914	ケヤキ	礎板	板目	FX	SB3438	2570.4
MYG-2915	クリ	礎板	半割材	FX	PIT882	2569
MYG-2916	クリ	井戸枠材		FX	SE864b	2346
MYG-2917	クリ	井戸枠材	柾目	FX	SE3026	2582.1
MYG-2918	モミ属	井戸枠材	板目	FX	SE3026	2582.2
MYG-2919	モミ属	井戸枠材	柾目	FX	SE3026	2582.3
MYG-2920	クリ	井戸枠材	ミカン割	FX	SE3026	2582.4
MYG-2921	モミ属	井戸枠材	芯持ち	FX	SE3026	2582.5
MYG-2922	モミ属	井戸枠材　？		FX	SE892	2586
MYG-2923	モミ属	流木		FX	SD4080	2556
MYG-2924	ケヤキ	流木	板目	FX	SD4057	2551
MYG-2925	クリ	礎板	板目	FX	SB112	2593
MYG-2926	クリ	礎板	板目	FX	SB3707	2125
MYG-2927	サワラ	曲物　底板	板目	FX	SK8	1099
MYG-2928	ハンノキ節	礎板	半割材	FX	SB752	2076
MYG-2929	クリ	井戸枠材	丸木	FX	SE864b	2344
MYG-2930	クリ			FX		
MYG-2931	ヒノキ	曲物　底板？	板目		SK2220	556

5　繊維製品

漆のこし布が１点ある。南１西２区北西部の遺構確認時に出土し漆が付着していること、一部に粗い編目がみえること、一方によじれた形跡があることなどから漆のこし布と判断した。両端が切れており、残存部分の法量は4.5×3.6×0.8㎝の小片にすぎない。編目は一部でしか確認できず、他の編目は漆が染みだして固化したため見えなくなったと考えられる。布の重なり方や布の種類などその他の点については漆の染みだしがひどいため不明である。



第169図　漆こし布

6　金属製品

（1）銅製品

銅製品には八花鏡・銭貨・帯金具・銅鏡などがある。遺構別の組成を第40表に示した。

①八花鏡（第170図1）

２つの小片が接合した。南１西２区の北に接する東西大路Ｆ期の南側溝と路面堆積土出土である。

外区の花形２つ分のみ残存する。外区文様には蝶と飛雲が左右に観察され、地は霰地である。界圏が一部残っている。いずれも表出はやや不鮮明である。面径は13㎝前後と推定される。縁は蒲鉾式膨側縁で縁高0.7㎝、胎厚は0.5㎝である。素材は青銅質で、表面は薄く緑青に覆われている。部分的にスス状の付着物が認められること、破損面の凹凸が激しく、全体に若干の歪みが見られることから、焼けていることがわかる。

中野政樹の集成によると(中野1973)、外区に蝶と飛雲を交互に配する八花鏡はいわゆる唐式鏡に属し、福島県いわき市横山古墳出土鏡、和歌山県那智勝浦町熊野那智神社伝世鏡の２面の類例がある。また八稜鏡ではあるが、同文様のものとして兵庫県宝塚市平井古墳出土鏡がある。いずれも内区文様は双龍双鳥文である。前２者は、白銅質で地は無地、文様表出が鮮明のため舶載唐鏡と考えられている。一方平井古墳例は、青銅質で地は霰地、表出もあまいため、外縁と地を変えた国内での踏返鏡とされている。中野氏に従えば、本資料も地を霰地に変えた踏返鏡と考えられる。双龍双鳥鏡を含め、唐式鏡の出土は本県では初めてである。

本資料の出土層は灰白色火山灰に直接覆われているため、下限年代は10世紀前葉になる。また、接合した２片が比較的近接した同時期層から出土していることより、廃棄された年代も10世紀前葉であった可能性がある。

②銭貨（第170図2・3）

ＳＤ2000河川跡より２点の隆平永寶(初鋳は延暦15＝796年)が出土した。11層と12層から各１点である。両者とも保存はきわめて良好である。

2 は銭型は中形で文字は大きいが比較的細い。平の末画が長い。文字の鋳出しは浅い。平城京分類のＥあるいはＣに類似する。

3 は銭型・文字ともに大きく、各文字の配置は均衡を保つ。文字の鋳出しは深い。表裏の型づれがかなりある。いわゆる「大様」と呼ばれるもので、平城京での分類Ａに良く類似する（沢田1974）。

このほか、南3東1区の遺構外より、天聖元宝（北宋　初鋳1023年）1点が出土した（4）。

県内出土の皇朝十二銭は、他に4例がある。この内、古代の遺跡からの出土品は多賀城市市川橋遺跡(多賀城跡第37次調査)の富寿神宝1点があるのみである(多賀城跡調査研究所1981)。出土地点は多賀城跡の南面で、西2南北道路の西側に平行して存在する大溝内(ＳD1221-Ｂ)である。この大溝は旧砂押川に接続する運河と予測されている。他には中世の一括埋蔵銭の中に3点が確認されている(藤沼・神宮寺1992)。

③帯金具（第170図5～9）

丸鞆3点、巡方1点、鉈尾1点がある。5・7の丸鞆2点は、南3西1区の小溝状遺構群(ＳＦ3627)内でかなり接近して出土した。他はそれぞれ単独の出土である。

5 は全体に風化が激しく一部破損してはいるが、裏金具が付き、間に一部帯皮も残存している。表金具の透かし孔は、比較的幅狭である。裏金具に透かし孔はない。

7 は裏金具がないものの、5 とほぼ同じ大きさで表面の傷み具合いも良く類似している。出土状況と考え併せると、本来同じ腰帯に装着されていたものが、一緒に廃棄された可能性がある。ＳＦ3627の年代は9世紀初頭と見られ、2点の丸鞆の年代もこれに近いものと考えられよう。

6は保存がよく、赤銅色をしている。5・7より小振りであるが、類似した形状を持つ。透かし孔の左下隅に孔を切り取る前にあけられたと考えられる小孔の痕跡が見られる。表裏面とも一部に漆の被膜が残る。

8 の巡方は縦幅が狭い小形品である。表面にはヤスリ目が残り、その上にはほぼ全面に薄い漆被膜が見られる。漆被膜は裏面にも部分的にある。

9の鉈尾は表面の保存は悪いが、裏金具もついている。表金具の基部両側には切り欠きが見られる。

4点の帯金具はいずれも青銅製である。丸鞆・巡方には3つの、鉈尾には4つの鋲足が表金具に鋳出され、裏金具にあけられた鋲受けの小孔で帯を挟み込んで留める型式のものである。

④銅鋺（第170図10）

口縁部の小破片である。器壁は0.5㎜と極めて薄い。口縁部内側が肥厚し、その下に幅1㎜程度の沈線が巡る。

区	遺構	時期・層位	八花鏡	銭貨	帯金具	銅鋺	不明銅製品	銅滓	計
	東西大路	G	2						2
		E・F					1		1
	西2道路	F			1				1
	SD2000	11		1					1
		12		1					1
N1W3	SE0502							1	1
	SK0848				1				1
N1W4							1		1
S1W2	SK2043				1				1
		遺構				1			1
		3層					1		1
S3W1	SF3600	耕作土			2				2
計			2	2	5	1	3	1	14

第40表　遺構別銅製品の組成

⑤不明銅製品（第 170 図 11）

弧状を呈するものである。断面は楕円形で両先端は偏平になる。このほかに南 1 西 2 区に板状の不明銅製品 2 点がある。

⑥銅滓

北 1 西 3 区のＳＥ502 より、重さ 14g の銅滓 1 点が出土している。

（2）鉄製品

鉄製品には、鋳造容器・獣脚・錐・鑿(？)・刀子・斧・紡錘車・釘・鍬鋤先・鎌・手鎌・轡(引手)・鏃などがある。地区ごと遺構ごとの組成を第 41・42 表に示した。

①容器・獣脚（第 170・171 図 12～23）

鋳造品で鉄製容器の破片と考えられるものが 9 点ある。

12 は口縁部破片で、口唇部が平坦で口縁内側が肥厚している。内外面が赤彩(ベンガラ？、以下の資料も同様)されている。13 も口縁部破片であるが器厚はかなり薄い。口径は 25㎝ 程になると予測される。14 は胴部破片である。大きく内湾する部分であるが、さらに上端付近から外側に屈曲する可能性がある。径は 30㎝ 以上になりそうである。15 も体部破片で、器体に平行する弱い隆線あるいは屈曲部をもつ。径は 30㎝ 以上になると見られる。内外面が赤彩されている。16 も体部破片である。器厚はかなり薄い。内外とも赤彩されている。17 は口縁部破片とも見られるがほとんど偏平である。図右上の部分に大きく抉りがはいっている。ベンガラ？が厚く塗られ、特に内面では 3～4 ㎜もの厚さがある。18 も偏平である。縁辺部は弧状を呈する。内外面に痕跡的にベンガラ？が残る。他の 2 点はいずれも小破片であるが、ベンガラ？は内外面とも見られる。

獣脚は 5 点ある。出土した場所は道路の路面が 2 点、ＳＤ2000 河川が 1 点、他は遺構外である。

20～23 は 5 本の指の上部に 5 本の隆線を表現したもので、大きさは異なるがよく類似するデザインである。福島県新地町武井地区の向田Ａ遺跡などで出土した鋳型には、中央下半に関節部と見られる横線が表現されることが多い(寺島・安田ほか 1989)。本遺跡の資料は上部を欠損するが、最大幅と長さのバランスから見て、20・22 には横線はなかったと考えられる。21 と 23 は赤彩(ベンガラ？)されている。19 は指の表現が他と異なり、上部には巧みに凹凸が表現され、残存部上端には膝かとおもわれる表現がある。向田Ａ遺跡には類似する鋳型は見られない。

容器の器形が明確にわかるものはないが、獣脚の存在からは火舎が予測される。赤彩されているものはそれにふさわしいと言えよう。13 は鉄鍋の可能性がある。14・15 にみられる体部の屈曲は、向田Ａ遺跡の器物鋳型 2 類にも類似する。偏平な 17・18 は容器の口縁部とは考えにくく、18 は火舎や羽釜の鍔部かもしれない。

鋳造容器と獣脚の出土層の年代がおさえられるものは、12・13 の容器が 9 世紀代、16 が 9 世紀後半、15・18 の容器と 19・20・22 の獣脚が 10 世紀前半である。

東北地方では、向田Ａ遺跡で 8 世紀後葉から鋳造が開始され、9 世紀前葉～中葉にかけて盛期を迎えている(寺島・安田ほか 1989)。また、相馬市山田Ａ遺跡、原野市蛭沢・河内迫遺跡群でも鋳造遺構

が検出されている(飯村 1994)。しかし東北地方全体を見ても平安時代前半の鉄製容器の消費地での出土例はごくわずかであり、本遺跡例以外には数例が知られているにすぎない。特に獣脚は初の出土例と思われる。多賀城跡とその周辺でも、多賀城跡14次調査大畑地区のＳＩ354住居跡で把手付鉄鍋が、37次調査市川橋遺跡で鉄鍋の把手あるいは脚と見られるものが１点づつ出土しているのみである（多賀城跡調査研究所 1972・1981）。

②刀子（第171・172図24～37）

29点出土した。ＳＤ2000河川が13点と半数近くを占める。北１西3･南１西２区がそれぞれ8･7点とほぼ同数であるが、南２西１地割り以南では１点も出土していない。ＳＤ2000河川出土資料中には柄付きのものが４点あり、内３点は10層出土である(註1)。図示したもの以外に刀身部破片が６点、刀身部～茎部破片が６点、茎部破片が３点ある。

刀身部は全て平棟・平造である。使用と研ぎ直しによって刃部がすり減り刃縁が内湾しているものがある。茎部との境は全て両関となるが、刃関は34のみが短く直に落ちるもので、他は茎から徐々に幅を広げる形になっている。大きさを茎の径でみると、幅1.3㎝の大形品から0.7㎝の小形品までがある。大形品には刀身が反るものが見られる。

以下に代表的なものを説明する。

27は刀身先端部と柄の一部を欠くが全体の形状を知ることができる大形品である。柄は心持ちの丸材で、断面形は刀背側がやや平らな卵形をしている。柄全体が刀背方向にやや湾曲する。茎孔が焼けて黒ずんでおり、茎を焼き込んで装着したことがわかる。

25も大形品である。柄はほぼ完形ながら刀身部を欠損している。茎尻はソフトＸ線写真でも捉えられなかった。柄は割材が用いられ、断面は隅丸長方形である。刀背方向にやや湾曲する。茎の装着は焼き込みによるが、刃関は外に出ている。

24も大形品であるが、刃のすり減りが激しい。柄頭を欠損している。柄は割材を用い、断面は隅丸方形である。茎の装着は焼き込みによる。

26も大形品。柄頭を欠損する。柄は心持丸材を用いる。断面形は不整楕円形で、刀背側が平になっている。茎の装着は焼き込みにより、棟関を少々食い込ませている。

28は刀身部が長い大形品である。鉄製で断面楕円形の鎹を残す。刀身部はやや反っている。柄の木質をわずかにとどめる。

③錐（第172図39～41）

３点ある。39は全長24.7㎝、柄付きの完形品である。身は先端部に向かい徐々に偏平になり、直線状で両刃の刃部を形成している。茎との境に関はない。柄は心持ちの丸材を用いているが、その心は腐食により抜けている。断面はほぼ円形で、柄元から柄頭までほぼ同じ太さである。40は鏃の可能性もあるが、大きさ･先端部の形状と関の無い点より39と同種の錐身とした。41は刃部が片刃であるが、かなり小形であることから錐身と判断した。

出土層の年代は、39が８世紀中葉～９世紀初頭、40が９世紀後半である。

④鑿？（第172図38）

横断面が長方形で最大厚が中央上部にある大形棒状品である。先端部がそのまま薄くなり刃部となると予想されるので鑿とした。類似品の破片がもう1点ある。

⑤斧（第173図2～44）

完形品が3点ある。いずれも袋状鉄斧で、袋部の断面形は長方形である。

43は保存状態は悪いが、柄の木質部がわずかに残る。長さに対して幅が狭く細身の形状をしている。刃部は両刃・曲刃で、正面左側の刃縁が新しい破損を含むものの片減りしている可能性がある。44は寸づまりの小形品である。刃部は両刃で曲刃、正面左刃縁がやや片減りしている。袋部は浅い。42は刃部が両刃で直刃である。袋部が深く長さの半分近くまである。

3 点とも刃部周辺に擦痕は観察されない。刃部の片減りもあまり明瞭でないため、縦斧か横斧かの判断はできない。出土層の年代は、42が9世紀前半、44が9世紀後半、43が10世紀前半である。

⑥紡錘車（第174図59～61）

軸がわずかに残る円板部が3点、細い棒状で断面が円形であるため紡錘車の軸と考えられるものが2点ある。いずれも北1西3区とそれに面する道路出土である。59の表裏面にはベンガラと見られる赤彩がある。

⑦U字形鍬・鋤先（第174図2～64）

3点あるが、2点は耳部を残すだけである。

64は幅が13㎝強の中形品である。北1・西3道路の交差点付近で、道路以前のＳＤ4060河川堆積層上部の出土であるが、時期は限定できない。

⑧鎌・手鎌（第174図65～72）

鎌は10点ある。内6点はＳＤ2000河川の出土である。ただし特定の層に集中はしない。

全体の形状がわかるのは67と69の2点のみで、先端が嘴状に下方を向く。66～70は長さ15～17㎝程度になるとみられるが、65は他より小形と予想される。基部が残る6点には、すべて端部に着柄のための折り返しがある。折り返しの角度はいずれも背に対して鈍角で、65・67・68・69 は基部全体を、66・70は基部の上端のみを折り返している。65の折り返しの方向は他と表裏逆になっている。刃部はいずれも曲刃で、保存の良好な67と69では両刃であることが確認できる。各資料の出土層の年代は、69・70が8世紀後半、67が9世紀代(中頃？)、65が9世紀後半、66が10世紀前半である。

手鎌は2点ある。72は保存良好の完形品である。左右の端部付近に釘孔があり、一方には頭部が曲げられた留釘も残存している。裏面には柄の木質が一部付着している。刃部は両刃で、片寄ったすり減りを見せる。ＳＤ2000河川9層(9世紀中頃？)の出土である。71も留釘を残すが一端を欠損している。72に比べ、刃部が厚い。

⑨鏃（第175図73～82）

鏃は13点あるが完形品は少ない。すべて単独出土であるが、約半数はＳＤ2000河川である。大別して長頸鏃と雁股鏃の2種類がある。長頸鏃の鏃身部は三角形のものが多いが、片刃形のものも1点ある。73・74・79は頚部(箆被)が特に長いタイプである。関は角関と台形関のものがある。81の雁股鏃は

大形品で、刃部の抉りが深く、両側辺がやや外開きに延びている。80・82 は刃部先端を欠く。

出土層の年代は 73・78・79・81 が 8 世紀後半、80・82 が 10 世紀初頭である。

なお、このほかに破損のために鏃か釘か不明のものが 17 点ある。

⑩刀（第 175 図 84）

84 はN2 調査区（北 1 西 3 区内）の北西部に堆積していたⅡａ～Ⅱｂ層から出土した直刀である。先端部を欠く。刀身は平棟・平造である。関は両関であるが、直に落としているのは棟関のみである。茎に目釘穴はない。出土層の堆積年代は 10 世紀後半以降と考えられる。他に刀身部の破片が 1 点ある。

⑪引手（第 175 図 83）

轡の左引手である。一本柄の引手で柄は強く捩じられ、引手壷は「く」字状に屈曲している。

⑫壷金具（第 173 図 56）

櫃などの調度品の壷金具かと見られるものが 1 点ある。残存長は 4.1㎝で中央部に 2 枚の座金が付いている。座金は一辺 2㎝程の方形で、間隔は 1㎝ほどである。壷部は外径 1.6㎝・内径 0.7㎝で、斜め上方に引っ張られたかのような歪みがある。

⑳釘・鋲（第 173 図 45～54）

釘が 14 点、鋲が 3 点ある。釘の長さは 10㎝程度のものが多いが、50 は 2㎝強と小形で櫃などの調度品に使用されたものである可能性がある。

⑭不明鉄製品（第 173 図 55・57・58）

55 は端部が広がる形状でそこに 3 つの留鋲がある。下部は断面D字形となる。58 は曲がっているが本来は直線状であったと思われる。一端が菱形に作られ先端は尖る。57 は厚さ 0.2㎝の長方形の板である。小穴は全くない。

（3）鉄滓

多賀前地区からは鍛冶遺構は検出されなかったが、鉄滓が各地区から出土している。ＳＤ2000 河川跡からの出土量が最も多いが、特に集中して出土した層はない。道路の路面や側溝、一部の柱穴などから比較的多く出土しているが、その壁は多くとも数 100g 程度で、まとまって廃棄されたものはない(第 43 表)。今回は、金属学的分析などは行っていない。

（4）小結

金属製品は比較的豊富に出土したが、遺構に伴った意味のある出土状況を示すものはほとんどない。ただし、祭祀遺物が集中したＳＤ2000 河川の 10 層に柄付き刀子が 3 点ある点は注目される。これらはいずれも大形の完形品で、まだまだ十分に使用可能である。

年代が押さえられる資料はわずかである。前項で示した出土遺構の年代は、土器がまとまって共伴した場合だけに限定しているが、遺構の重複が激しいために特に新しい時期のものはそのまま遺物の年代に置き換えられるとは限らない。

組成全体を見ると刀子・鉄鏃が最も多く、これに加えて各種の工具・農具が存在する状況で、一般

集落とそう変わりはない。注目されるものとして、八花鏡と隆平永宝・獣脚を含めた鋳造容器の出土が挙げられる。これらは東北地方あるいは宮城県内では希少品である、本遺跡の性格をよく表していると言えよう。

地区ごとに出土点数を見ると、ＳＤ2000 河川のほかに北１西３･南１西２区に集中している。東西大路･西２道路も比較的まとまった出土があるが、これらは北１西３･南１西２区に面する道路である。一方南２西１区は、前２者とほぼ同じ調査面積であるにも関わらずごくわずかの点数である。このことは先の２つの区が国司クラスの館であったことを良く反映している。

	獣脚	容器	錐	鑿？	刀子	斧	紡錘車	釘	鉄鐔先	鎌	手鎌	引手	鏃	鉄･釘	直刀	帯金具	不明鉄製品	小計
SD2000 河川	1	2	1		13	1		2		6	1	1	6	1			1	36
東西大路	1	2			1		1	2					1					8
北１道路														1				1
南１道路																		0
南２道路										1								1
西０道路																		0
西１道路								1										1
西２道路	1		1			1	1	1					1					6
西３道路																		0
N1W4 区																	2	2
N1W3 区	1	4		1	8	1	3	7	2	1	1		4	7	2		15	57
S1W2 区	1	2	1		7			4	1				1	8		1	4	30
S2W1 区				1						2								3
S3E1 区																		0
小計	5	10	3	2	29	3	5	17	3	10	2	1	13	17	2	1	22	145

第41表　地区別の鉄製品組成

註 1. 柄付きのものはソフトＸ線写真を用いて柄内部を観察した。撮影・現像は東北歴史資料館の手塚　均氏による。

〈引用・参考文献〉

飯村　均 1994　平安時代の鉄製煮沸具　しのぶ考古 10　pp45-54

五十川伸夫　1992　古代・中世の鋳鉄鋳物　国立歴史民俗博物館研究報告 46　pp1-79

小松正夫他　1990　秋田城跡　平成元年度秋田城跡発掘調査概報

斎野裕彦・荒井　格・平間亮輔　1994　北日本における農具の変遷と画期　古代における農具の変遷－稲作技術史を農具から見る－　pp87-94　静岡県埋蔵文化財調査研究所

斎野裕彦・荒井　格・平間亮輔　1994　宮城県の概要　古代における農具の変遷－稲作技術史を農具から見る－　pp129-148　静岡県埋蔵文化財調査研究所

沢田正昭　1974　銭貨　平城宮発掘調査報告Ⅵ平城京左京一条三坊の調査　pp97-103　奈良国立文化財研究所学報第 23 冊

杉山　洋　1989　唐式鏡の生産と流通　生産と流通の考古学　pp339-358　横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ

関根真隆　1978　正倉院古櫃考　正倉院の木工　pp129-151　日本経済新聞社

多賀城跡調査研究所　1972　第 14 次発掘調査　多賀城跡調査研究所年報 1971

多賀城跡調査研究所　1981　第 37 次発掘調査　多賀城跡調査研究所年報 1980　pp61-106

寺島文隆・安田稔ほか　1989　向田Ａ遺跡　相馬開発関連遺跡調査報告Ⅰ　福島県文化財調査報告書第 215 集

東京国立博物館　1969　東京国立博物館図版目録－和鏡篇

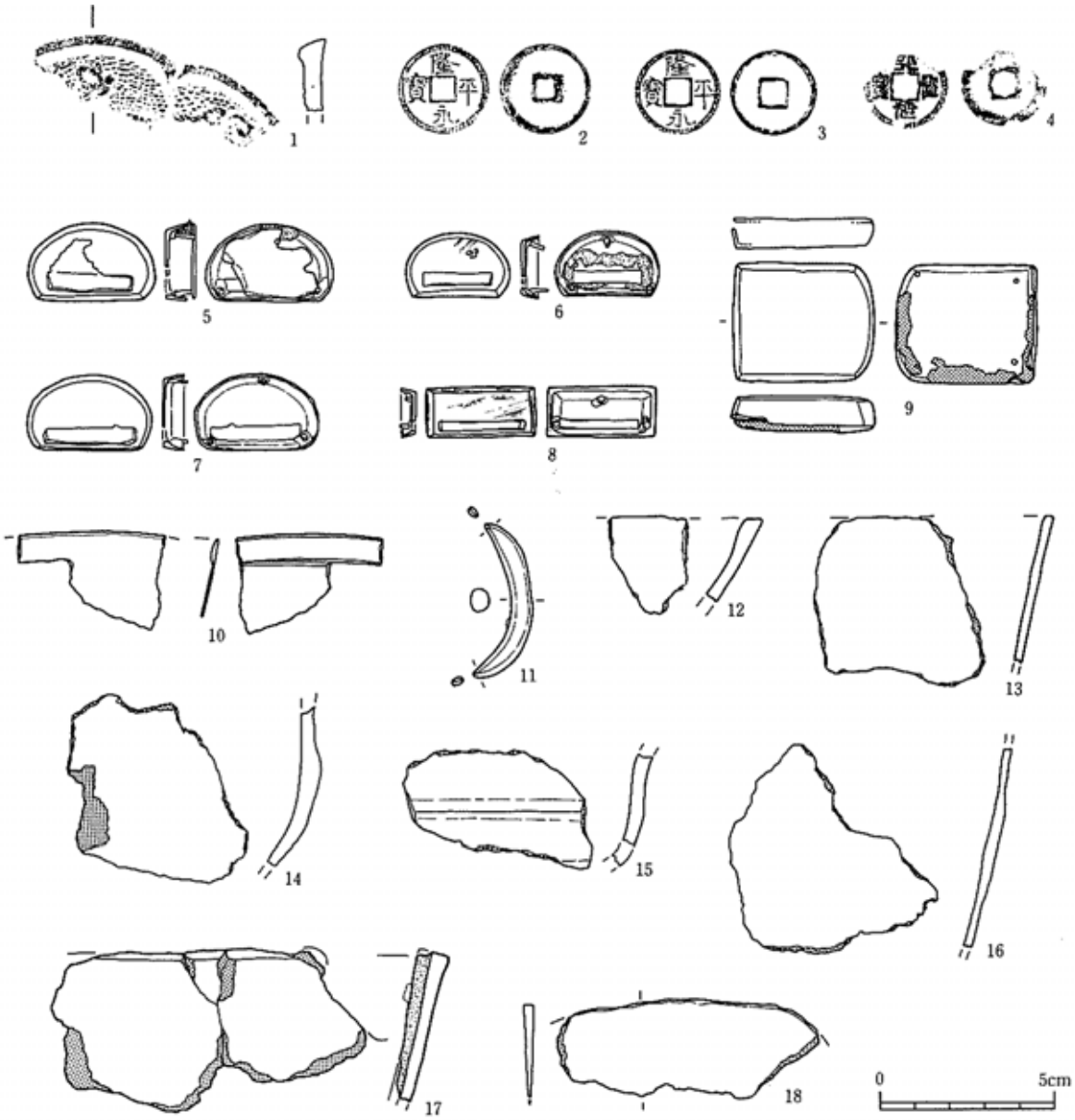
中野政樹　1973　奈良時代における出土・伝世唐式鏡の基礎資料および同笵鏡の分布とその鋳造技術　東京国立博物館紀要第 8 号　pp1-312

藤沼邦彦・神宮寺千恵　1992　宮城県における一括出土の渡来銭－女川町御前浜出土の古銭を中心として－　東北歴史資料館研究紀要 18　pp1-63

前田洋子　1981　和鏡の変遷　考古学ジャーナル 185　pp12-17　ニューサイエンス社

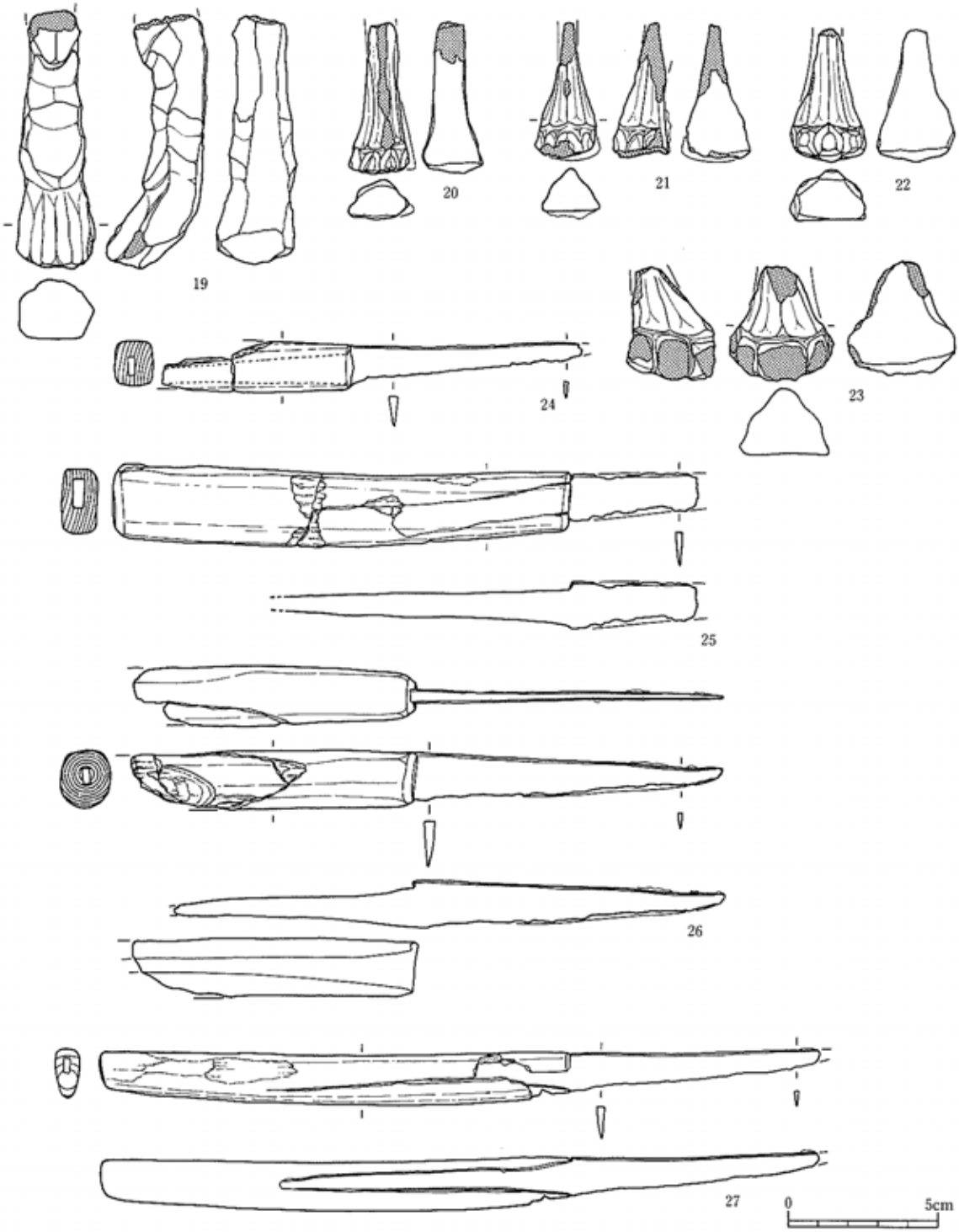
松井和幸　1994　鉄製農具の変遷　古代における農具の変遷－稲作技術史を農具から見る－　pp49-60　静岡県埋蔵文化財調査研究所

水口由紀子　1989　考古遺物からみた中世成立期の様相　文化財の保護 21　pp118-139　東京都教育委員会



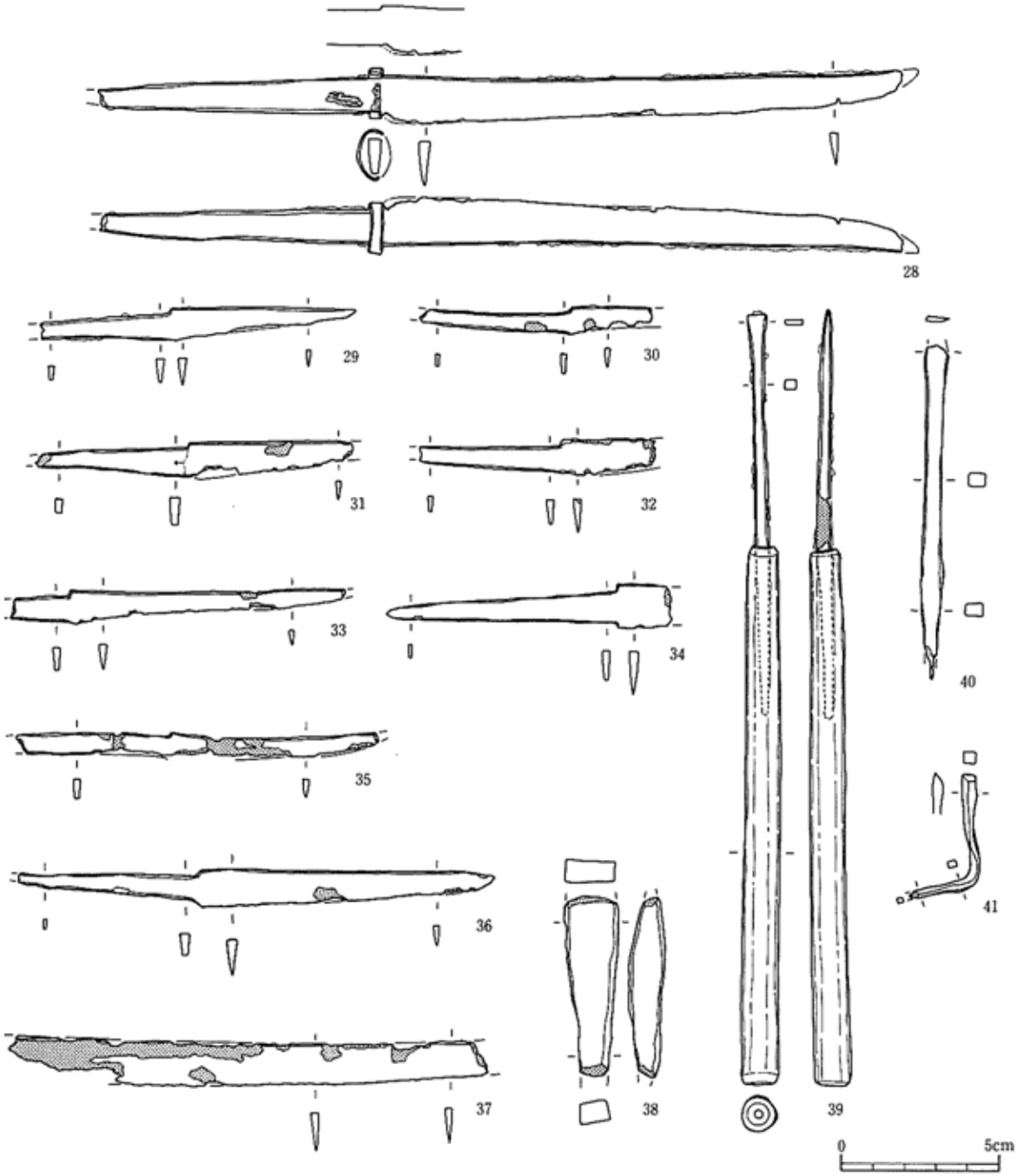
No	器種	区	遺構	層位		写真	登録
1	八花鏡		X0010	東西大路路面３層	131と接合、現存7.8、縁高0.7、胎高0.5	84-1	132
	八花鏡		X0010C	東西大路南側溝			131
2	隆平永宝	南３西１	D2000	12層	外縁外径2.63・内径2.25、内郭外径0.81・内径0.62、外縁厚0.17	84-3	88
3	隆平永宝	南３西１	D2000	11層	外縁外径2.48・内径2.20、内郭外径0.87・内径0.70、外縁厚0.15	84-2	87
4	天聖元宝	南３東１		遺構確認	外縁外径2.48・内径2.10、内郭外径0.90・内径0.70、外縁厚0.12		121
5	帯金具丸鞆	南３西１	F3600	水田耕作土	2.2×3.6、孔0.4×2.4、表厚0.7、裏厚0.1	84-7	96
6	帯金具丸鞆	南１西２	K2043		2.2×3.5、孔0.4×2.6、表厚0.6	84-5	53
7	帯金具丸鞆	南３西１	F3600	水田耕作土	1.8×2.9、孔0.3×2.0、表厚0.5	84-8	97
8	帯金具巡方		X0020	西２道路路面２層	1.4×3.1、孔0.2×2.4、表厚0.5	84-6	67
9	帯金具鉈尾	北１西３	K0848		3.4×4.0、表厚0.7、裏厚0.1	84-9	120
10	銅鋺	南１西２		E420-S369付近溝掘	厚0.05	84-4	128
11	不明銅製品		X0010	東西大路路面３・４層	長4.4、径0.7×0.5		126
12	容器		D2000	河川跡９層灰白下の砂層	表裏にベンガラ付着、厚0.3		136
13	容器	北１西３	D0829		厚0.2	84-19	77
14	容器	北１西３		遺構確認SD535の南側	厚0.4～0.5	84-21	36
15	容器		X0010	東西大路路面２層	表裏にベンガラ付着、厚0.4	84-20	41
16	容器	北１西３	K0552		厚0.2		123
17	容器？	南１西２	K1007	１層	表裏にベンガラ付着、厚0.4	84-18	165
18	容器？		X0010	東西大路路面２層	表裏にベンガラ付着？、厚0.4		45

第170図　金属製品（１）八花鏡・銭貨・帯金具・銅鋺・鋳造容器



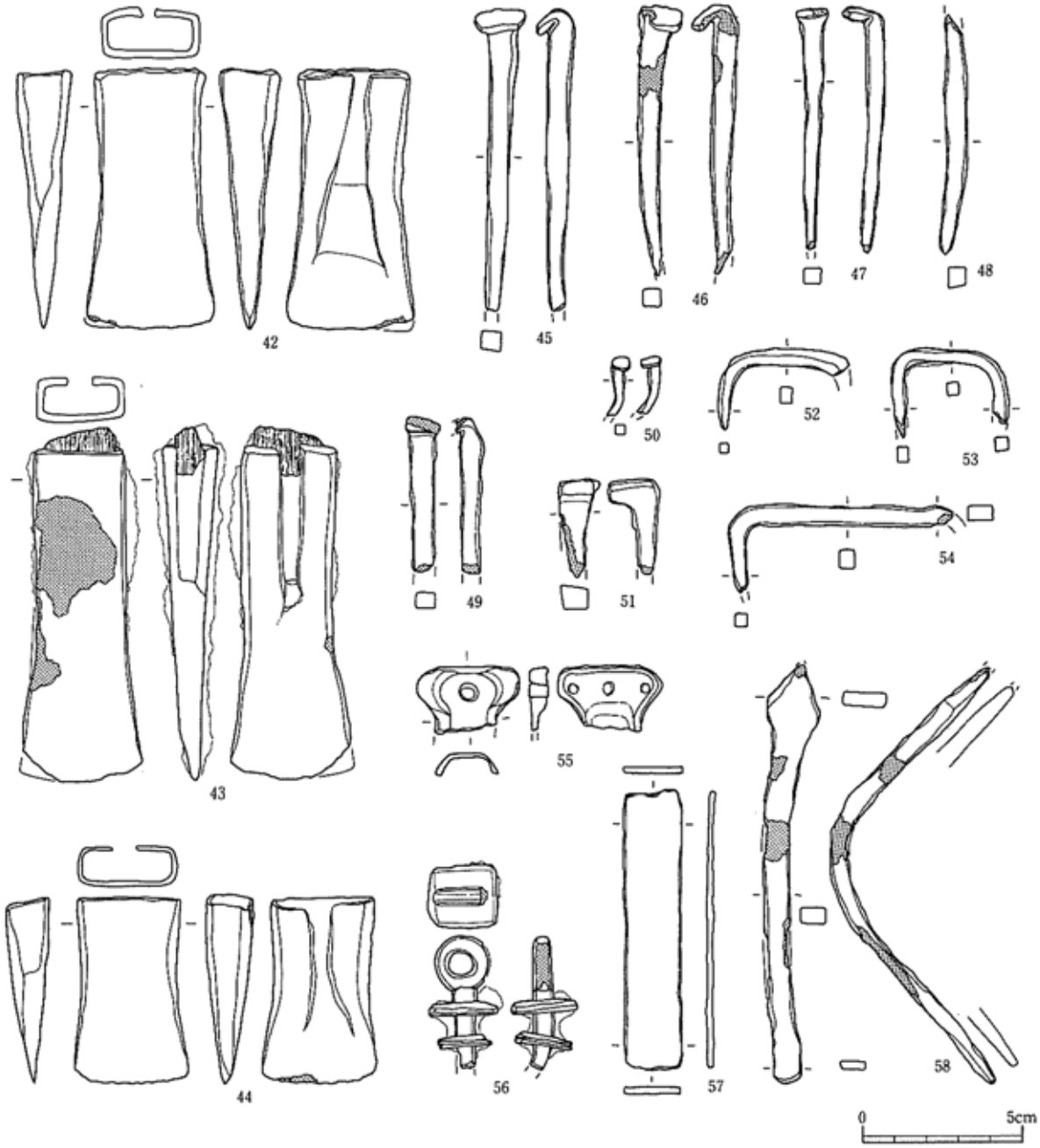
№	器種	区	遺構	層位		写真	登録
19	獣脚		D2000	2層	(8.2)×2.6×1.9	84-13	162
20	獣脚		X0010	東西大路路面2層	(5.0)×1.9×(1.3)	84-12	42
21	獣脚	北1西3		基本3層	ベンガラ付着、(4.4)×2.1×(1.9)		164
22	獣脚		X0020	西2道路路面2層	(4.4)×2.4×1.7	84-11	66
23	獣脚	南1西2		E474-S426付近	ベンガラ付着、(3.6)×3.5×(2.6)	84-10	163
24	刀子		D2000	10層	刀身(7.8)×1.3×0.3、茎(6.3)×1.0×0.3、柄(6.4)×1.6×1.3	84-14	160
25	刀子		D2000	10層、北東部東壁寄り	刀身(4.2)×1.5×0.3、茎(9.6)×1.2×0.3、柄15.3×2.6×1.3	84-15	159
26	刀子		D2000	北溝掘り、沃白下スクモ	刀身10.4×1.6×0.4、茎(7.9)×1.3×0.4、柄(9.5)×1.9×1.7	84-16	157
27	刀子		D2000	10層	刀身(8.3)×1.3×0.3、茎9.7×1.2×0.3、柄15.7×0.8×1.6	84-17	158

第171図　金属製品（2）獣脚・刀子



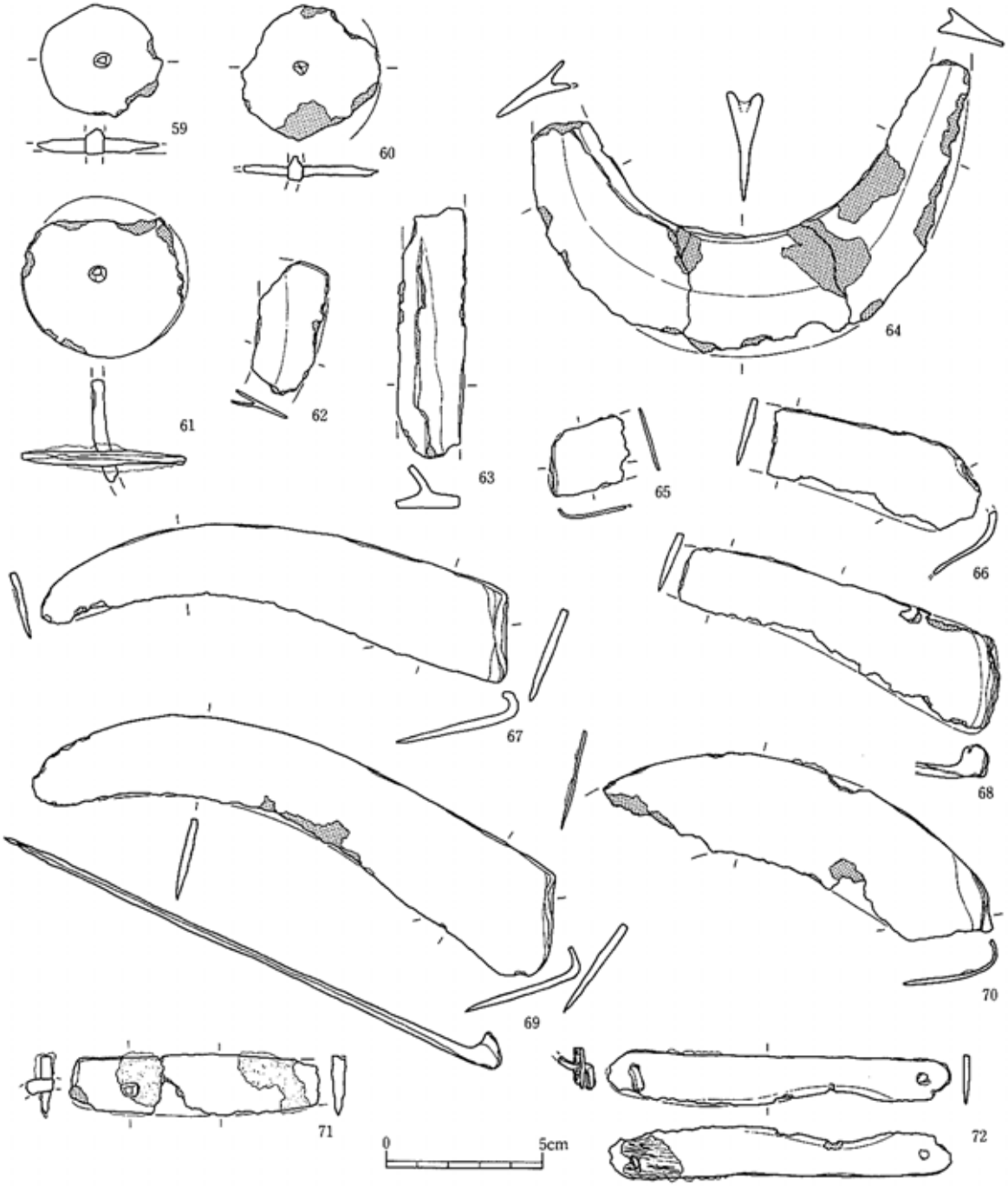
№	器種	区	遺構	層位		写真	登録
28	刀子	南1西2		2層暗褐色粘土層、	ハバキ、木質、刀身(16.6)×1.6×0.4、茎(9.0)×1.1×0.4	84-25	134
29	刀子		D2000	10層	刀身5.8×1.0×0.2、茎(4.1)×0.8×0.3	84-24	161
30	刀子		D2000	3＋4層	刀身(2.5)×0.8×0.2、茎(4.8)×0.7×0.2		57
31	刀子		D2000	9層	刀身(5.1)×(1.0)×0.2、茎(4.8)×0.9×0.3		92
32	刀子		D2000	9層	刀身(2.9)×1.1×0.3、茎(4.5)×0.8×0.3		85
33	刀子		D2000	10層	刀身(8.7)×1.0×0.3、茎(1.9)×0.7×0.3	84-26	90
34	刀子	北1西3		表土	刃関が直刀、身(1.8)×1.3×0.3、茎7.3×0.9×0.2		72
35	刀子		D2000	8層	刀身が反る？、刀身(6.5)×0.6×0.2、茎(5.0)×(0.6)×0.2		28
36	刀子		X0010C	東西大路南側溝	刀身9.3×1.2×0.3、茎(5.8)×0.7×0.3	84-23	16
37	刀子		D2000	9層	刀身が反る、刀身(15.2)×(1.4)×(0.2)		30
38	鑿？	北1西3	D0825		(5.7)× (1.7)×1.1		76
39	錐		D2000	12層中央（ベルト間）	全長24.7、錐身長12.9、刃部幅0.6、柄長17.2、柄径1.0×0.9(元)	84-27	156
40	錐		X0020B	西2道路西側溝	長(10.7)	84-28	65
41	錐？	南1西2	P0152		長(4.4)、刃部幅0.4		113

第172図　金属製品（3）獣脚・錐・鑿？



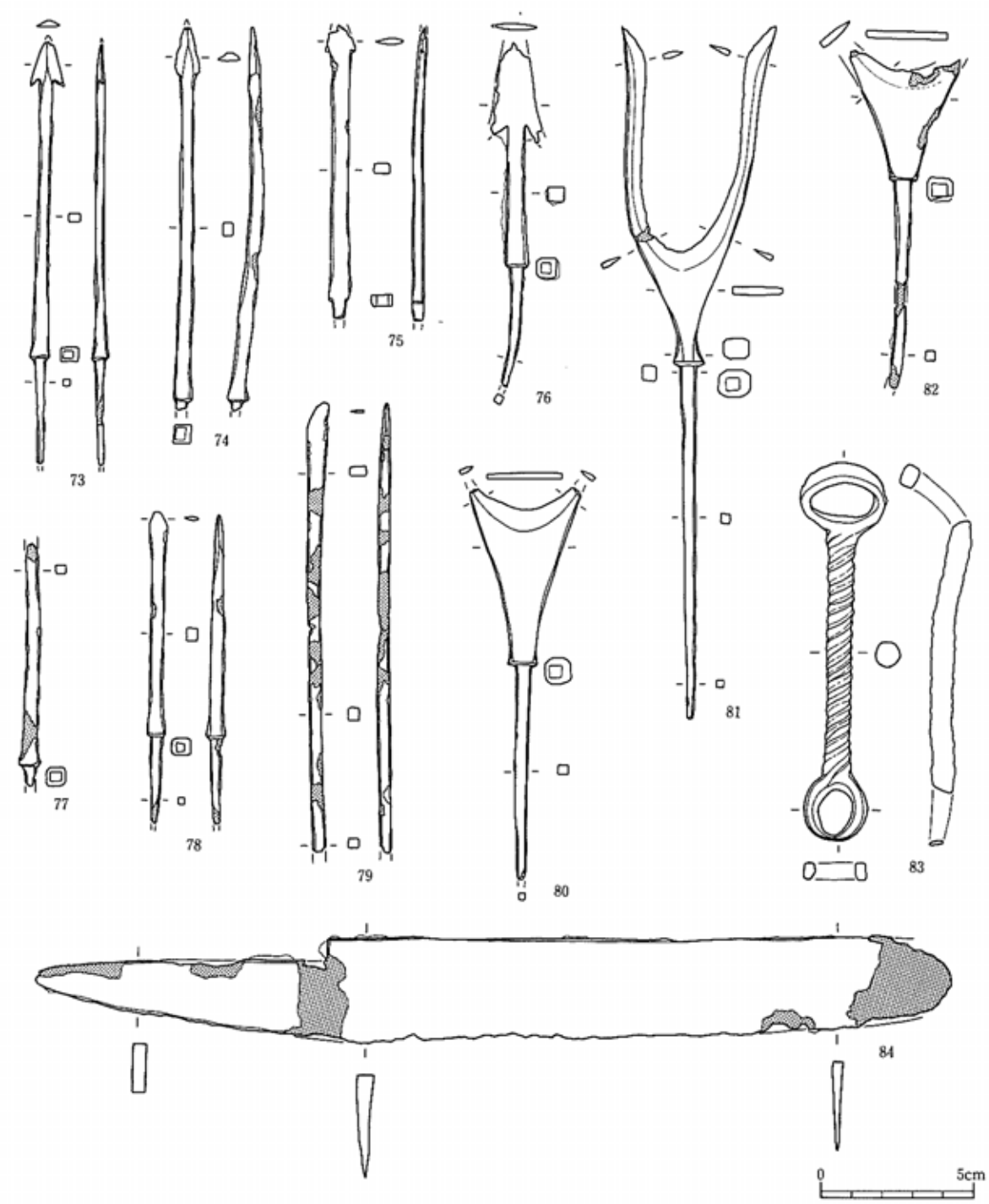
№	器種	区	遺構	層位		写真	登録
42	鉄斧		X0020Z	西２道路東側溝	長8.1、刃部幅3.9、基部3.4×1.7	84-30	118
43	鉄斧	北１西３	K0531	灰白色火山灰の下	柄木質あり、長10.5、刃部幅(3.7)、基部2.7×1.3	84-31	9
44	鉄斧		D2000	７層	長5.8、刃部幅3.4、基部3.2×1.3	84-29	56
45	釘		D2000	10層	(9.5)×0.8×0.8		58
46	釘	北１西３		表土、北西部西トレンチ	(8.5)×0.8×0.7		4
47	釘		X0010	東西大路路面３層上	(7.6)×0.7×0.5		44
48	釘		X1250D	西１道路東側溝	(7.4)×0.8×0.7		55
49	釘	南１西２		Ⅲ層	(4.9)×0.8×0.7		104
50	釘	南１西２	D1111	遺構確認	(1.8)×0.3×0.3		135
51	釘	北１西３	K0579	５層	(3.0)×0.9×0.8		46
52	鋲		D2000	２層	(4.0)×0.6×0.4		24
53	鋲？		X0010A	東西大路北側溝	(3.6)×0.4×0.3		3
54	鋲？	北１西３		表土	(7.0)×0.7×0.5		75
55	不明鉄製品	南１西２	D1111	１層	(2.1)×3.2×0.7		8
56	壷金具？	南１西２		南端部遺構確認	全長(4.1)、壷径1.6、座金2.1×1.9	84-22	1
57	不明鉄製品	南１西２	D1020	遺構確認	8.8×1.8×0.2		19
58	不明鉄製品	北１西３	B0595	N1-E2柱穴	(13.0)×1.6×0.6		47

第173図　金属製品（４）斧・釘・壷金具？ほか



№	器種	区	遺構	層位		写真	登録
59	紡錘車	北1西3	K0820	2～3層土器集中	厚0.4、軸径0.5		80
60	紡錘車		X0010C.D	東西大路路面1・2層	厚0.3、軸径0.4		15
61	紡錘車	北1西3	K0513	1層	円板径5.3、厚0.3、軸径0.3	84-32	111
62	U字形鍬先	北1西3		3層	耳部破片、現存4.3×2.1		147
63	U字形鍬先	南1西2	D1111	1層遺構確認北側黒色土	耳部破片、現存8.1×2.1		18
64	U字形鍬先		D4060	河川	(9.6)×(13.3)、刃先部長3.5	85-13	52
65	鎌	北1西3	D0829		長(2.5)、基部幅2.0・厚0.2		150
66	鎌	南2西1	B1616	N3-E1柱穴1層	長(5.3)、基部幅2.8・厚0.3		23
67	鎌		D2000	9層	長14.9、基部幅2.9・厚0.3	85-2	29
68	鎌		D2000	東壁崩落土	長(10.5)、基部幅(2.8)・厚0.3	85-1	94
69	鎌		D2000	12層	長16.9、基部幅3.6・厚0.3	85-3	59
70	鎌		D2000	11層	長(11.9)、基部幅3.1・厚0.2		119
71	手鎌	北1西3	P0448		長7.7、刃部最大幅1.9、背厚0.4	84-33	13
72	手鎌		D2000	9層	片面に柄木質、長10.9、刃部最大幅1.6、背厚0.2	84-34	117

第174図　金属製品（5）紡錘車・鍬鋤先・鎌・手鎌



No.	器種	区	遺構	層位		写真	登録
73	鏃		D2000	11層砂層	全長(13.9)、鏃身三角形・逆刺・片鏑・長(1.3)、頸部長9.1、台形関	85-6	89
74	鏃	南1西2		南端部遺構確認	全長(12.6)、鏃身三角形・斜関・片鏑・長(1.5)、頸部長10.7、角関	85-5	108
75	鏃		X0020	西2道路西側溝遺構確認	全長(9.4)、鏃身三角形・逆刺・両丸、頸部長8.2、角関		64
76	鏃	北1西3		遺構確認	全長(11.4)、鏃身三角形・逆刺・両丸・長(3.8)、頸部長4.5、角関	85-4	37
77	鏃	北1西3		遺構確認	全長(8.0)、台形関		38
78	鏃		D2000	11層中央ベルトの間	全長(10.2)、鏃身三角形？・無関・両丸・長(0.9)、頸部長7.3、台形関	85-11	86
79	鏃		D2000	12層粗砂	全長(14.8)、鏃身片刃・無関・平片刃・長1.2	85-10	93
80	鏃		D2000	灰白色火山灰の下	全長(12.9)、鏃身箆股・両切刃・長(5.9)、台形関	85-7	83
81	鏃		D2000	12層	全長23.1、鏃身箆股・両切刃・長11.4、台形関	85-9	60
82	鏃		D2000	6層	全長(11.1)、鏃身箆股・両切刃・長(4.2)、角関	85-8	27
83	帷（引手）		D2000	2層	全長12.6、引手環径2.8、端環径2.0	85-12	25
84	鉄刀	北1西3		北西部基本層2～3層	全長(29.8)、茎9.4×2.7、刃最大幅3.5、刃厚0.5、目釘孔なし	85-14	116

第175図　金属製品（6）鏃・刀・引手

区	遺構	時期・層位	獣脚	容器	錐	鑿？	刀子	斧	紡錘車	釘	鉄鋤先	鎌	手鎌	引手	鎹	鎹+釘？	直刀	座金具	不明	小計
	東西大路	G	1	2																3
		F					1			1										2
		D								1					1					2
		G H I							1											1
	西2道路	G	1																	1
		遺構								1					1					2
		E			1				1											2
		C						1												1
	北1道路															1				1
	西1道路	D								1										1
	南2道路	路面2										1								1
	SD2000	10					5			1										6
		11										1			2					3
		12			1							1			2					4
		2	1	1						1		1		1						5
		3.4					1													1
		4														1				1
		6					1								1					2
		7						1												1
		8・10					1													1
		8					1													1
		9・10										1								1
		9		1			3					1	1						1	7
		灰白下					1								1					2
		壁崩落土										1								1
北1西4		遺構外																	2	2
北1西3		遺構外	1	1			6			4	1				4		1		4	22
	SB0584																		1	1
	SB0595																		1	1
	SB0857															1				1
	SD0501									1						1				2
	SD0629	C															1			1
	SD0646									1										1
	SD0825					1														1
	SD0829			1								1								2
	SD0846																		1	1
	SD4060										1									1
	SE0502															1				1
	SK0502																		1	1
	SK0503								1											1
	SK0505						1												1	2
	SK0513								1											1
	SK0530			1																1
	SK0531							1												1
	SK0533															1				1
	SK0552			1												1				2
	SK0576															1				1
	SK0579									1										1
	SK0820								1											1
	SK0839																		1	1
	SK0941																		1	1
	P0418																		1	1
	P0420																		1	1
	P0448												1							1
	P0476																		1	1
	P2006															1				1
	SX0850																		1	1
	SX0855						1													1
南1西2	遺構外		1	1			4			2					1	2		1	1	13
	SB1241															1				1
	SD1020																		1	1
	SD1033															1				1
	SD1111									1	1								1	3
	SK1007			1																1
	SK1008															1				1
	SK1060															1				1
	SK1127						1													1
	SK0410						1									2				3
	SX0140									1										1
	P0013																		1	1
	P0072						1													1
	P0152				1															1
南2西1	SB1616											2								2
	遺構外					1														1
計			5	10	3	2	29	3	5	17	3	10	2	1	13	17	2	1	22	145

第42表　遺構別鉄製品組成

第43表　遺構別鉄滓出土重量

遺構	層位	重さ	備考
道路跡			
東西大路		40	
	B	10	
	C	158	椀形滓1
	D	20	
	F	817	椀形滓3
	G	164	椀形滓
	H	30	
西2道路		330	椀形滓2
	D	9	
	G	85	椀形滓
	H I	6	
	I	207	椀形滓1
西1道路		1147	椀形滓1
西3道路		177	椀形滓1
南1道路		458	椀形滓3
南2道路		72	
北1道路		565	椀形滓4
北1西3区			
遺構外	E324-S237付近清掃	1781	
B0584		8	
	N1-E3柱穴	14	
B0585B	N1-E2柱穴	80	
B0586	N3-E2柱穴	7	
B0589	N4-E5柱穴	8	
B0590		2	
B0750		9	
B0751	E1-N1柱穴	2	
B0857	N3-E1柱穴	6	
	N3-E3柱穴	6	
B0858	確認面	68	
	N2-E1柱穴	30	
B0860	N3-E1柱穴	5	
B0861	N5-E1柱穴	26	
B0862B	N1-E1柱穴	1	
B0862	E2-N2柱穴	11	
B0863	N3-E2柱穴	15	
		3	
B0879		16	
I0560	1層	17	
E0502	1層	55	
E0864	1層	21	
E0892	3～9層	10	
A0717	1層	8	
K0506	1層	5	
K0523	1層	5	土器片に付着
K0524	1層	22	
	2層	48	
K0541	1層	41	
K0729		25	
K0836		11	
K0839		5	
K0941	1層	31	
K0952	2層	12	
D0553A		156	椀形滓1
D0553C	1層	79	
D0575		596	炉体付着、椀形滓1
D0614		8	
D0827		8	
D0837		9	
D0846		99	椀形滓1
P0071		20	
P0404		25	
P0827		5	
X0856		137	椀形滓1

遺構	層位	重さ	備考
南1西2区			
D2228	1層	5	
	遺構外	2307	
B0091	E1-N2柱穴	9	
B1176	N4-E2柱穴	8	
B3051	N3-E2柱穴	10	
D1020A	A	86	
	B	172	椀形滓1
	Z	183	椀形滓
		10	
D1111	1層	227	椀形滓1
D2041		3	
D3040C		32	椀形滓1
D3054		3	
D3110		56	
E2265		5	
E3026	1層	3	
	2層	14	
K0054	1層	68	椀形滓1
K0072	1層	58	
K0410	最下層	41	
K0420		36	
K1009	1層	72	
K1011	1層	136	椀形滓1
K1027	1層	8	
K1036	1層	16	
K1346	1層	2	
K2009	1層	48	
K2019	1層	2	
K3027		14	椀形滓1
K3071		17	
P0026		600	椀形滓1
P0097	E446-S418	1	
南2西1区			
遺構外	1層	1571	
B1512A	N4-E2柱穴	830	椀形滓1
B3442	S2-W1柱穴	36	
E1606		68	
D1601A			
D1602	1層	11	
D1927		2	
D3214	1～4層	8	
D3426		70	
南3西1区			
遺構外		72	
B3619	N3-E1柱穴	5	
D1602B	1・2層	49	
D2000		119	
	2層	238	椀形滓2
	3層	42	
	4層	680	
	8層	55	
	8＋10層	81	椀形滓1
	9層	23	
	10層	77	
	10層以下	187	椀形滓1
	11層	6	
	12層	372	椀形滓1
計		16705	

7　土製品

土製品には、土玉・土鈴・土器片製円板・土錘・坩堝・羽口・送風管・須恵器片を利用した転用砥・土製カマド・壁材がある。

①土玉（第177図8・9）

8は南1西2区のＳD1111出土である。径0.5㎝の孔があけられている。9は8より若干小形で穿孔はない。古墳時代に属する可能性もある。

②土鈴（第177図10）

東西大路Ｅ期の北1西2区に面する側溝出土である。身部の破片で下部に切られた溝の面が観察できる。

③土器片製円板（第176図）

土器片の周囲を打ち欠いておおよそ円形にしたものである。380点と多量に出土した。大きく2類に分類できる。

ａ類（第176図）

直径が2～3㎝（平均2.4㎝）・厚さが0.5～2㎝（平均1.1㎝）のものである。377点ある。素材は須恵器が圧倒的に多いが（85%）、瓦（7%）や土師器（7%）も使われている。赤焼土器と灰釉陶器もごくわずかある。須恵器の中では甕の体部破片が82%をしめている。硬質な須恵器を素材としたものでは、周囲の打ち欠きを両極剥離で行っていることがわかる。打ち欠きの後に研磨したものもわずかにある。製品全体や周辺が摩耗しているものが47%ある。

素材に須恵器が多用され、しかもそれが坏でなく甕の破片であることは、製品に硬さと厚さが求められていたことを示すと言えよう。

ｂ類（第177図1～3）

赤焼土器の高台坏の底部周辺を打ち欠き、底部の径をそのまま利用して円形に仕上げたもので3点ある。3点とも高台を取り去ることなくそのまま残している。2・3は中央に穿孔があるが、孔が斜めにあけられているため紡錘車としなかった。1・2には打ち欠きの後の研磨も見られる。直径は6.4～7.4㎝で、ａ類より大形である。なお赤焼土器の高台坏・埦の底部資料には、意識的に周囲を打ち欠いているのか、自然に割れたのか判然としないものがこの他に多数ある。高台がつくとその部分の強度が増し、自然に破損しても底部がおおよそ円形に残ることが十分ありうると考え、これらの資料は除外している。

出土状況と分布

道路側溝を除いて遺構からまとまって出土することはない。南2西1区とＳD2000河川ではそれぞれ10点と少なく、南1西2区以北で多い。道路跡特に東西大路からの出土が最も多いが、これは遺物全体の傾向でもある。南1西2区では北1西3区の倍近く出土しており、これは遺物量の比率と逆転しているため有意な差であると考えられる。

④土錘（第178～181図）

154点ある。内訳は管状土錘139点、有溝土錘11点、棒状有孔土錘4点である。出土状況は、南1西

2区のＳK2266土壙で一括出土しているものの、他はまとまりなく散在的である。

（A）管状土錘（1～91）

ＳK2266土壙(確認調査のみ)の埋土から、20㎝程度の範囲にまとまって29点の管状土錘が出土した(写真図版86)。一括廃棄されたものであることは明白であり、網につけたままであった可能性も高い。したがってある種の漁網に付けられた土錘の特徴を知ることができる良好な資料である。しかし破損品が多く、重さ・長幅比・孔径が計測できるものはわずかに7点である(わずかな破損で計測値にあまり影響がないものを含む)。残存状況からみた最小個体数は19点である(第178図40～58)。重さは最小が8ｇ・最大が15ｇで、破損品からの推定を含め10～15ｇのものが多いと考えられる。長さは最小4.1㎝・最大5.8㎝で、その差は1.7㎝と比較的大きい。破損品からの推定を含めると5㎝台が多いと見られる。幅は最小1.2㎝・最大1.6㎝であるが1.5㎝が最も多く、平均は1.46㎝である。長幅比はおよそ3～4となる。孔径は最も規格的である。全点で計測可能で、1点のみ0.4㎝で他は0.3㎝である。形状は体部が円筒形に近いものが多く、紡錘形のものでも胴部の膨らみは弱い。端部は面取りされて平坦になっている。なおＳK2266からは土器の出土はないが、遺構の重複関係からみて、土錘には9世紀代の年代が与えられる。

管状土錘全体の形状を見ると、紡錘形で端部に平坦面がないもの、棒状に近いもの、寸詰まりなものと様々で、またそれらの中間的な形状のものもあり、形状だけから明確に分類を行うことは困難な状況である。大きさを完形品で見ると、長さでは2㎝以下～15㎝程、重さでは1ｇ～185ｇといずれもかなりの幅があり、多種類の漁網錘が使われていたと予想される。

ほとんどは素焼のものであるが、須恵器質のいわゆる陶錘が3点ある(第180図85～87)。製作に当たっては、しばしば指摘されているように棒に粘土を巻き付けて形作る方法が取られている。粘土が半乾きの状態で棒を抜き取ったことが、孔端の歪みからわかる。表面はオサエ・ナデ調整される場合がほとんどだが、大形品や陶錘にはケズリが加えられたものが見られる。

（B）有溝土錘（96～103）

11点中の2点は表裏面に縦の溝が付けられたもので(ａ類、96)、他の9点には幅広の縦溝に加え中央を横断する溝が付けられている（ｂ類、97～103）。

ａ類は、96が重さ46ｇ・長さ5.6㎝・溝幅1.4㎝で、他の1点は破損して計測不能であるが、96より大形である。

ｂ類は、重さ138～318ｇ・長さ7.8～11.8㎝・縦溝幅3.9～5.2㎝・横溝幅0.8～1.8㎝で、大きさ・形状にバラツキがある。製作方法は、楕円体の粘土塊を2本の太い丸棒で挟んで縦溝を作り、その後に横溝を換るようにして作りだしている。太い丸棒には布が巻かれていたと見られ、縦溝にその圧痕が残る例がある。

（C）棒状有孔土錘（92～95）

棒状品の両端近くに横から孔をあけたものである。完形品は94の1点のみで、重さ5ｇ・長さ4.4㎝・孔径0.3㎝である。93は端部がわずかに欠損するが、長さは7.5㎝ほどになろう。
92は他の3点よりもかなり大形になる。

（D）分布

管状土錘はＳD2000 河川跡と南２西１区からの出土が少ないが、北１西３区・南１西２区からは万遍なく出土している。東西大路と側溝も多く、陶錘３点は東西大路の北側溝出土である。有溝土錘は分布に偏りが見られ、11 点中８点が北１西３区出土で、２点がこれに接する東西大路の北側溝である。棒状有孔土錘は北１西３区に１点、南１西２区に２点、西１道路に１点である。

⑥坩堝（第 177 図 11・12）

4 点出土しているが、いずれも小破片で 2 点のみ図示できた。内面から口縁部外面に銅滓が付着している。

⑥羽口・送風管（第 177 図 13～21）

27 点出土した。各区から万遍なく出土しているが、南１西２区が 13 点と北１西３区の８点より多くなっている。南１西２区内では中央部に 12 点が集中している。

13 は口径の大きさから送風管と見られ、精錬鍛冶が行われていた可能性を示唆する資料である。20 の羽口は、溶着滓が見られないことから吸気部の破片であることがわかる。図示した他の資料はいずれも小破片で、尖端に溶着滓が認められる。

⑦転用砥（第 177 図 4～7）

須恵器の甕破片の割れ面を使用したもので、6 点出土している。一辺のみを使用したものから全ての辺を使用したものまで様々である。6 は転用硯としても利用しているが、砥石としての使用との前後関係は捉えられない。

⑧土製カマド（第 177 図 22）

南１西２区から土製カマドの破片と見られるものが１点出土した。焚口部であろう。

⑨壁材

焼けた壁材の破片が８点確認された。胎土にはスサが入っている。

⑪不明土製品

23 は足状の形状をした土製品で、上部を欠損している。

〈引用・参考文献〉

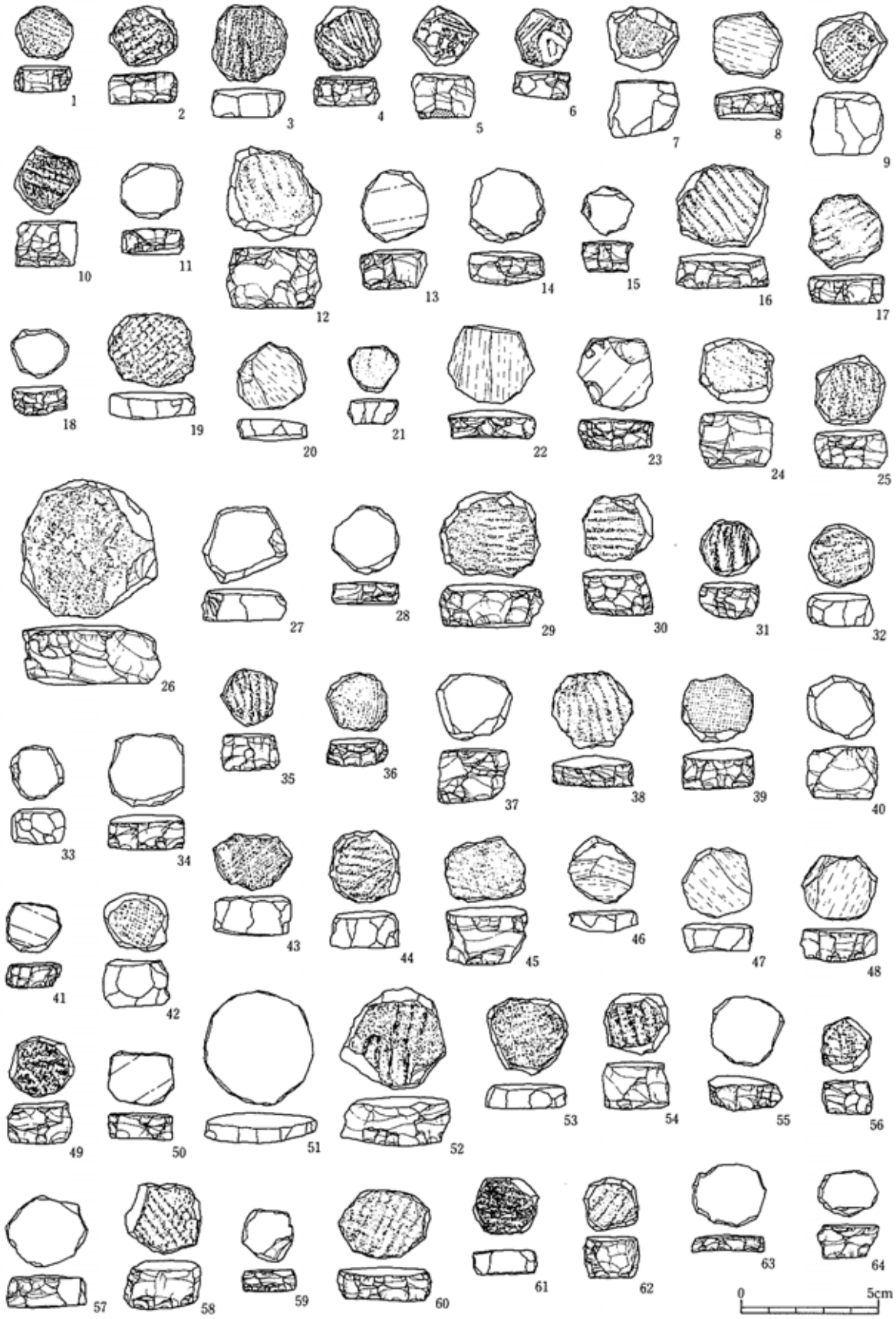
大沼芳幸　1990　正伝寺南遺跡出土の漁網錘について－網漁業の中での位置付け－　正伝寺南遺跡一般国道161号線（高島バイパス）建設に伴う新朝日町内遺跡発掘調査報告書Ⅰ　pp278-300　滋賀県教育委員会

小田原昭嗣　1985　草戸千軒町遺跡出土の円板状土製品　草戸千軒No142　pp2-8　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所

埋蔵文化財研究会　1986　海の生産用具－弥生時代から平安時代まで－　理蔵文化財研究会第19回研究集会資料集

真鍋篤行　1993　瀬戸内地方出土土錘の変遷　瀬戸内地方出土土錘調査報告書(Ⅱ)　pp42-67　瀬戸内海歴史民俗資料館

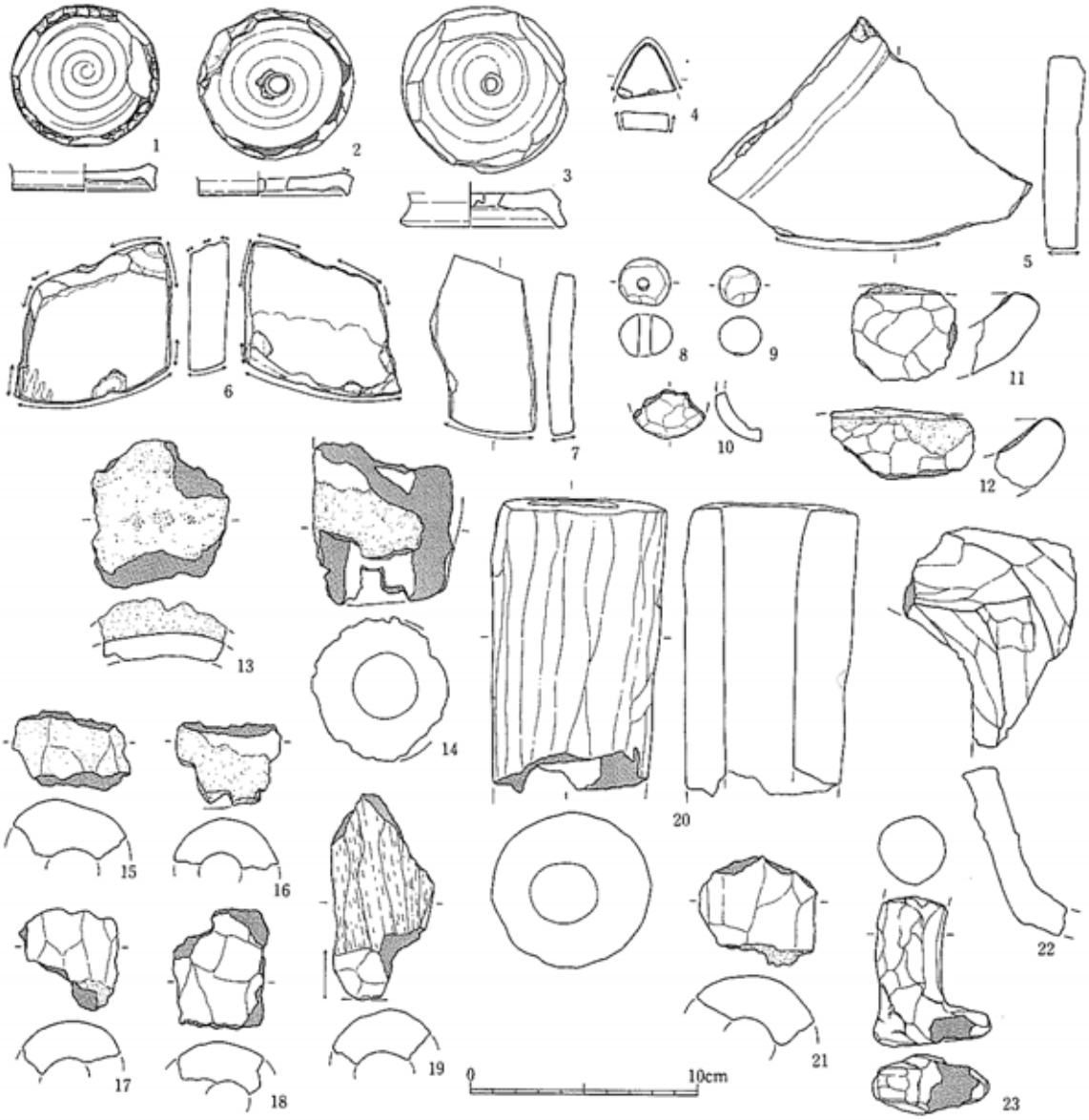
真鍋篤行　1994　弥生時代以降の瀬戸内地方の漁業の発展に関する考古学的考察　瀬戸内海歴史民俗資料館紀要７　瀬戸内海歴史民俗資料館



第176図　土器片製円板

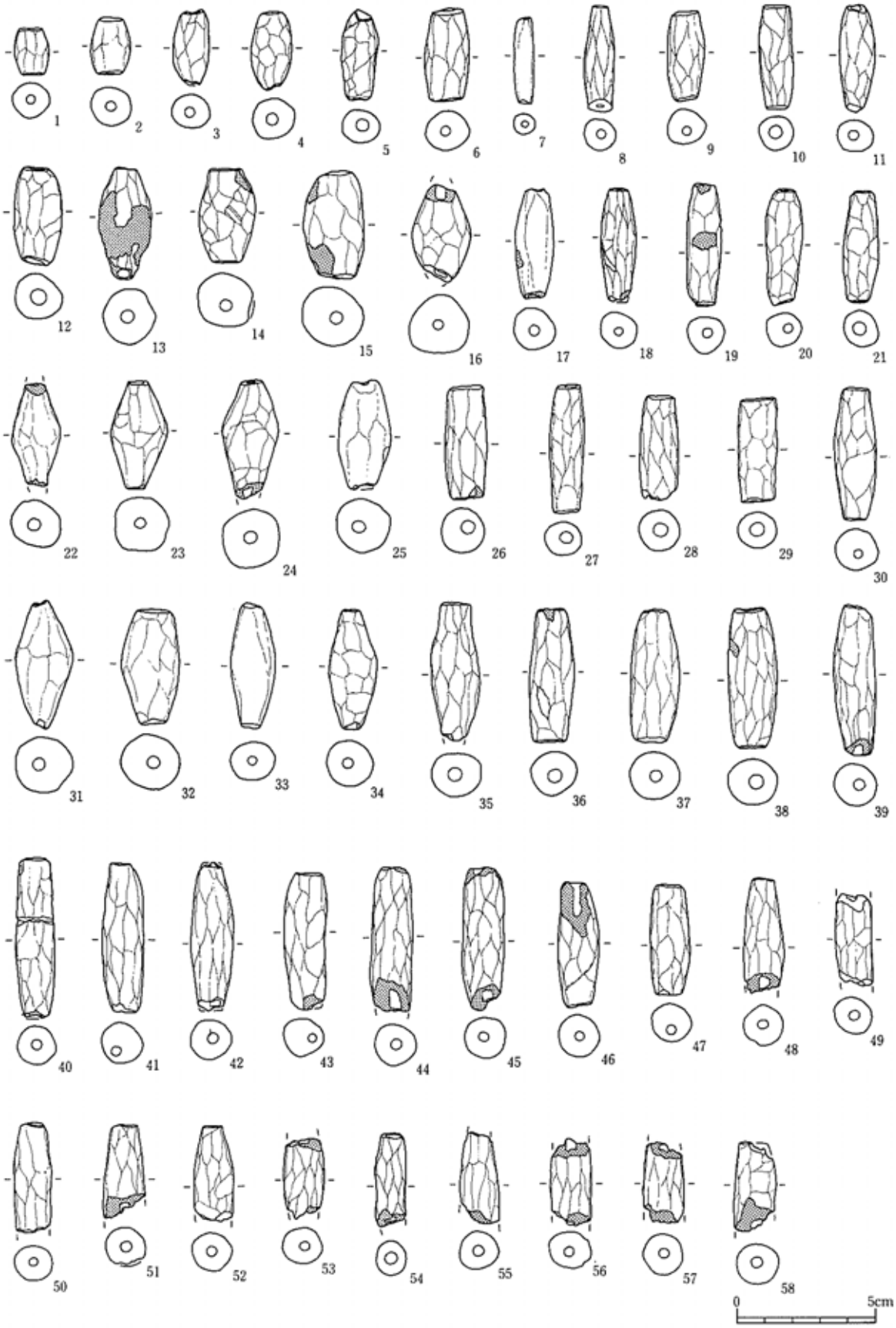
No	区	遺構	層位	素材	大きさ			備考	写真図版	登録番号
					長	幅	厚			
1		D2000	5層	須恵器甕	2	1.9	0.8			228
2		D2000	1層	須恵器甕	2.5	2.2	1.1			249
3		D2000	9～12層	須恵器甕	3	2.7	1	全体摩耗		264
4		X0010	東西大路路面1・2層	須恵器甕	2.5	2.3	1		86-39	192
5		X0010	東西大路路面2層	須恵器甕	2.4	2.2	1.6			203
6		X0010	東西大路路面2層	須恵器甕	2.2	2	1	周辺摩耗		222
7		X0010	東西大路路面2層	瓦	2.8	2.3	2	周辺摩耗		129
8		X0010	東西大路路面2層	須恵器甕	2.8	2.5	0.9			145
9		X0010	東西大路路面2層	瓦	2.7	2.5	2.2			239
10		X0010	東西大路路面3層	須恵器甕	2.5	2.4	1.6	周辺摩耗		202
11		X0010	東西大路路面3層	須恵器甕？	2.4	2.1	0.8		86-34	163
12		X0010	東西大路路面3層上	須恵器甕	3.9	3.3	2.2			104
13		X0010B	東西大路北側溝	須恵器甕	2.6	2.5	1.3		86-38	95
14		X0010C	東西大路南側溝	須恵器甕	2.9	2.8	1.1			257
15		X0010D.E	東西大路南側溝	須恵器甕	1.9	1.7	1.1		86-33	133
16		X0010E	東西大路北側溝	須恵器甕	3.5	3.2	1			231
17		X0010Y	東西大路南側溝	須恵器甕	2.8	2.6	1	全体摩耗		246
18		X0010Y.Z	東西大路南側溝	須恵器甕？	2.1	1.8	0.8	全体摩耗		148
19		X0010	東西大路遺構確認	須恵器甕	3.3	2.7	0.9			368
20		X0010	東西大路北側溝遺確	土師器甕	2.6	2.4	0.6			158
21		X0020	西2道路路面1層	須恵器甕	1.8	1.8	0.8			63
22		X0020	西2道路路面2層	須恵器甕	3.1	2.7	0.8			76
23		X0020D	西2道路西側溝	須恵器甕？	2.9	2.8	1.1			80
24		X0020E	西2道路西側溝	須恵器甕	2.9	2.6	2			102
25		X0020F	西2道路東側溝	須恵器甕	2.7	2.4	1.3	周辺摩耗		190
26		X0020F	西2道路西側溝	瓦	5.2	4.8	2.1			101
27		X0020Y	西2道路東側溝	須恵器甕？	3.3	2.9	1			151
28		X4034	北1道路整地（灰白後）	土師器坏？	2.5	2.5	0.7			16
29		X0030F	西2道路東側溝	須恵器甕	3.7	3.3	1.6	周辺摩耗		137
30		X0030Z	西2道路東側溝	須恵器甕	2.9	2.6	1.6			263
31		X1250	西1道路路面1・2層	須恵器甕	2.2	2	1.1			87
32		X1300	南1道路南側溝	土師器甕	2.3	2.3	1	全体摩耗	86-45	93
33		X1300	南1道路北側溝	須恵器甕	2.1	1.9	1.2	周辺摩耗	86-35	115
34		X1350D	西1道路西側溝	須恵器甕	3.1	3	0.9			109
35		X1350F	西1道路東側溝	須恵器甕	2.1	2	1.3		86-36	288
36		X1350F	西1道路東側溝	須恵器坏	2.4	2.2	0.8			305
37		X0020	西2道路西側溝遺確	瓦	2.7	2.5	1.8	周辺摩耗	86-44	66
38	北1西3		遺構確認	須恵器甕	3	2.7	0.8		86-41	174
39	北1西3	D0671		瓦	2.5	2.1	1.7			11
40	北1西3	K0541	1層	須恵器甕	2.7	2.3	1.9			54
41	北1西3	K0558	1層	須恵器甕？	1.9	1.9	0.8			46
42	北1西3	K0581	1層	瓦	2.6	2.5	1.3		86-43	15
43	北1西3	K0640		瓦	2.9	2.1	1.4			255
44	北1西3	K0839		須恵器甕	2.6	2.6	1.2	全体摩耗		184
45	北1西4	F4002		須恵器甕	2.9	2.3	1.8	全体摩耗		19
46	南1西1	K1442	1層	土師器坏	2.5	2.4	0.7			291
47	南1西2		E468-S429付近	土師器甕	2.7	2.7	1			336
48	南1西2		E459-S408付近	須恵器甕	2.8	2.6	1.1			360
49	南1西2		E459-S408付近	須恵器甕	2.3	2.3	1.4			377
50	南1西2		遺構確認	灰釉皿・●	2.6	2.3	0.9		86-42	25
51	南1西2		1層	土師器甕？	4.3	4.1	0.6	全体摩耗		348
52	南1西2		1層	須恵器甕	4	3.7	1.4			327
53	南1西2		遺構確認	須恵器甕	3	2.9	0.8		86-40	301
54	南1西2		遺構確認	須恵器甕	2.6	2.5	1.7	全体摩耗		373
55	南1西2		遺構確認	須恵器甕？	2.7	2.7	0.9			24
56	南1西2	A0001	1層	須恵器甕	1.9	1.9	1.2	周辺摩耗		349
57	南1西2	D1020B	2層	須恵器甕	2.9	2.7	1	周辺摩耗		223
58	南1西2	D1018		須恵器甕	3	2.8	1.5			309
59	南1西2	E2265	抜き取り穴	須恵器甕？	2.1	2	0.7			237
60	南1西2	E0050	枠内堆積土	須恵器甕	3.4	2.5	1			42
61	南1西2	K0054		須恵器甕	2.3	2.1	0.8		86-37	33
62	南1西2	K0079	1層	須恵器甕	2.2	2.1	1.5	周辺摩耗・一部研磨		252
63	南1西2	K0541	2層	須恵器甕	2.7	2.6	0.5			365
64	南2西1		遺構確認	須恵器甕	2.3	1.7	1.2			317

土器片製円板観察表

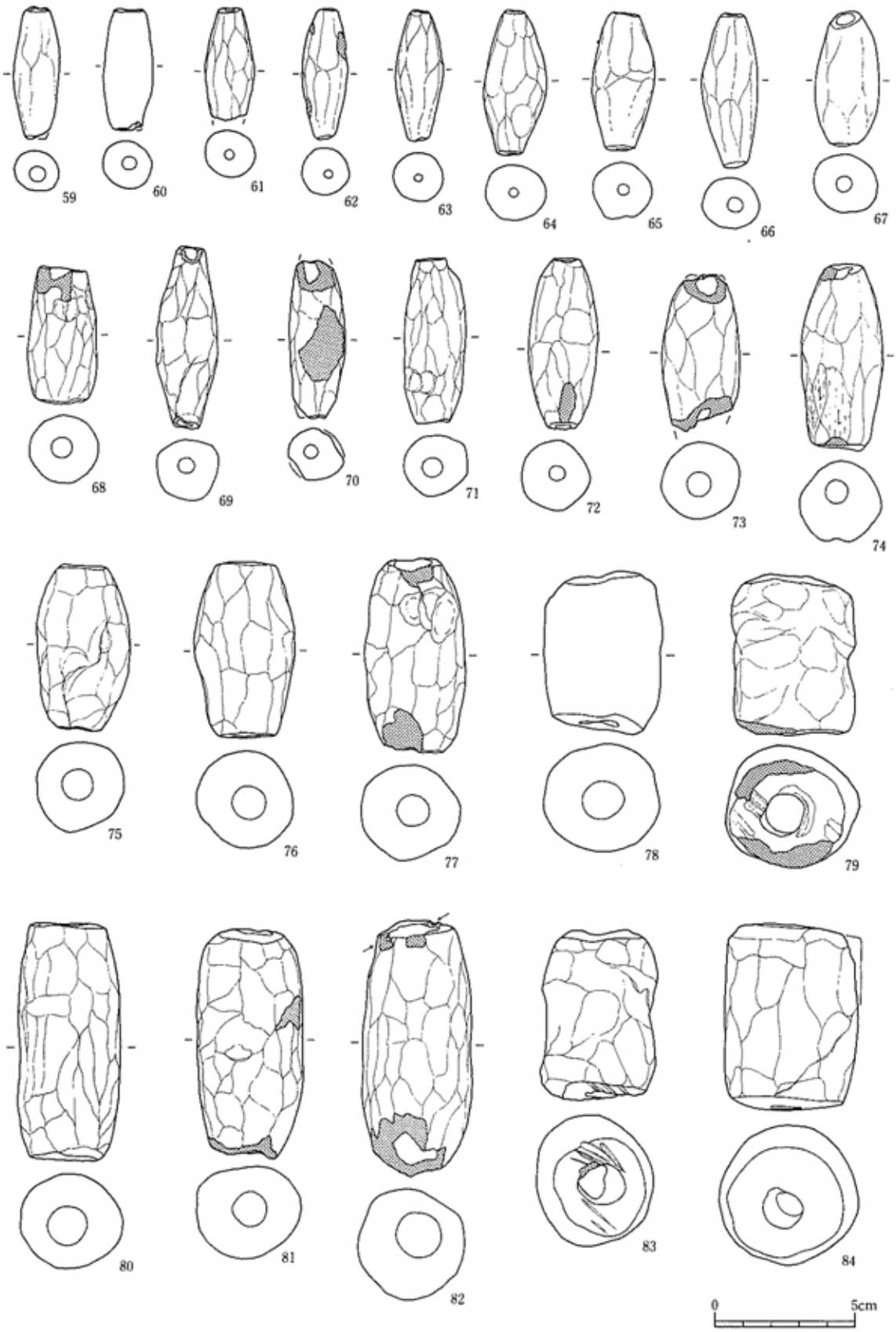


No.	器種名	区	遺構	層位	法量 長さ	法量 幅	法量 厚さ	備考	写真図版	登録番号
1	土器片製円板		X1350F	西1道路東側溝	6.4	6.4	1.2	赤焼土器坏底部素材、周辺研磨	86-47	66
2	土器片製円板		X1350F	西1道路東側溝	6.9	6.7	1.2	赤焼土器坏底部素材、周辺研磨、穿孔	86-46	4
3	土器片製円板	北1西3	E0502		7.6	7.4	1.9	赤焼土器坏底部素材、穿孔		65
4	転用砥	南2西1		1層				須恵器甕素材、二辺使用		3
5	転用砥	南1西2	K0410		14.2	10.5	1.6	須恵器甕素材、一辺使用		1
6	転用砥		X3461A	南1・2間道路南側溝				須恵器甕素材、四辺使用、転用親転用	86-51	5
7	転用砥	北1西3	X0854					須恵器甕素材、一辺使用	86-50	2
8	土玉	南1西2	D1111	1層	2.3	2.1	1.8	孔、ナデ	86-49	6
9	土玉	北1西3	P2108	掘り方	1.8			ナデ	86-48	7
10	土鈴		X0010B	東西大路北側溝	3.2	2.7	0.6	外面ナデ、内面オサエ		5
11	坩堝		X1250H	西1道路東側溝				外面ナデ、内面～口縁部外面に銅滓付着	86-54	2
12	坩堝	南1西2		清掃				外面ナデ、内面～口縁部外面に銅滓付着	86-55	3
13	送風管	北1西3		確認面				大形品の小破片、溶着滓		26
14	羽口		X1900E.F	南2道路北側溝	6.9	6.5		先端部、溶着滓	86-56	37
15	羽口	南1西2		3層				先端部、溶着滓、外面ナデ		23
16	羽口	南1西2	E0050	2層				先端部、溶着滓		35
17	羽口	北1西3		確認面				先端部、溶着滓、外面ナデ		36
18	羽口	北1西3	K0506					外面ナデ、胎土に多量のスサ		24
19	羽口	南1西2	D1111	遺構確認、E408-S342				先端部、外面オサエ・ケズリ		31
20	羽口	南1西2		E468-S423付近	12.9	7.3		吸気部、外面ヘラナデ	86-57	30
21	羽口	南1西2	D1111	1層				先端部、溶着滓、外面ヘラナデ		29
22	土製かまど	南1西2		1層				焚き口部、ナデ	86-53	17
23	脚？		X0010	東西大路北側溝遺確				ナデ・オサエ、先端三叉状？	86-52	15

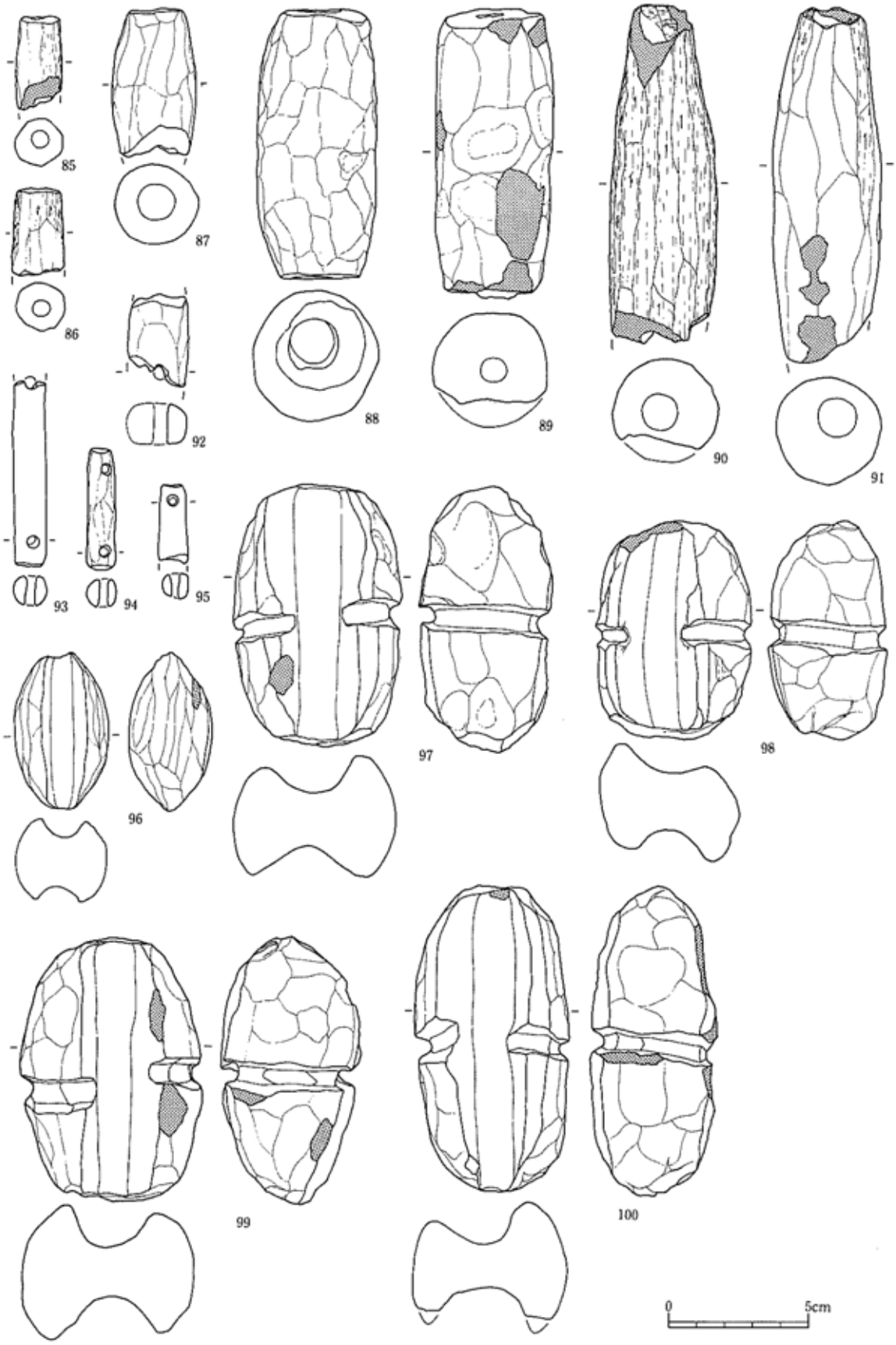
第177図　土製品


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
0
5cm

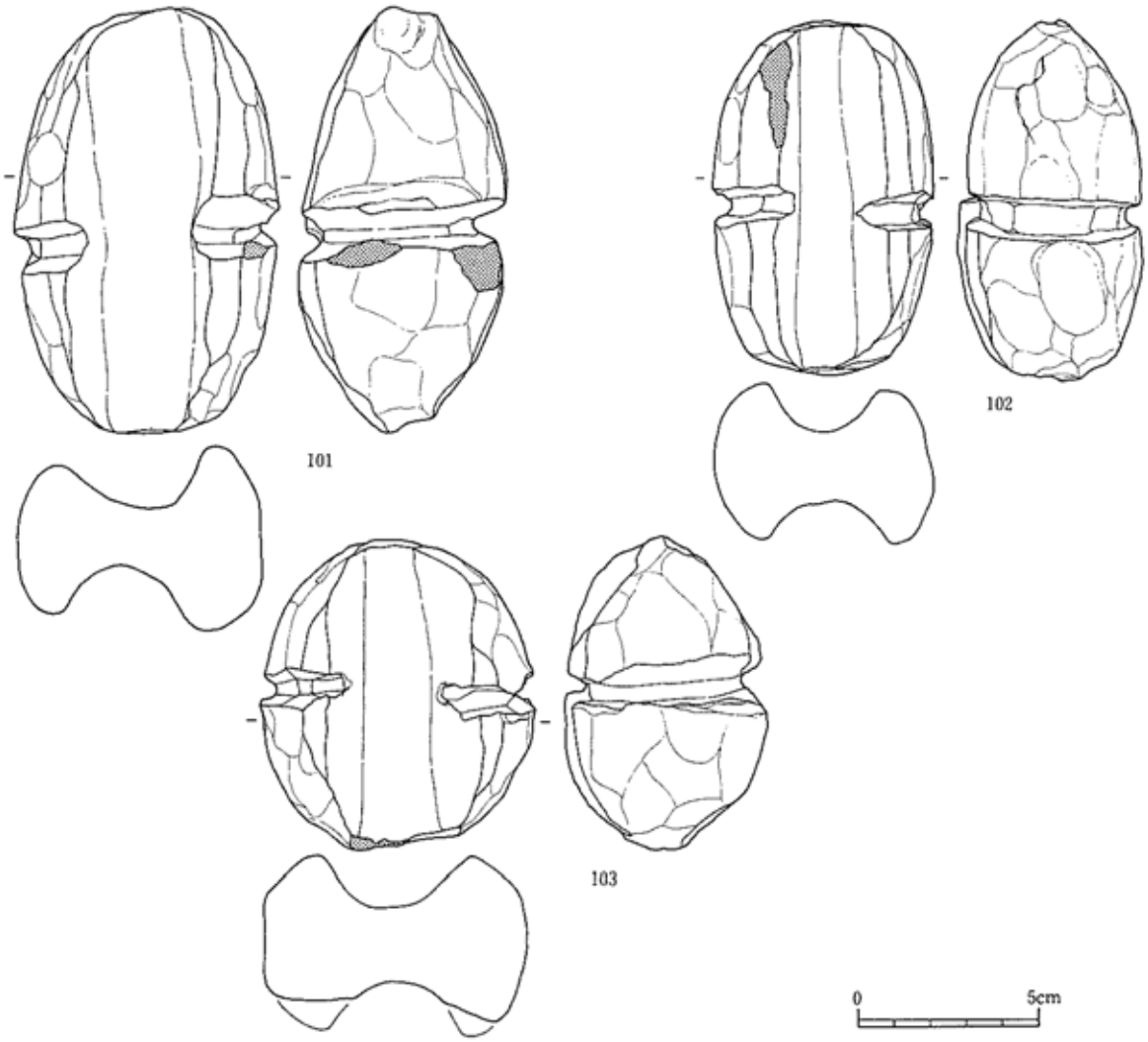
第178図　土錘（1）


59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
0
5cm

第179図　土錘（2）



第180図　土錘（3）



No.	区	遺構	層位	形状分類	法量 長さ	幅	孔径	重さ	遺存	備考	写真図版	登録番号
1	南1西2		基本層位Ⅲa層	管状	1.8	1.3	0.3	2	完形	ナデ	86-15	18
2	南1西2		E390-S318付近	管状	2.1	1.5	0.3	3	完形	ナデ、摩耗		34
3	北1西3		遺構確認	管状	2.7	1.4	0.3	3	破損A	ナデ		24
4	北1西3	B0588	N2-E5柱穴	管状	2.9	1.5	0.3	6	完形	オサエ・ナデ		25
5	北1西3		1層	管状	3.4	1.3	0.4	5	完形	オサエ・ナデ		67
6	南1西2		3層	管状	3.5	1.6	0.3	9	完形	ナデ、摩耗		33
7			2・3層	管状	3.2	0.8	0.2	1	完形	ナデ、摩耗	86-16	60
8			2層	管状	3.8	1.1	0.3	3	破損B	ナデ		2
9	北1西3	B0857	N3-E3柱穴	管状	3.3	1.4	0.3	5	完形	ナデ		57
10	南1西2		1層	管状	3.9	1.3	0.4	6	完形	ナデ		50
11	北1西3		遺構確認	管状	4	1.3	0.3	3	完形	ナデ		10
12		X0010	東西大路路面3・4層	管状	3.6	1.8	0.4	11	完形	ナデ		28
13	北1西3	K0541	1層	管状	4.2	1.9	0.4	12	破損A	ナデ		37
14		D2000	南端部溝掘	管状	3.4	2	0.4	12	完形	オサエ・ナデ		38
15	南3東1		遺構確認	管状	4	2.2	0.4	17	完形	ナデ		16
16		X0010	東西大路北側溝	管状	3.6	2.2	0.3	13	破損A	オサエ・ナデ		65
17	北1西3		1層	管状	4	1.6	0.3	9	破損A	ナデ、摩耗		56
18		X0010	東西大路路面2層	管状	4.1	1.4	0.3	7	破損A	ナデ		74
19	北1西3	E0502	抜き	管状	4.6	1.4	0.4	8	破損A	ナデ		46
20		X1300	南1道路北側溝	管状	4.3	1.3	0.5	7	破損A	ナデ		49
21	南1西2	P0113	E462-S448	管状	4.1	1.3	0.4	7	破損A	オサエ・ナデ		51
22	北1西3		遺構確認	管状	3.8	1.8	0.3	9	破損A	ナデ		21
23	北1西3	D0905		管状	4	2.1	0.3	12	完形	ナデ		58
24		X0010B	東西大路北側溝	管状	4.4	2.1	0.3	15	破損A	オサエ・ナデ		44
25		X0010B	東西大路北側溝	管状	4.1	2	0.4	12	破損A	ナデ・摩耗		40
26		X1250	西1道路西側溝	管状	4	1.5	0.4	10	破損A	ナデ		12

第181図　土錘（4）

No	区	遺構	層位	形状	法量				遺存	備考	写真	登録
				分類	長さ	幅	孔径	重さ			図版	番号
27	南1西2		E471-S435	管状	4.7	1.3	0.3	7	完形	ナデ		3
28	南1西2	K1423	1層	管状	3.9	1.4	0.5	7	破損B	ナデ		7
29	南1西2		1層	管状	3.8	1.5	0.4	7	完形	ナデ		15
30	南1西2			管状	4.9	1.5	0.3	11	完形	ナデ		14
31	北1西3	B0589	N2-E2柱穴	管状	4.8	2.1	0.3	15	完形	ナデ、摩耗	86-18	20
32	北1西3		3層	管状	4.3	2.2	0.3	15	完形	ナデ		22
33		X0020A	西2道路西側溝	管状	4.6	1.7	0.2	11	完形	摩耗		41
34		X1250	西1道路東側溝	管状	4.4	1.7	0	11	完形	オサエ・ナデ		63
35	南1西2			管状	5.1	1.8	0.4	14	破損A	ナデ		35
36	南1西2		E471-S429付近	管状	4.9	1.7	0.5	13	完形	ナデ		31
37	南1西2		1層	管状	5	1.8	0.4	15	完形	ナデ		27
38	南1西2	B3035	N4-E1柱穴	管状	5.2	1.8	0.4	17	完形	ナデ		53
39	南1西2		遺構確認	管状	5.5	1.6	0.3	13	破損A	ナデ		17
40	南1西2	K2266		管状	5.4	1.5	0.3	11	破損A	オサエ・ナデ	86-1	79
41	南1西2	K2266		管状	5.5	1.6	0.3	15	破損A	ナデ	86-2	82
42	南1西2	K2266		管状	5	1.5	0.3	12	破損A	ナデ	86-3	78
43	南1西2	K2266		管状	5.8	1.4	0.3	12	破損A	オサエ・ナデ	86-4	80
44	南1西2	K2266		管状	5.3	1.5	0.3	13	破損A	ナデ	86-5	83
45	南1西2	K2266		管状	5.2	1.5	0.3	13	破損A	ナデ	86-6	81
46	南1西2	K2266		管状	4.5	1.5	0.3	10	破損A	ナデ	86-7	85
47	南1西2	K2266		管状	4.1	1.4	0.3	8	完形	ナデ	86-14	77
48	南1西2	K2266		管状	4.2	1.5	0.3	8	破損B	ナデ	86-9	86
49	南1西2	K2266		管状	3.5	1.4	0.3	7	破損B	ナデ	86-10	88
50	南1西2	K2266		管状	4.1	1.3	0.3	6	破損B	ナデ	86-11	87
51	南1西2	K2266		管状	3.5	1.5	0.3	7	破損B	ナデ		92
52	南1西2	K2266		管状	3.5	1.4	0.3	6	破損B	ナデ	86-8	89
53	南1西2	K2266		管状	3	1.4	0.3	5	破損B	ナデ		90
54	南1西2	K2266		管状	3.4	1.2	0.4	5	破損B	ナデ	86-13	84
55	南1西2	K2266		管状	3.5	1.5	0.3	7	破損B	ナデ		94
56	南1西2	K2266		管状	3.2	1.5	0.3	7	破損B	ナデ	86-12	93
57	南1西2	K2266		管状	3.1	1.5	0.3	5	破損B	ナデ		91
58	南1西2	K2266		管状	3.3	1.5	0.3	5	破損B	ナデ		95
59	南1西2		遺構確認	管状	4.9	1.7	0.5	10	破損A	ナデ		19
60	南1西2		1層	管状	4.4	1.8	0.4	10	破損A	摩耗		39
61		X4013	北1道路南側溝	管状	4.1	1.8	0.3	12	破損B	ナデ、摩耗		26
62		X0010E	東西大路南側溝	管状	4.8	1.7	0.3	12	完形	ナデ		62
63		X4012	北1道路北側溝	管状	4.8	1.7	0.3	11	完形	ナデ		29
64		X0020	西2道路西側溝	管状	5.2	2.1	0.2	20	完形	オサエ・ナデ	86-17	106
65		X1300F	南III道路南側溝	管状	5	2.1	0.3	20	破損B	ナデ、摩耗		107
66		X0010	東西大路路面3・4層	管状	5.6	2	0.3	16	完形	ナデ、摩耗		119
67	南1西2		1層	管状	4.9	2.3	0.5	22	完形	ナデ、摩耗		114
68	南1西2	B1183		管状	4.8	2.5	0.6	24	破損A	オサエ・ナデ		116
69	北1西3	E0502	抜き穴	管状	6.6	2.2	0.5	29	破損A	オサエ・ナデ		108
70	南1西2	K2019		管状	5.8	2	0.5	18	破損A	ナデ		76
71	南1西2	D1111	1層	管状	6	2.3	0.6	25	完形	オサエ・ナデ		115
72		X1350F	西1道路東側溝	管状	6.2	2.5	0.5	24	完形	オサエ・ナデ		109
73	南1西2	K0038	1層	管状	5.6	2.9	0.7	36	破損B	ナデ		111
74	南1西2		1層	管状	6.7	2.9	0.6	35	破損A	ナデ・ケズリ	86-22	118
75	南1西2		E432-S387付近	管状	5.9	3.4	1.2	54	完形	オサエ・ナデ	86-21	112
76	北1西3	K0579	2層	管状	6.3	3.5	1.1	73	完形	ナデ		128
77	南1西2	K2034		管状	6.9	3.6	1.1	82	破損A	オサエ・ナデ		124
78		X0010B	東西大路北側溝	管状	5.7	4	1.2	94	破損A	摩耗		135
79			1層	管状	5.7	4.6	1.3	108	破損A	オサエ	86-24	134
80	南2西1	D1602B	1・2層	管状	8.6	3.7	1.3	104	完形	ナデ		131
81	北1西3		3層	管状	8.3	3.8	1.2	116	破損A	ナデ・ケズリ		120
82		X0020D	西2道路東側溝	管状	9.2	3.9	1.7	118	破損A	オサエ・ナデ		126
83	北1西3	B0858	遺構確認	管状	6.1	4.3	1.4	101	完形	オサエ・ナデ		132
84	北1西3	E0864B	掘り方埋土	管状	6.5	4.9	1.2	148	破損A	オサエ・ナデ		133
85		X0010	東西大路北側溝	管状	3.4	1.7	0.6	10	破損B	陶錘、ケズリ・ナデ	86-20	71
86		X0010Z	東西大路北側溝	管状	3.2	1.9	0.6	12	破損B	陶錘、ケズリ・ナデ	86-19	66
87		X0010	東西大路北側溝遺確	管状	5.2	3.1	1.2	41	破損B	陶錘、ナデ		110
88	南1西2		遺構確認	管状	9.6	4.4	1.4	164	完形	オサエ・ナデ、糸切り	86-23	129
89	南1西2		清掃	管状	10.4	4.1	0.9	185	破損A	オサエ・ナデ、篦切り		130
90		X0030D	西2道路西側溝	管状	12.3	3.9	1.2	116	破損B	ケズリ・ナデ		122
91		X0010	東西大路路面1・2層	管状	12.9	3.9	1.2	150	破損B	ナデ・ケズリ	86-25	125
92			遺構確認	棒状・有孔	3.2	2.2		13	破損B	一端に孔、ナデ		153
93	南1西2	D1111	1層	棒状・有孔	6.6	1.3	0.4	14	破損B	両端に孔、ナデ	86-28	152
94	北1西3	K0850		棒状・有孔	4.4	1	0.3	5	完形	両端に孔、ナデ	86-26	151
95		X1250	西1道路路面2層	棒状・有孔	2.8	1.1	0.3	3	破損B	一端に孔、ナデ	86-27	154
96		X0010A	東西大路北側溝	有溝a	5.6	3.3	1.4	46	完形	横溝なし、ナデ	86-29	140
97		X0010Z	東西大路北側溝	有溝b	9.2	5.8	4.4	202	破損A	縦溝に布目、オサエ	86-32	146
98			E351-N258付近	有溝b	7.8	5.3	3.9	138	完形	縦溝に布目、オサエ		143
99	南1西2		遺構確認	有溝b	11.8	7.2	5.2	318	完形	オサエ・ナデ		145
100	北1西3		遺構確認	有溝b	10.9	5.4	4.3	190	破損A	縦溝に布目、オサエ		147
101	北1西3	E0864B	枠内埋め土1層	有溝b	9.5	6.2	4.8	206	破損A	オサエ・ナデ	86-31	148
102	北1西3	E0864B	2層	有溝b	9.8	6.1	4.5	223	完形	縦溝に布目、オサエ		142
103	北1西3	E0864	掘り方埋め土	有溝b	8.6	7.4	4.9	235	破損A	オサエ・ナデ	86-30	144

遺構	時期	土玉	土鈴	円板	土鐘			埋鳴	羽口	転用砥	土製	壁材	不明	計
	層位				管状	有孔	有溝		送風管		カマド			
表採				2					1					3
道路跡														
東西大路	B			5										5
	C			6	3		1							10
	D			1	1		1							3
	E		1	11	3									15
	EF			3	2									5
	F			24	1									25
	G			22	2									24
	FG			1										1
	H			3	1									4
	I			2										2
	HI			6										6
	GH			3										3
	GHI			6	1									7
	遺構			8	4								1	13
西2道路	C			1										1
	B			1										1
	D				1									1
	F			3										3
	G			5	2									7
	H			1										1
	I			10										10
	HI			4										4
	遺構			4	1									5
北1道路				4	2									6
西1道路	路面2				1	1							2	
	遺構			2	1									3
	B			1										1
	D			2										2
	F			6	2									8
				9	3			1					1	14
南1道路	F			2	1									3
				5	1									6
	遺構			2										2
南2道路	A・B			2										2
	C			1										1
	EF								1					1
北1西4区														
SF4002				1										1
北1西3区														
遺構外				29	10		3		3			1	2	48
SB0588				2	1							1		4
SB0589					1									1
SB0591				1										1
SB0595				1										1
SB0857				2	1									3
SB0858					1									1
SI0552				1			1							2
SE0502				1	2									3
SE0864	b				1		2							3
SK0505					1									1
SK0506									1					1
SK0507				1										1
SK0518				1										1
SK0524				1										1
SK0533				1										1
SK0540				1										1
SK0541				5	1				2					8
SK0544				1										1
SK0558				1										1
SK0579					1									1
SK0581				2										2
SK0640				1										1
SK0670					1									1
SK0826					1									1
SK0839					2					1				3
SK0841				2									2	
SK0850						1								1
SD0501				1										1
SD0553				1					1					2
SD0671				1										1
SD0827								1						1
SD0905					1									1
P0301				1										1
P2108		1												1
SX										1				1
SX1856				1										1
SX0855							1							1

遺構	時期	土玉	土鈴	円板	土鐘			埋鳴	羽口	転用砥	土製	壁材	不明	計
	層位				管状	有孔	有溝		送風管		カマド			
南1西2区														
遺構外				68	29	1	1	1	5		1	1		＊＊＊＊
SB0091				1										1
SB0750				1										1
SB1075									1					1
SB1102				1										1
SB1103												1		1
SB1183					1									1
SB1241				1										1
SB3035					1									1
SB0862	B				1									1
SE0050				1					1					2
SE2265				1										1
SE3026				5								1		6
SA0001				2										2
SK0008				1										1
SK0038					1									1
SK0054				1										1
SK0063				1										1
SK0079				1										1
SK0410										1				1
SK0541				1										1
SK1005				1										1
SK1010				1										1
SK1022				1										1
SK1341				1										1
SK1347					1									1
SK1423					1									1
SK1426					1									1
SK2009				1										1
SK2019				1	1									2
SK2034					1									1
SK2207				1										1
SK2220										1				1
SK2266					29									29
SK2298	B			1										1
SK3018				1										1
SD0040					1									1
SD0061				3										3
SD0084													1	1
SD0101				1										1
SD1018				1										1
SD1020				10										10
	B								1					1
SD1111		1		7	5	1			5					19
SD1201				1										1
SD1374				1										1
SD2050				1										1
SD2228				1										1
SD2253				1										1
SD3110				1										1
P0113					1									1
P0197				1										1
南1西1区														
SK1442				3										3
SK2282					1									1
南2西1区														
SB1555												1		1
SE1606				1	1									2
SE3207				1										1
SA1609				1										1
SF1625				2										2
SK1606									1					1
SD1601	B											1		1
SD1602	B				1									1
P0403					2									2
遺構外				5					1	1				7
南3東1区														
遺構外					3									3
南3西1区														
SD1601	A									1				1
遺構外				2					1	1				4
SD2000	1			1										1
	4			1										1
	5			1	1									2
	7.8			1										1
	8			1										1
	9			1										1
	10			2				1						3
	11			1										1
	12											1		1
	5～10								1					1
	9～12			1										1
	溝埋土				1									1
合計		2	1	＊＊＊＊	＊＊＊＊	4	11	4	27	6	1	8	5	＊＊＊＊

第44表　遺構別土製品組成

8　石製品

石製品には、石帯・管玉・琥珀・雲母片・陽物・円板・紡錘車・石錘・火打ち石・砥石・滑石製不明製品などがある。遺構ごとの組成を第46・47表に示した。

①石帯（第182図1～5）

巡方4点、鉈尾1点がある。

1は巡方の小破片である。潜り穴が部分的に残る。白地に黒い縞文様が入る石材であるが、焼けているために石材名は不明である。

2には比較的幅広の透かし孔がある。上の二隅に2ケ一対の潜り穴があるが、おそらく下にもあったものと考えられる。表面と側面は丁寧に磨かれ、漆黒の光沢がよく出ている。裏面も研磨されているが、素材取りの鋸引きの痕跡かと見られる条痕が残る。

4も透かし孔がある。2とほぼ同じ大きさと推定される。下の二隅に潜り孔が残っている。薄緑色の石材で焼けて（？）風化してはいるが、一部光沢が残っている。

5は完形品で、2・4よりも大形である。透かし孔はない。四隅に2ケ一対の潜り孔がある。2と同じ石材で、表・側面に漆黒の光沢がある。裏面には鋸引き痕？と剥離面が残る。

3は大形の鉈尾である。上・下辺が平行し先端部がなだらかな弧を描く。潜り孔は3ケ所にある。2・4と同石材で、表・側面の仕上げも一段と丁寧である。裏面に研磨以前の鋸引き痕？がある。

②管玉（第182図7）

南1西2区の遺構外より1点出土した。寸づまりの完形品で、石材は薄緑色の碧玉である。下端に製作時の剥離面が残る。古墳時代以前に属する可能性もある。

③琥珀（写真図版85）

3点確認した。取り上げ時に破損してしまったが、いずれにも明確な加工痕は見られない。2点は掘立柱建物（北1西3区ＳＢ751、南1西2区ＳＢ2023）の柱穴埋土からの出土であり、地鎮に関わる埋納物であった可能性がある。それぞれ4㎝程度（写真図版85－23）、1㎝以上の大きさの楕円礫である。他の1点は北1西3区のＳＫ850土壙の出土で、1㎝程度の大きさである。

④雲母片（銀葉？、写真図版85－24）

北1西3区のＳＡ831塀跡の遺構確認時に出土した。細かく破砕・剥離して形状は不明だが、直線的に裁ち落とした痕跡が残る。調査中にこの他にも何ヶ所かで雲母片を確認しているが、取り上げることはできなかった。香をたく際に下に置く台として使用する銀葉の可能性がある。

⑤陽物（第183図12～15）

未製品と思われるものを含めて5点ある。13～15は棒状の自然石の端部近くに溝を削り込み、頭部と体部の境を作りだしている。14は両端に頭部があったものと見られる。いずれも頭部先端には加工はない。12は全体の形状から陽物の未製品と考えたが、境界部が敲打によって作られており問題が残る。同様な未製品？がもう1点ある。石材は砂岩と凝灰岩が用いられている。

⑥円板（第182図14）

1点確認した。砂岩製で側面に剥離と研磨を加え、ほぼ円形に仕上げている。前述した土器片製円

板と類似する大きさである。

⑦紡錘車（第182図7〜12）

6点ある。細部の形状は様々だが、径4.5〜6㎝の円形で重さは50〜60ｇのものが多い。断面形は、台形・D字形・長方形がある。7の側面には刻線が1本めぐる。12は平面形がやや不整形で他よりも分厚い。重さは90ｇある。いずれも中央の孔はほぼ垂直にあけられている。石材は11のみ粘板岩で他は凝灰岩である。

⑧石錘（第182図3）

1点ある。粘板岩製。体部は紡錘形で両端に溝を削り出して紐掛けを作っている。

⑨火打ち石（第183図1〜11）

火打ち金は出土していないが、これと打ち合わせて使用されたと考えられる火打ち石が24点確認された。

石材は石英岩が最も多くて12点、次いで玉髄6点、碧玉3点、チャート3点である。いずれも珪酸分が多く硬い石材である。大きさは、長さが3〜7㎝・幅2〜5㎝・厚さ1〜3㎝程度で、民俗例に知られるものよりやや小さめである(高嶋　1985)。形状は、分厚い板状のものから不整形な多面体形まで様々である。

使用痕である敲打痕は、1ケ所だけのものから多いものでは5ケ所にも及ぶ。敲打痕が残された位置は、鋭い縁辺ではなく分厚く90度に近い鈍い稜線上に限られる。自然面同志が作る稜線は使われず、剥離や折り取りによってできた稜線が使用されている。

素材は角礫〜円礫・剥片と様々である。剥離もしくは折り取りには両極剥離が多用されている。両極剥離に見られる“剥離角が90度前後になる”(阿部　1983)という特性を利用して、必要な角度の稜線を作りだしたと理解できる。製作時に生じたと見られる玉髄・石英岩の砕片も34点出土している。

火打ち石とその製作時の砕片の出土は、他の遺物と同様に北1西3区と南1西2区に多く、明確な集中を見せることはない。図示した資料で出土層の年代をおさえられるものは、6が9世紀初頭？、9が9世紀前半、7・8・11が9世紀後半、1が10世紀前葉？（灰白火山灰降下以降）、2・5が10世紀中葉以降である。

⑩砥石（第184〜195図）

砥石は370点と多量に出土した。基本層3層以上には中世以降の遺物が含まれる可能性があるが、土器の出土量から見てほとんどは奈良・平安時代のものと考えられる。これらは石材・粒度・大きさ・形状・使用部位・使用程度ともに実に多様である。地区ごとの組成を石材・粒度別に第45表に示した。表中の粒度は、Aが粗粒、Bが中粒、C・Dが細粒（Dは白色凝灰岩）を示す。

石材には砂岩・安山岩・凝灰岩・粘板岩・集塊岩？がある。粒度は砂岩のようにかなり粗いものから、凝灰岩・粘板岩のような細粒のものまでさまざまである。また砂岩では、粒度の異なる部分が層状に重なり、その境界が節理面となって板状に割れ易いようなものもある。粘板岩には、現在牡鹿町付近で産出し硯に加工されるものによく似た良質なものがある。凝灰岩は白色で細粒均質なものがほとんどである。点数は砂岩209点、安山岩3点、凝灰岩114点、粘板岩29点、集塊岩？1点、不明10点

である。

完形品が少ないため形状と大きさは不明なものが多いが、いずれも変異に富んでいる。砥石の使用状況を考えれば当然のことである。角柱状をした定形的なものが比較的多いが、大形で不定形なものも目立つ。小形品には紐穴があけられたり、紐掛け用の抉りが付けられたいわゆる提砥石がある。大形品は固定用（置砥）として衣装されるにふさわしい大きさを示している。

砂岩や粘板岩の砥石では、製作痕跡と見られる剥離面が観察されるものがある。節理面を利用して板状の素材を剥離し、周辺に整形も行っている。ただし定形的な形状となるような入念な整形剥離はあまり見られない。製作時に生じたと考えられる砂岩(粗粒・中粒)・粘板岩の剥片の出土があるが、点数は多くない。

凝灰岩の白色細粒のものでは、製作痕跡が観察されるものは少なく、剥片は全くない。このうち 2 点に擦り切り手法による再生の痕跡が見られた。第 195 図 103 は、破損した大形品に 4 面から擦り切りの溝をいれて分割し、再使用した例である。擦り切り溝の内部には、溝の方向と平行する擦痕とともに直交する擦痕も見られる。鋸で擦り切ろうとした可能性がある。第 195 図 16 は角柱・板状のものが使用によって角錐形に変形していると見られるが、肥厚した部分に斜めに擦り切り溝を入れてそこを折りとっている。

使用程度も様々である。例えば砥石の 1 面だけがかすかに使用されているもの、研磨面の中央部が擦り減って面全体が内湾しているもの、砥石のあらゆる面が使用され、研磨面が 5･6 面にも及ぶもの、使用中に生じた折面も使用している小形品がある。

研磨面は通常平坦で広い面であることが多いが、板状の砥石の木口や側辺が使用されることがしばしばある。この場合、擦痕の方向は面の長軸に対して直交していることが多い。研磨面には溝や穴も見られる。溝は縁辺部の稜線に直交もしくは斜交して付けられることが多く、断面はV字形・逆台形になっている。鉄鏃のような棒状の鉄器の側辺を研いだ痕跡だと見られる。溝のように深くはならないが、研磨面を削り取ったかのような痕跡も見られる。相当に強い力で、こすり付けるようにして研いだものと考えられる。

区ごとに出土状況を見ると(第 45 表)、最も多いのは南 1 西 2 区の 101 点、次いで北 1 西 3 区の 76 点、南 2 西 1 区の 20 点、南 3 西 1 区の 6 点となっている。これら 4 つの区の調査面積はおおよそ同じとみて差し支えないが、南 3 区は一貫して水田として利用されているので、極端に少ないのは当然である。他の 3 つの区では、土器などの遺物全体量が北 1 西 3 区で圧倒的に多いことを考慮すると、南 1 西 2 区の砥石の出土量はかなり多いものと考えなくてはならない。なお、粘板岩は産地が限定される石材であるが、特に集中して分布する地区は認められなかった。

⑪滑石製不明製品？（第 182 図 15～17）

15 は滑石の大形剥片の周囲を削り取り、ほぼ円形に仕上げた製品である。側面の稜線を面取りした部分がある。表面の研磨は部分的で何らかの未製品である可能性もある。北 1 西 3 区の竪穴状遺構ＳＫ552 出土で、共伴した土器の年代は 9 世紀後半である。16・17 は小破片であるが 17 と同種のものと予想される。

	粗粒(A)			中粒(B)			細粒(C)				細粒(D)	小計
	砂岩	安山岩	凝灰岩	砂岩	凝灰岩	?	砂岩	粘板岩	集塊岩?	?	凝灰岩	
SD2000 河川	2			15	1		1	1			3	23
東西大路	12	1		11	1	3	6	3	1		16	54
北1道路	1			2			1	2		1	2	9
南1道路	5			6			1					12
南1・2道路												0
南2道路				5		1				1	1	8
西0道路												0
西1道路	6			6							4	16
西2道路	3			9	1		2	2			8	25
西3道路				1	1							2
北1西4区	2			3				1			5	11
北1西3区	7			20	1	2	7	11		2	27	77
南1西1区				2							1	3
南1西2区	11	2	1	38		2	6	8			33	101
南1西3区	1			2								3
南2西1区	2			9		1	2	1			5	20
南3西1区				2							3	5
南3東1区						1						1
小計	52	3	1	131	5	10	26	29	1	4	108	370

第45表　地区別の砥石組成

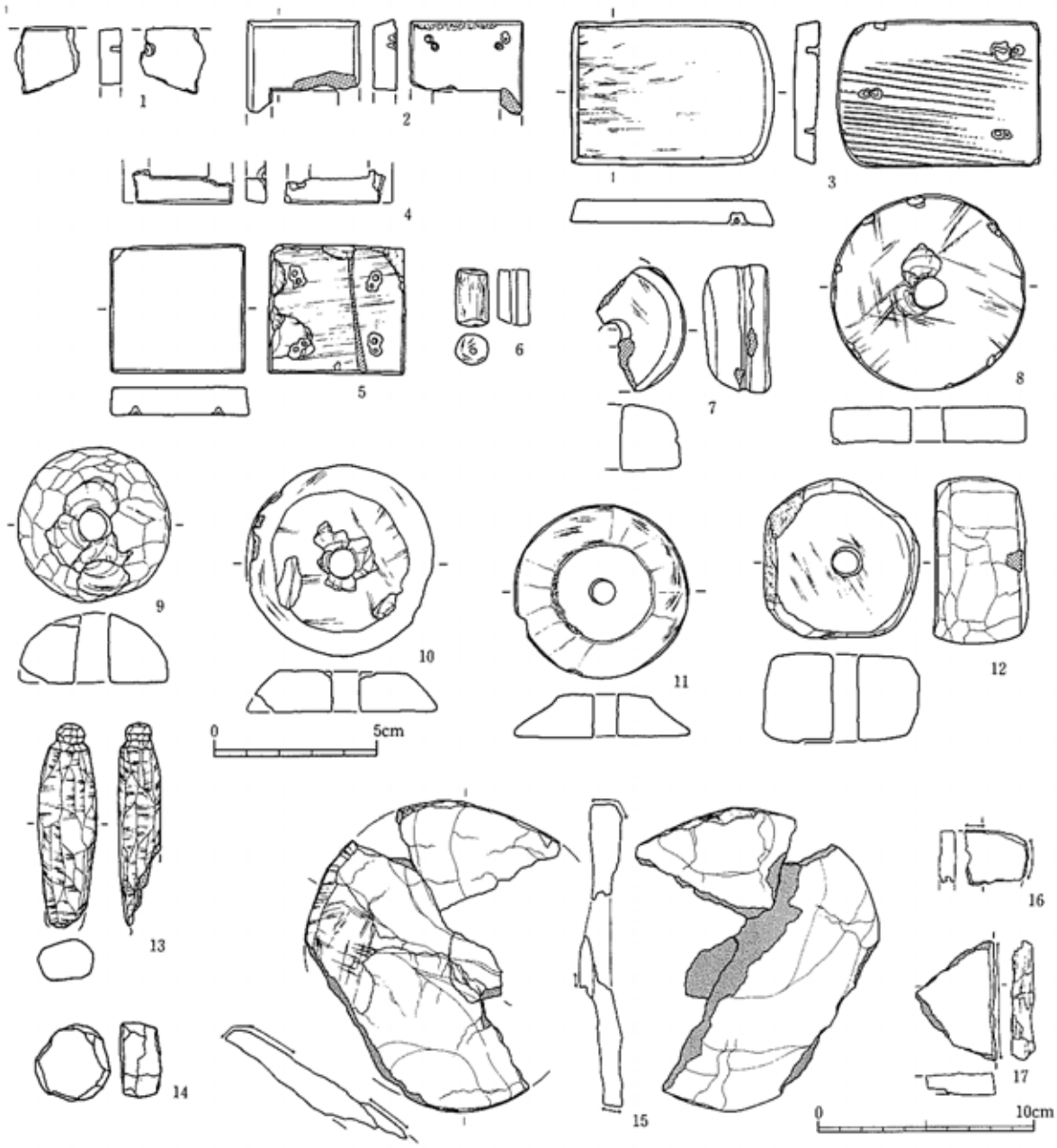
⑫不明石製品（第183図16～19）

16～19は細粒の凝灰岩製である。いずれも削りあるいは研磨の痕跡が明瞭に観察される。砥石の可能性も残されるが、材質が軟質であることと円柱形・円錐形など一定の形状が作りだれていることから石製品と判断した。

〈引用・参考文献〉

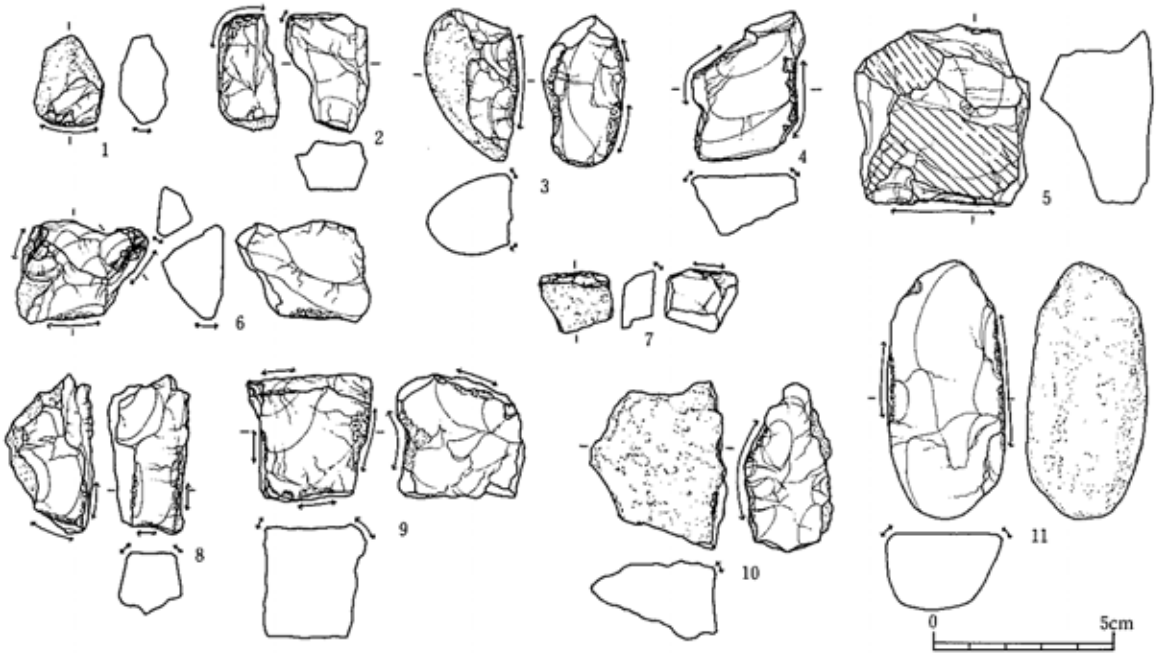
阿部朝衛　1983　バイポーラーテクニックの技術的有効性について　考古学論叢　芹沢長介先生還暦記念論文集　pp199-233　寧楽社

高嶋幸男　1985　火の道具　柏書房

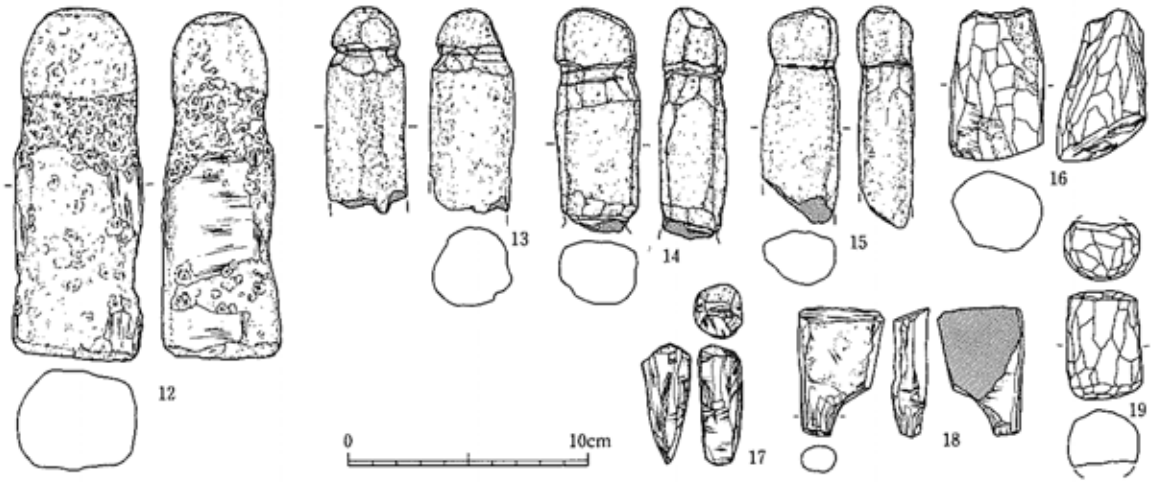


No.	器種	区	遺構	層位	石材	法量 長さ	法量 幅	法量 厚さ	備考	写真図版	登録番号
1	石帯・巡方	南1西2		遺構確認	凝灰岩？	(2)	(1.9)	0.7	焼け破損		3
2	石帯・巡方		X4024	西3道路東側溝	粘板岩	(2.9)	3.5	0.7	窓あり、破損	85-15	2
3	石帯・鉈尾		D2000		？	4.5	6.2	0.7	裏面に擦り切り痕？	85-17	55
4	石帯・巡方	北1西3	D0846A		凝灰岩？	(1)	(3.1)	0.6	窓あり、破損		4
5	石帯・巡方	南2西1	D1601B	1層	粘板岩	4	4.1	0.8	ほぼ完形、窓なし	85-16	1
6	管玉	南1西2			？	1.8	1		孔径0.15	85-19	11
7	紡錘車	南1西2		E456.S396付近溝掃	凝灰岩			2	焼け破損、重(20g)		10
8	紡錘車	南1西2	K1218		凝灰岩	6.1	6	1.1	孔径1、重61g	85-22	6
9	紡錘車	北1西3		遺構確認	凝灰岩	4.7	4.6	2.3	孔径1、重50g		7
10	紡錘車		X1250F	西1道路東側溝	凝灰岩	5.8	5.6	1.2	孔径0.8、重56g	85-20	8
11	紡錘車		X0010Z	東西大路北側溝	粘板岩	5.3	5.3	1.3	孔径0.7、重51g	85-21	5
12	紡錘車	北1西3		E330.S237付近溝掃	凝灰岩	5.1	5	2.8	孔径0.75、重96g		9
13	石錘		X1250A	西1道路西側溝	粘板岩	(6)	1.7	1.2	棒状両端に糸かけ、重(15g)	85-25	18
14	円板		X0010F	東西大路南側溝	砂岩	2.5	2.2	1.1	周辺に剥離と研磨		54
15	石製容器？	北1西3		E330~S231付近遺確	滑石	(14.2)	(12.3)	(1.6)	19と接合	85-28	19
	石製容器？	北1西3	K0552	1層	滑石						20
16	？		X0020	西2道路路面1層	滑石	(3)	(2.5)	(0.8)			22
17	？		D2000	10層、北拡張	滑石	(5.5)	(3.6)	(1.2)			21

第182図　石製品－石帯・玉類・紡錘車など－

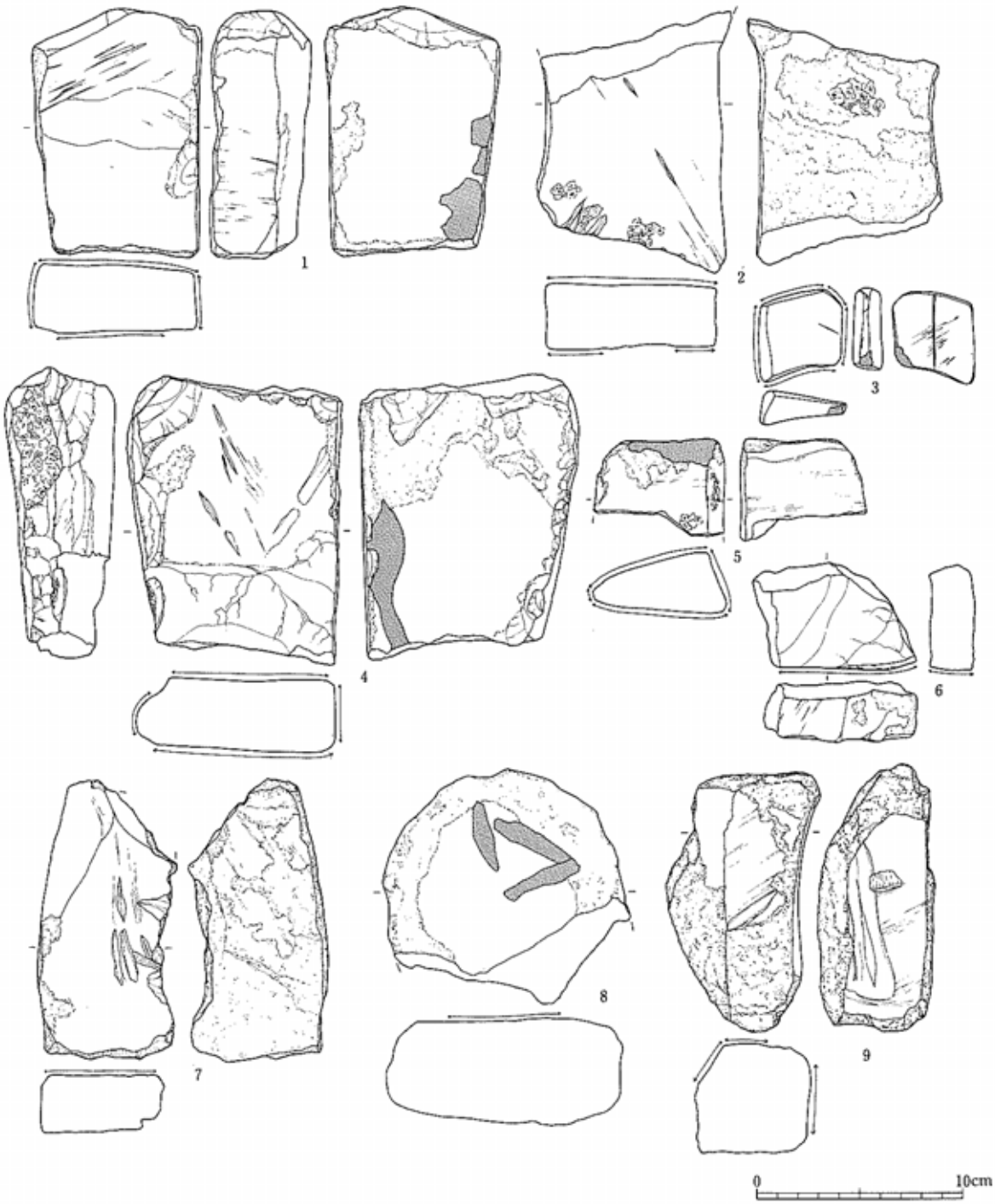


No.	器種	区	遺構	層位	石材	法量 長さ	法量 幅	法量 厚さ	備考	写真図版	登録番号
1	火打ち石	南1西2区	D1020B		石英岩	2.5	1.8	1.6	両極剥離？	角礫	4
2	火打ち石		X0020	路面1・2層	石英岩	3.6	2.4	1.5	両極折り？	角礫	15
3	火打ち石			3層　ピア61	石英岩	4.4	2.7	2.2	両極折り	円礫	6
4	火打ち石		X4014		碧玉	4.9	3.1	1.8		剥片	10
5	火打ち石		X0010	路面1層	チャート	5.9	5.6	3.1	剥離？両極折り	角礫	9
6	火打ち石	南1西2区	D2228		玉髄	4.2	3.1	1.5	両極折り	剥片	11
7	火打ち石	北1西3区	K0560	2層	石英岩	2.2	1.9	0.9	両極剥離	円礫	3
8	火打ち石	南1西2区	K1010	1層	玉髄	4.4	2.8	1.9	両極折り	亜角礫	18
9	火打ち石	南1西2区	K0079	1層	石英岩	4.6	4.5	3.5	両極剥離？	角礫	14
10	火打ち石	南1西2区	D200		玉髄	4.9	4	2.3	両極折り	亜角礫	2
11	火打ち石	北1西3区	K0560	1層	石英岩	7.2	3.2	2.2	両極剥離	円礫	16



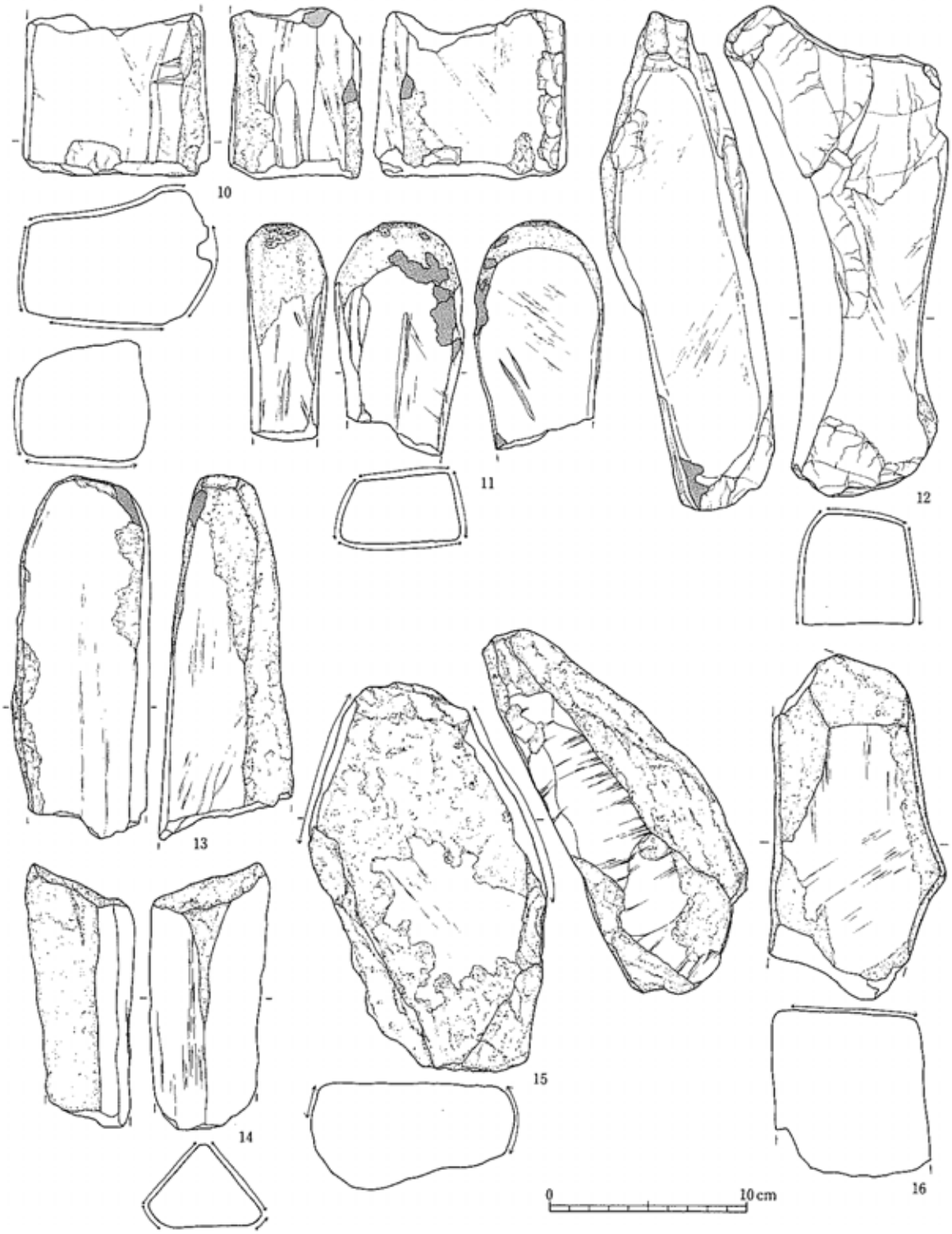
No.	器種	区	遺構	層位	石材	法量 長さ	法量 幅	法量 厚さ	備考	写真図版	登録番号
12	陽物未製品		X0010	東西大路路面3層上	砂石	14.4	5.3	4.4	完形、砥石の転用？		26
13	陽物	南1西2		I層	凝灰岩	(8)	3.5	3.1	基部？	85-26	24
14	陽物	南1西2		南端部遺構確認	砂岩	(9)	3.5	2.7	頭部（？）欠損	85-27	23
15	陽物	北1西3	E0502	1層	集塊岩	(8.7)	3.2	2.3	基部？、摩耗激しい		25
16	不明石製品	北1西3			凝灰岩	6.7	3.9	3.8	棒状一端を斜めにそぐ		29
17	不明石製品		X0030F	西2道路東側溝	凝灰岩	4.9	2.1	1.7	棒状先端偏平		28
18	不明石製品		X0020	西2道路西側溝北深掘	凝灰岩	5.3	3.5	1.4			31
19	不明石製品	北1西3	B0754	N4-E2 柱穴	凝灰岩	4.4	3	(2.2)	円筒状		30

第183図　石製品－火打石・陽物など－



No	区	遺構	層位	石材	粒度	形状サイズ	残存	大きさ 長	幅	厚	研磨面数	使用痕の特徴	素材	研磨以前の剥離面	写真図版	登録番号
1	北1西4	X4030		砂	A	板L	完	12.2	8.4	3.4	5	溝	角礫	有り、両極折り	87-7	271
2	南1西2	D1601B	1層	砂	A	板L	破	12.5	9	2.9	2	2平面に敲打、溝				4
3	北1西3	K0551	1・2層	砂	A	板S	完	5.5	4.6	1.4	7	焼けヒビ、溝				221
4	南1西2	D1111	1層	砂	A	板L	完	13.5	10.5	3.9	4	一側面には敲打痕が集中	角礫	整形剥離		275
5		X0010Z	黒色土層	砂	A	板M	破	6.1	4.9	3.1	4	敲打(側面、平面)				34
6		X1350F	窯1遺構	砂	A	板M	完	7.7	5.4	2.4	1		剥片	周辺折り取り？		269
7		X0020F	窯2遺構	砂	A	板L	完	13.5	6.6	2.9	2	破損後再使用か、溝(側)	剥片(節理)？			114
8	南1西2	D1020	深掘	安	A	板L	破	11.5	11.4	5.3	1		円礫			1
9		X0010Z	黒色土層	砂	A	角柱L	完	12.4	6.4	5.5	3	表面風化、削りの様な痕跡	角礫？			39

第184図　砥石（1）

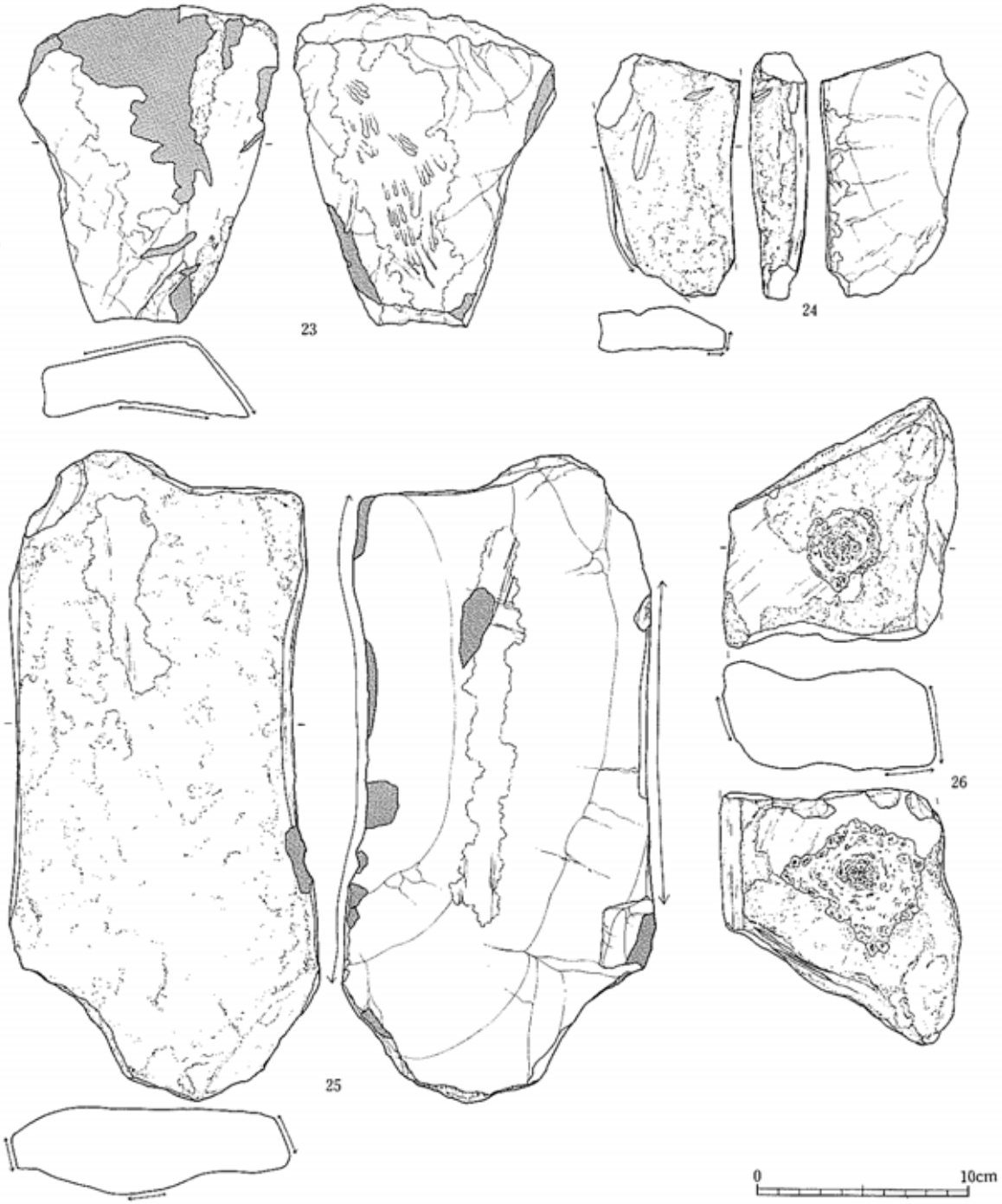


No	区	遺構	層位	石材	粒度	形状サイズ	残存	大きさ 長	大きさ 幅	大きさ 厚	研磨面数	使用痕の特徴	素材	研磨以前の剥離面	写真図版	登録番号
10	南2西1		3層	砂	A	角柱L	破	9.2	7.5	6.3	5	溝の断面は方形、溝(側)	角礫？			33
11	南1西2		1層t	砂	A	角柱L	破	11.5	6.7	4.3	4	端面に敲打、溝				13
12	北1西3	K0719	1層	砂	A	角柱L	完	26.2	9.8	7	3		角礫？	整形剥離	87-9	177
13		D2000	5層	砂	A	角柱L	破	18.4	6.4	6.1	2		角礫		87-8	178
14		X1250G.H	[illegible]	砂	A	角柱L	破	13.3	5.9	4.3	4	焼け	角礫？			35
15		X0010	[illegible]	砂	A	角柱L	完	20.7	10.5	7.2	3		角礫			166
16	北1西3	E0659	1層	砂	A	角柱L	破	17.2	8.5	7.7	1	焼け	角礫			148

第185図　砥石（2）

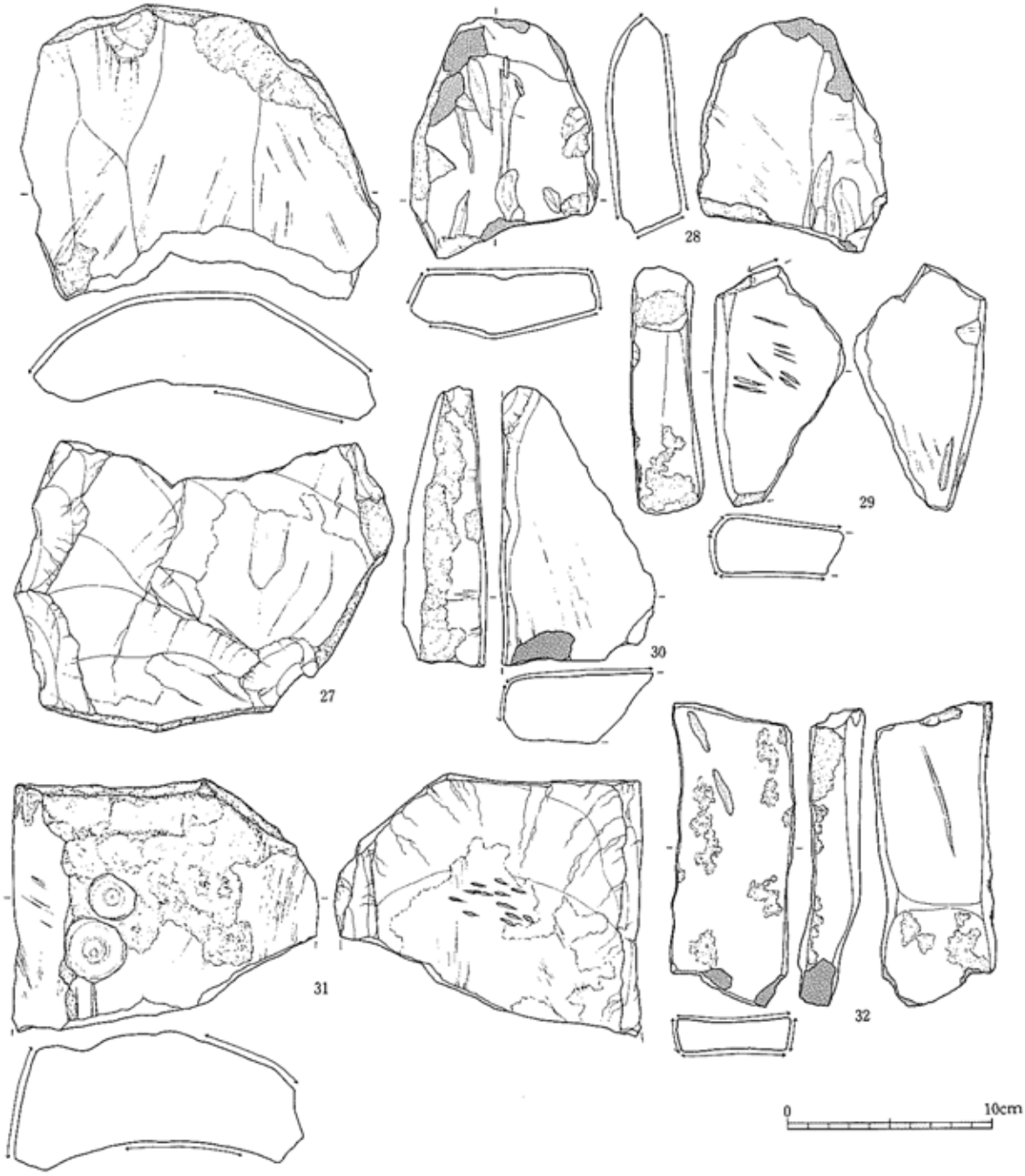
No.	区	遺構	層位	石材	粒度	形状サイズ	残存	大きさ 長	大きさ 幅	大きさ 厚	研磨面数	使用痕の特徴	素材	研磨以前の剥離面	写真図版	登録番号
17		X0010B	表層～第Ⅲ層	砂	B	板L	完	17.3	14.8	2.6	3	削りの様な痕跡、溝	剥片	周辺折り取り		184
18	南1西1	K2220		砂	B	板L	完	18.9	15.3	1.9	1	溝	剥片(節理)	有り		132
19	南1西2	D1033		砂	B	板L	破	12.7	7.8	2.8	4	溝	角礫	有り		263
20		D2000	2～4層	砂	B	板L	破	17.3	9.5	1.9	2	溝		有り		182
21	南3西1	D1602	1，2層	砂	B	板L	破	17.8	7.2	2.5	3		(両極)剥片	側辺折り取り		265
22		D2000	4層	砂	B	板L	完	15.1	9	3.8	5	側面の砥面は凹凸	角礫			273

第186図　砥石（3）



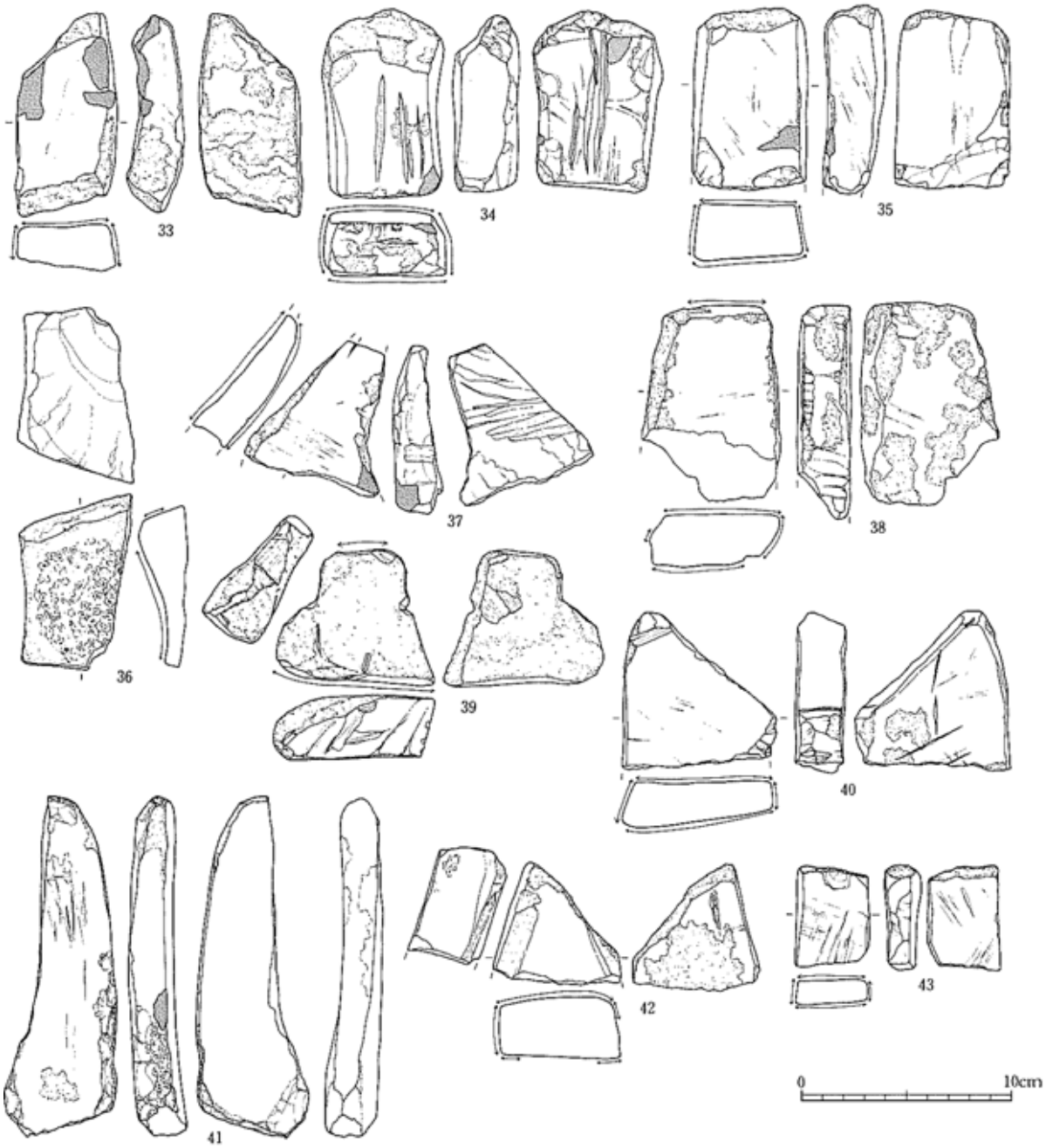
No.	区	遺構	層位	石材	粒度	形状サイズ	残存	大きさ 長	大きさ 幅	大きさ 厚	研磨面数	使用痕の特徴	素材	研磨以前の剥離面	写真図版	登録番号
23	南1西2	D3047		砂	B	板L	完	15.5	11.5	33.5	2	削りの様な痕跡	剥片	両極折り？		21
24	南1西2		1層	砂	B	板L	破	11.5	6.9	2.3	3	一平面は溝のみ、溝	剥片			43
25	南1西2	D3040C		砂	B	板L	完	31.5	14.7	4	4		剥片	両極折り取り	87-10	42
26		D2000	12層	砂	B	板L	破	15.5	10.6	5.6	2	敲打による凹み、溝(側)	角礫			175

第187図　砥石（4）



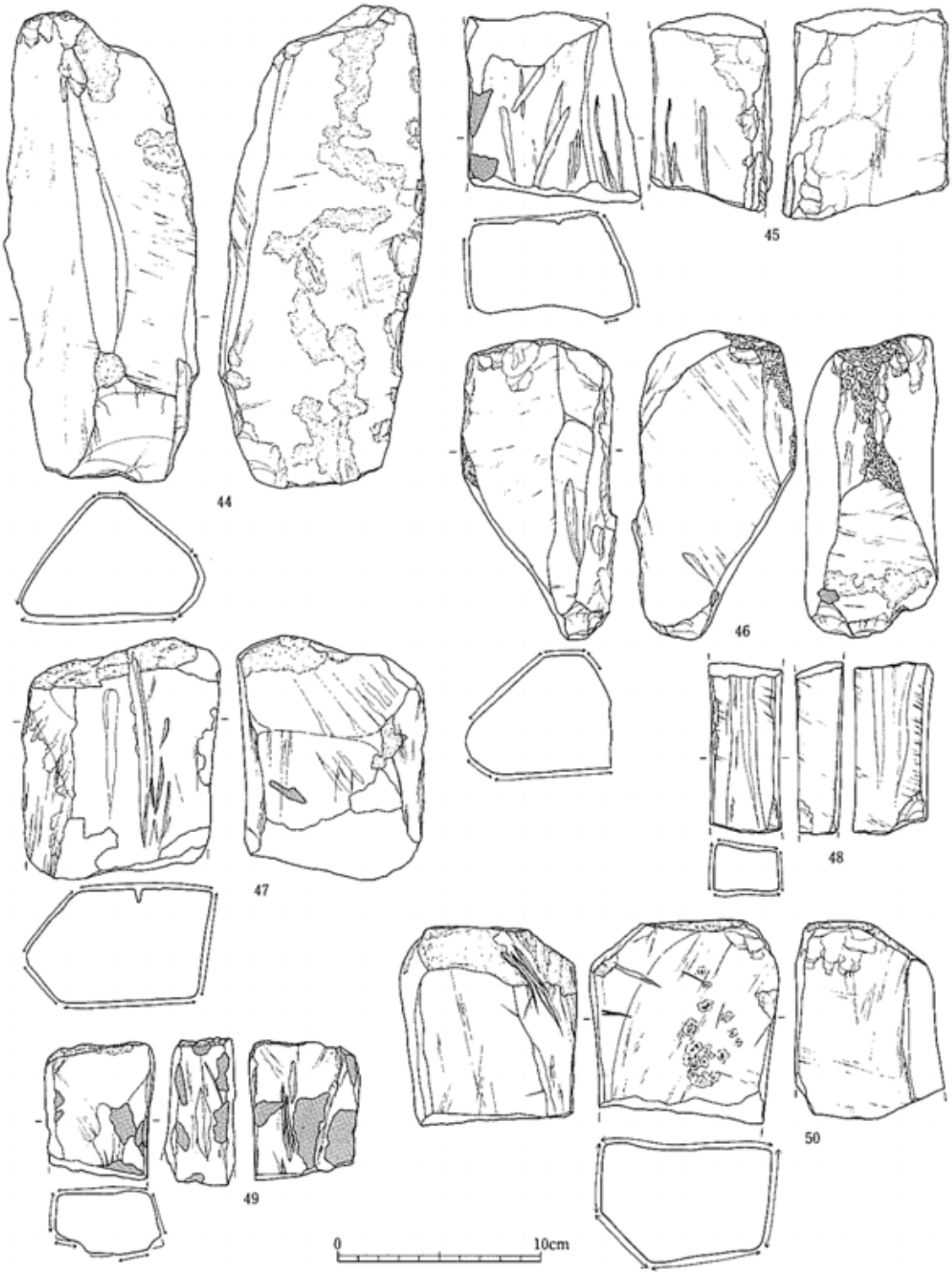
No.	区	遺構	層位	石材	粒度	形状サイズ	残存	大きさ 長	大きさ 幅	大きさ 厚	研磨面数	使用痕の特徴	素材	研磨以前の剥離面	写真図版	登録番号
27		X0020	黒色土層	砂	B	板L	破	18.1	14.4	4.6	2	削りの様な痕跡	剥片	周辺整形剥離		179
28	南2西1	D1601B	2層	砂	B	板L	完	11.7	9.2	3.2	5	溝		有り		24
29		X0010	黒色土層	砂	B	板L	破	12	6.5	3.2	4	溝				5
30		X0030D	黒色土層	砂	B	板L	破	13.7	7.5	3.5	2			有り		262
31	北1西4	D4004		砂	B	板L	破	14.5	12.1	5.4	3	穴は回転による、溝・穴	剥片			136
32	南1西2	E453-S399		砂	B	板L	完	15	5.8	2	4	溝	角礫？		87-11	276

第188図　砥石（5）



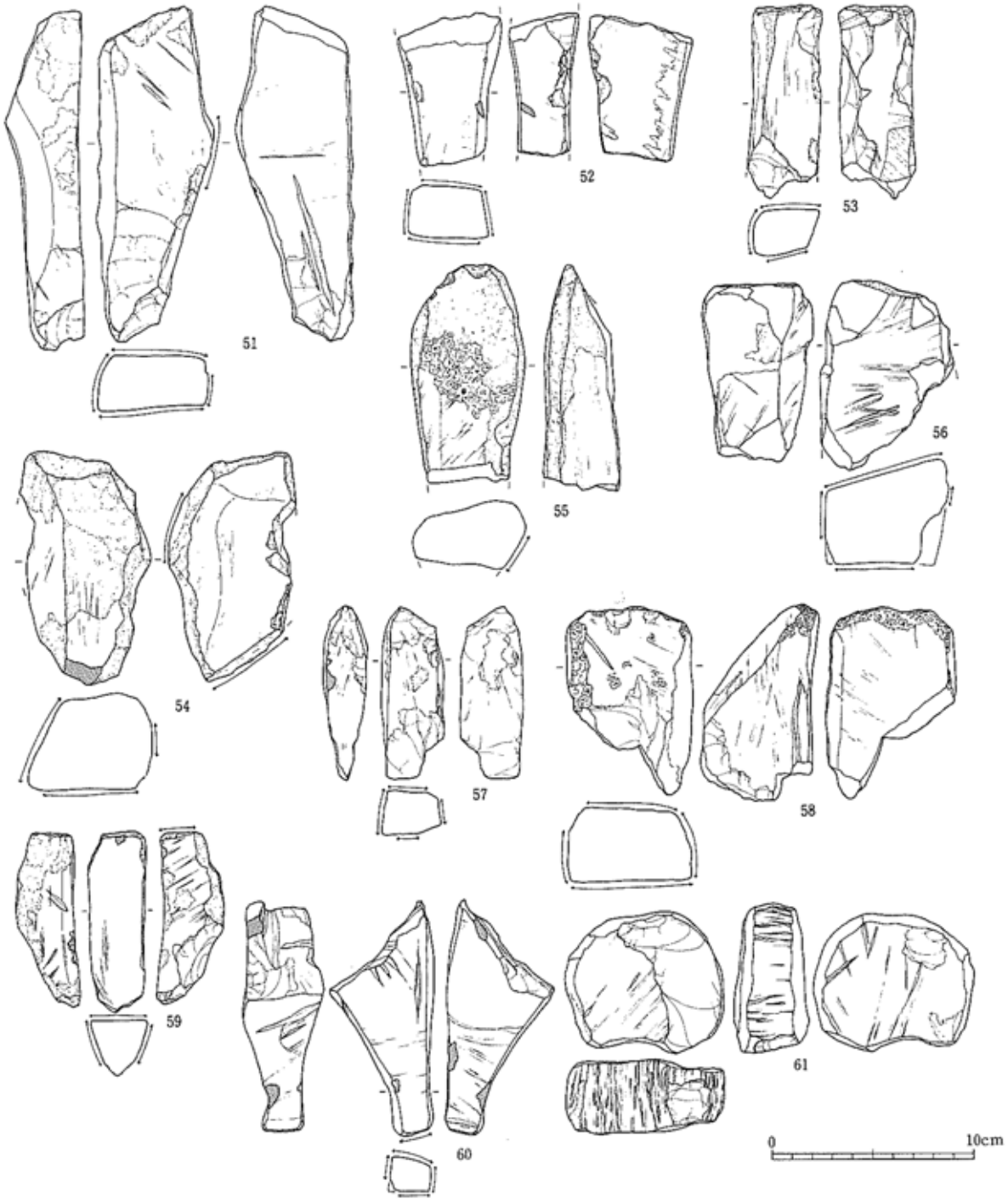
№	区	遺構	層位	石材	粒度	形状サイズ	残存	大きさ 長	大きさ 幅	大きさ 厚	研磨面数	使用痕の特徴	素材	研磨以前の剥離面	写真図版	登録番号
33		X190E.F	南2	砂	B	板M	完	9.6	4.7	2.3	4		剝片？	裏面は素材剥離面？		256
34	南1西2		2層	砂	B	板M	完	8.5	5.8	3	6	溝		有り		129
35	北1西3	B0588		砂	B	板M	破	8.7	5.3	2.7	4		剝片？	有り		144
36		X1250	南2遺構南側溝	砂	B	板M	破	8.4	5.1	2.4	1	平面は敲打痕、凹む	焼け割れ片？			119
37		X1900E.F	南2遺構北側溝	砂	B	板M	破	8	6.1	1.9	3	破損後再使用、削り	剝片(節理)			260
38		X4012	北1遺構南側溝	砂	B	板M	破	9.8	6.7	2.6	5	側縁の砥面は凹凸	角礫？			140
39	南1西2		1層	砂	B	板M	完	7.8	6.5	2.7	2	削りの様な痕跡、溝(側)	角礫			38
40		X0010	表面含層	砂	B	板M	破	7.6	7.3	2.1	4	側面の砥面は凹凸、溝				40
41		D2000	設置中央	砂？	B	板M	完	16.2	5.2	1.8	4	側面に敲打、破損後再使用	剝片(節理)？	整形剝離		171
42	南1西2		III層	砂	B	板M	破	7.2	4.9	3.1	4	削りの様な痕跡	角礫？			220
43		X0020F	南2遺構南側溝	砂	B	板S	完	5	3.5	1.7	5	破損後も再使用		有り		51

第189図　砥石（6）



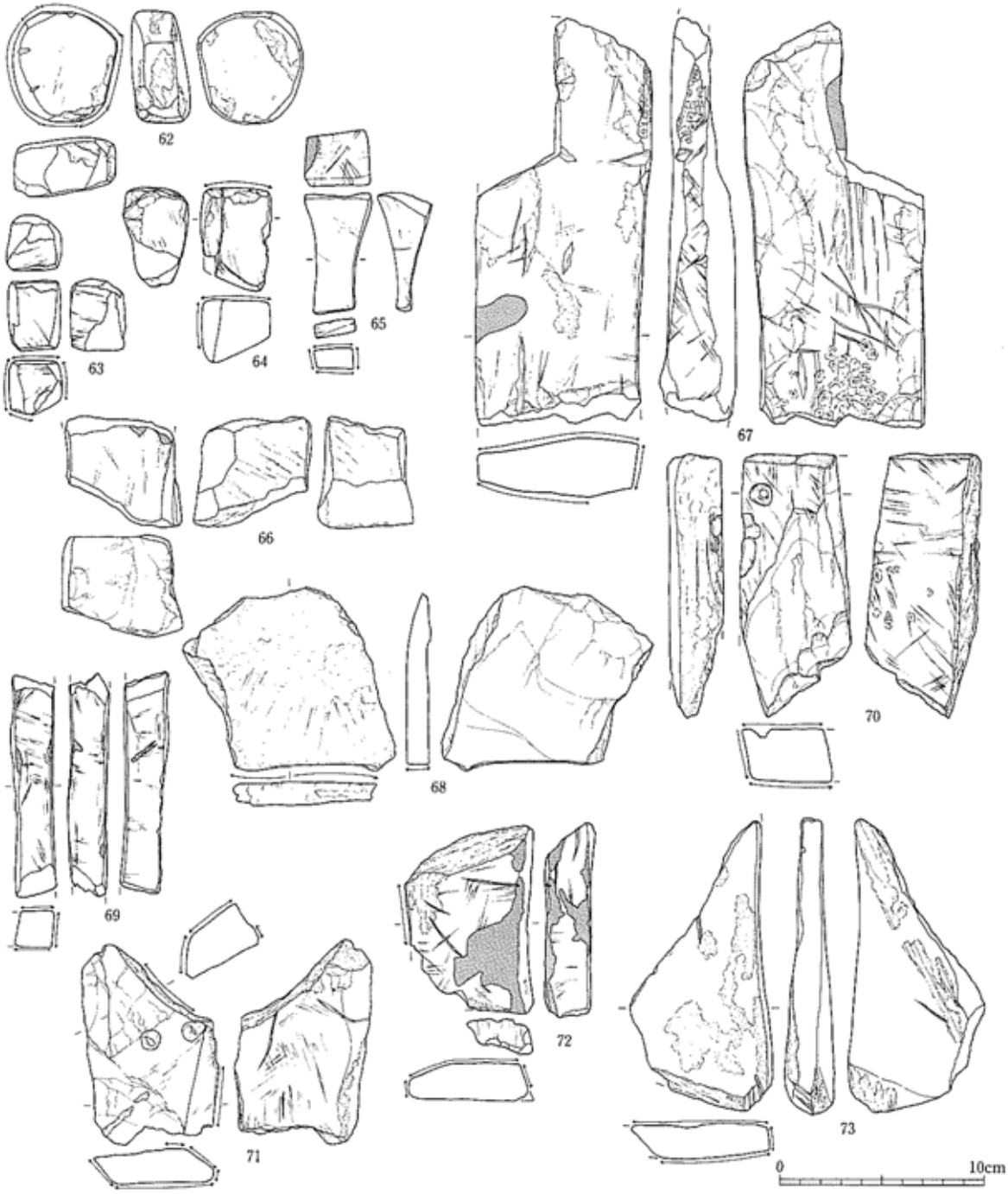
№	区	遺構	層位	石材	粒度	形状サイズ	残存	大きさ 長	大きさ 幅	大きさ 厚	研磨面数	使用痕の特徴	素材	研磨以前の剥離面	写真図版	登録番号
44		D2000	東壁崩落土	砂	B	角柱L	完	23.8	9.1	6.2	5		角礫	整形剥離		14
45		X0020C	裂石溝[illegible]	砂	B	角柱L	破	9.3	7.9	5.3	4	焼け割れの後も使用、溝				18
46		X0010	裏面空間	砂	B	角柱L	完	14.7	7.8	6.6	6	端部・側面に敲打痕		整形剥離		204
47	南1西2	D0052	1層	砂	B	角柱L	破	11.8	7.8	7.5	5	溝は断面V字形、焼け割れ		有り		128
48	南1西2	D2091		砂	B	角柱M	破	8.5	4.6	2.3	4			有り	87-14	254
49		X0010F	東側[illegible]	砂	B	角柱M	破	6.8	5.3	3.3	4	溝		有り		135
50	南1西2	D1020B	2層	?	B	角柱L	破	9.5	8.6	5.8	5	平面に敲打痕、溝		有り		279

第190図　砥石（7）



№	区	遺構	層位	石材	粒度	形状サイズ	残存	大きさ 長	幅	厚	研磨面数	使用痕の特徴	素材	研磨以前の剥離面	写真図版	登録番号
51		D2000	4層	砂	B	角柱L	完	17.3	5.6	3.6	4	側面の砥面は凹凸、溝	剥片(節理)	有り、折り取り		202
52		X1300	第1遺構	砂	B	角柱M	破	6.8	5.1	3.4	4		剥片			287
53		X1900E.F	第2遺構	砂	B	角柱M	破	9.7	3.6	2.7	4	削りの様な痕跡		有り		249
54		D2000	6層	砂	B	角柱M	破	11.7	6.5	4.8	5	表面風化、溝	角礫？			188
55	北1西3	P0844		砂	B	角柱M	破	11.4	5.2	3.9	2	平面に敲打、折面は両極	礫			160
56		X0020	森2遺構	凝	B	角柱M	破	9.4	6.9	4.6	4	焼けはじけ				172
57		D3608		?	B	角柱S	完	8.6	3.1	2.2	4	両極割れ後も再使用		有り		58
58	南1西2	K3024		砂	B	角柱M	破	9.2	6.2	5.7	4	縁辺周辺に敲打、溝		有り		25
59	南2西1	D1602		砂	B	角柱S	完	8.7	2.8	2.8	4		角礫？			72
60	南1西2	E468.S411		砂	B	角錐M	完	11.3	5.4	4.4	6	破損後も再使用、溝			87-12	46
61	北1西3	D0553	1層	砂	B	多面M	破	7.8	6.5	3.4	8	側面に溝築中、剥離は最終		有り		228

第191図　砥石（8）

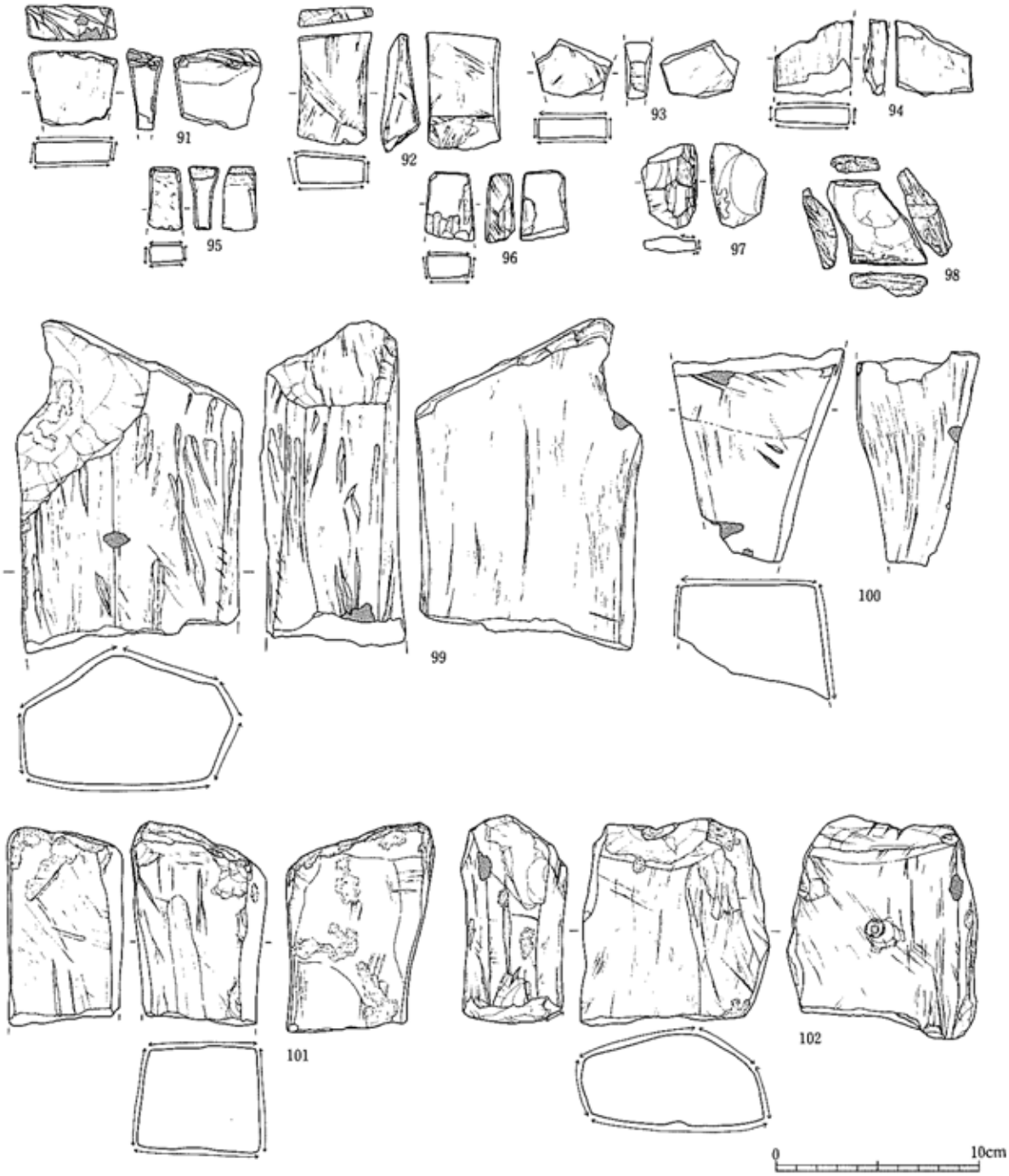


No	区	遺構	層位	石材	粒度	形状サイズ	残存	大きさ 長	大きさ 幅	大きさ 厚	研磨面数	使用痕の特徴	素材	研磨以前の剥離面	写真図版	登録番号
62	南2西1		遺構確認	砂	B	多面M	完	5.6	4.7	2.5	6	溝	剥片？	整形剥離？		9
63		X0010C	[illegible]	凝	B	多面S	完	3.3	2.7	2.5	6	表面剥落				103
64		X0010	[illegible]	？	B	多面S	破	5	3.9	3	4		角礫？	有り		138
65		D2000	10層	砂	B	角錐S	完	5.9	3.2	2.8	6	溝				122
66	南1西2	P0107	E451-S433	砂	B	多面M	破	5.3	4.7	4.6	5	焼けはじけ、後使用				8
67	南1西2	D1111	1層	粘	C	板L	破	20	8.1	3.3	3	凹凸の有る砥面、溝	剥片(節理)？	整形剥離	87-15	36
68		D2000	[illegible]	粘	C	板L	完	10.2	8.3	1.1	1	平面には擦痕あり	剥片	周辺折り取り		81
69	北1西3	X0856		粘	C	板M	破	10.9	2.3	1.9	3					347
70	北1西3	E0660	4層	粘	C	板L	破	12.9	5	2.5	3	穴		整形剥離？		151
71		X4013	[illegible]	粘	C	板L	完	9.9	6.8	2.2	6	削りのような痕跡	剥片？	整形剥離		79
72	北1西3	K0530	1層	粘	C	板M	破	9.3	6.3	2.1	3	端面は擦痕のみ、溝				215
73	南1西2	B1176	[illegible]	粘？	C	板L	破	14.4	6.5	1.6	3	溝(側)	剥片(節理)？			278

第192図　砥石（9）

№	区	遺構	層位	石材	粒度	形状サイズ	残存	大きさ 長	大きさ 幅	大きさ 厚	研磨面数	使用痕の特徴	素材	研磨以前の剥離面	写真図版	登録番号
74		X4034	落込遺構南部溝	粘	C	板M	破	8	7.2	1.2	1	削りの様な痕跡、溝	剥片	整形剥離		252
75	北1西3	K0541	5層	粘	C	板S	破	6.6	4	0.9	4				87-13	2
76		X4034	落込遺構南部溝	砂	C	板S	完	5	4.7	2	1	溝(側)	礫	整形剥離(両極)		248
77	北1西3	E0660	1層	?	C	板S	破	4.7	3.4	0.8	3					365
78	南1西2	K1202	攪乱	砂	C	板M	完	13.2	5.5	1.9	4	溝(端)				30
79		X0010	黒色土層	砂	C	板S	破	3.7	3.1	1.6	4	表面傷み、溝(側)				94
80		X0020B	落込遺構東部溝	粘	C	板S	破	8.5	2.5	1.3	4	一平面は全体が凹状	礫			229
81		X1300C	落込遺構北部溝	砂	C	角柱M	破	9.8	4.1	2.5	4	溝	角礫?			52
82		X0010B	黒色土層北部溝	集?	C	角柱L	破	10.9	7.3	5	3	焼けはじけ				29
83	南1西2	D1020	遺構確認	砂	C	角錐M	破	6.8	4.1	2.6	6	破損後も再使用		有り		56
84	南1西2	D1020	遺構確認	砂	C	角錐M	破	7.1	3.9	3.2	4	溝・穴				55
85	北1西3	K0849		砂	C	多面S	完	3.4	2.9	2.5	5	両極割れ後も再使用、溝				6
86	北1西3	D0827		砂	C	角錐S	完	5.9	3.7	1.8	4	破片の再使用				96
87	北1西3	K0776	1層	凝	D	板M	完	11.7	4.1	2.9	4	削りの様な痕跡、溝(側)			87-17	150
88	南1西2	D1020B	2層	凝	D	板M	破	7.4	3.5	2	5	溝(側)				284
89	南1西2		E468-S423付近遺構	凝	D	板M	完	12.4	4.5	2.6	4	両極折り後再使用、溝(側)		有り	87-16	134
90	北1西3	X0856		凝	D	板M	破	8.3	5	2.1	4	削りのような痕跡		有り		80

第193図　砥石（10）



№	区	遺構	層位	石材	程度	形状サイズ	残存	大きさ 長	幅	厚	研磨面数	使用痕の特徴	素材	研磨以前の剥離面	写真図版	登録番号
91	南1西1	K2220	2層	凝	D	板S	破	4.3	4	1.7	5	溝は深く断面V字形				257
92	南1西2	B1430	[illegible]	凝	D	板S	完	5.8	3.5	1.7	6	溝(側)				112
93		X0010	[illegible]	凝	D	板S	破	3.5	2.6	1.3	4					363
94		X0030F	[illegible]	凝	D	板S	破	3.8	3.9	0.9	4					223
95		X0010E	[illegible]	凝	D	板S	破	3.1	1.7	1.5	4					246
96		X0010	[illegible]	凝	D	板S	破	3.3	2.4	1.3	4	削りの様な痕跡、表面傷み				237
97	北1西3	B0860	遺構確認	凝	D	板S	完	4.2	2.9	1	3	破片再利用、	剥片			333
98	南1西2	K1008	1層	凝	D	板S	完	5.9	3.6	1.6	4	削りの様な痕跡、溝	焼け割れ片			125
99	南1西2	K3023	3層	凝	D	角柱L	完	16.4	10.8	6.8	7	削り、破損後も再使用、溝				41
100	南1西2	D1020A	1層	凝	D	角柱L	破	10.5	7.8	6.3	3	焼けはじけ				37
101	南2西1	A1609	1層	凝	D	角柱L	破	9.7	6.5	5.2	5	削りの様な痕跡、溝		有り		272
102		X0010	[illegible]	凝	D	角柱L	完	9.9	9.2	5.1	6	折れの後も再使用、溝・穴		整形剥離		212

第194図　砥石（11）

№	区	遺構	層位	石材	粒度	形状サイズ	残存	大きさ 長	大きさ 幅	大きさ 厚	研磨面数	使用痕の特徴	素材	研磨以前の剥離面	写真図版	登録番号
103	南1西2		[illegible]	凝	D	角柱M	完	7.9	3.7	3.4	6	削り、擦切以前も研磨？		擦り切り、両極折り		274
104	北1西4	D4005		凝	D	角柱M	破	8.3	4.8	2.8	3	溝				149
105		D2000	12層	凝	D	角柱S	破	4.2	2.6	2.4	5	角に径4 mmの紐孔、溝			87-18	197
106	南1西2	B2010		凝	D	角柱S	破	2.8	2.3	2.2	4	溝(側)				259
107	南1西2	D1111	1層	凝	D	角柱S	完	6.9	2.9	2.4	5	破損後も再使用			87-20	70
108		X0010	[illegible]	凝	D	角柱S	破	4.1	3	2.7	5	径4 mmの紐孔、焼けはじけ				141
109		D2000	5層	凝	D	角柱S	破	6.1	4	2.2	4	焼けはじけ、傷み				126
110		X1250	[illegible]	凝	D	角柱S	破	5.8	2.3	2.2	5	糸かけの抉り、削り、溝				71
111	北1西3		基本層	凝	D	多面S	完	3.7	3.6	1.7	6	3 mmの紐孔、破損後再使用				10
112		X4013	[illegible]	凝	D	角錐M	完	7.3	4.7	2.4	6	削り、破損後も再使用、溝		有り		59
113	南1西2		1層	凝	D	角錐S	完	5.4	3.3	2.8	5	溝の断面は半円形、溝			87-19	63
114	南2西1		3層	凝	D	角錐S	完	5.7	3.2	2	5	折れ面も使用、溝				50
115	北1西3		1層	凝	D	角錐S	完	5.5	3.4	3.3	5	「大」脇剥、両極割れ後使用		有り		77
116		X4012	[illegible]	凝	D	角錐S	完	5.5	4.6	2	5			擦り切り痕？		377
117	南2西1		遺構確認	凝	D	角錐S	破	5.5	4.3	2	5	焼け				54
118		X0020F	[illegible]	凝	D	角錐S	完	4.7	4.4	2.2	4	溝(端)				57
119	南2西1	B3449	[illegible]	凝	D	角錐S	破	4.3	4	1.9	4	溝				60
120		X0010Z	[illegible]	凝	D	角錐S	破	4	2.6	1.7	5	削りの様な痕跡				75
121	南1西2	K0005	遺構確認	凝	D	角錐S	破	4.4	3.5	3.4	5	溝(側)				195
122	南3西1	D1620	[illegible]	凝	D	角錐S	破	6.5	3.7	2.4	5	破損品の再利用、溝			87-21	106

第195図　砥石（12）

区	遺構	時期・層位	石帯	管玉	琥珀	雲母片	陽物	円板	紡錘車	石錘	火打ち石	砥石	滑石製品	不明品	小計
	東西大路						1					6			7
		B										2			2
		C							1			4			5
		D										5			5
		E										5			5
		F						1			1	13			15
		G										9			9
		GHI									1	3			4
		H										2			2
		HI									1				1
		I									1	5			6
	西2道路											1	1	1	3
		E										2			2
		F										4		1	5
		FG										2			2
		G										6			6
		GHI									1				1
		H										1			1
		I										9			9
	北1道路											9			9
	南1道路											12			12
	南2道路											8			8
	西1道路								1	1		16			18
	西3道路		1								1	2			4
北1西3		遺構外							2		4	35	1	1	43
	SB585											1			1
	SB588											2			2
	SB750	N4E5 柱穴										1			1
	SB751	S1W2 柱穴			1										1
	SB754	N4E2 柱穴												1	1
	SB860											1			1
	SE502	1層					1					2			3
	SE659	1層										1			1
	SE660	1層										2			2
		2層										1			1
		0										1			1
	SI552	1層											1		1
	SI579						1								1
	SI560										2	1			3
	SK530	1層										1			1
	SK541	5層										1			1
	SK551	1・2層										2			2
	SK568											2			2
	SK662										1				1
	SK718	1層										3			3
	SK719	1層										1			1
	SK776	1層										1			1
	SK820											1			1
	SK841											1			1
	SK849											1			1
	SK850				1										1
	SK893											1			1
	SA831	1層				1						2			3
	SA972											1			1
	SD553	1層										2			2
	SD559											1			1
	SD827											1			1
	SD846A		1									1			2
	SD885											1			1
	P844											1			1
	P989											1			1
	SX856											3			3
北1西4		遺構外										3			3
	SF1001											1			1
	SF4002											2			2
	SD4004											1			1
	SD4005											1			1
	SX4009											1			1
	SX4030											1			1
	SX4040											1			1
計			2	0	2	1	3	1	4	1	13	214	3	4	248

第46表　遺構別石製品組成(1)

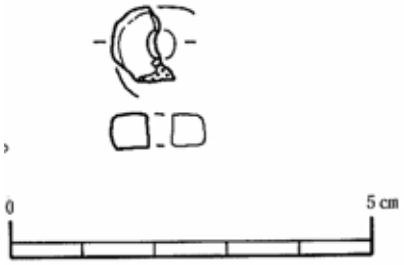
区	遺構	時期・層位	石帯	管玉	琥珀	雲母片	陽物	円板	紡錘車	石鏃	火打ち石	砥石	滑石製品	不明品	小計
南1西2		遺構外	1	1			2		1		2	52			59
	SB18	N2W1 柱穴										1			1
	SB1176	N4E1 柱穴										1			1
	SB1245	N2E1 柱穴										1			1
	SB1430	N4E2 柱穴										1			1
	SB2010											1			1
	SB2023	N1W1 柱穴			1										1
	P6											1			1
	P14													1	1
	P107											1			1
	P214											1			1
	SE3026	掘方埋土										1			1
	SK5											1			1
	SK79										1				1
	SK1008	1層										1			1
	SK1010										1				1
	SK1202											1			1
	SK1218								1						1
	SK1423	1層										1			1
	SK2066	1層										1			1
	SK3002											1			1
	SK3003											1			1
	SK3023	3層										1			1
	SK3024											1			1
	SK3027	1層										1			1
	SD52	1層										1			1
	SD101											1			1
	SD200										1				1
	SD1020	A										3			3
		B									1	3			4
												4			4
	SD1033											1			1
	SD1111	1層									1	7			8
	SD1201	1層										1			1
	SD1215	1層										1			1
	SD1260											1			1
	SD1601	B										1			1
	SD2091											1			1
	SD2093	1層										1			1
	SD2253											1			1
	SD3012	1層										1			1
	SD3040	C										1			1
	SD3047											1			1
南1西1	SD2228										1				1
	SK2220											3			3
南1西3		遺構外										2			2
	SK410											1			1
南2西1		遺構外									2	6		1	9
	SB3449	N3E1 柱穴										1			1
	SI3435											1			1
	SA1609	1層										1			1
	SE1606	1層										1			1
	SE3207											1			1
	SK3205											2			2
	SK3452											1			1
	SD1601	A										1			1
		B	1									2			3
												2			2
	SD1602											1			1
南3西1		遺構外										3			3
	SD1602	1・2層										1			1
	SD1620	3層										1			1
	SD3608											1			1
	SD2000		1								1	1	1		4
		2層										2			2
		3層										1			1
		3～8層										1			1
		4～6層										1			1
		4～12層										1			1
		5～8層										2			2
		5～10層										1			1
		7～12層										1			1
		9層										1			1
		10層										5			5
		11層										2			2
		12層										4			4
計			3	1	1	0	2	0	2	0	11	156	1	2	179
		合計	5	1	3	1	5	1	6	1	24	370	4	6	427

第47表　遺構別石製品組成(2)

9　ガラス製品

（1）ガラス小玉（第196図）

北1西3区の土壙ＳＫ567より1点出土した。半分近くを欠く。色は薄い青色である。推定径は1.4㎝である。



第196図　ガラス玉

10　骨角製品

骨角製品には骨鏃、刺突具、円盤状角製品、把、把手、卜骨などがあり、用途不明のものを含め、16点出土している。これらはおもに河川跡や道路側溝、井戸跡、土壙などから出土しており、このほかにも鹿角や獣骨の切断片や二次加工品、素材取りされた後の残片などがある。年代的には概ね8世紀後半代～10世紀中頃に位置付けられる。これらの骨角製品の製作にあたっては金属器が使用されており、切断および大まかな素材取りには鋸や鉈状の工具、整形や細部の加工および仕上げには鑿や刀子状の工具によるとみられる痕跡が明瞭に認められる。

①骨鏃（第197図1）

ニホンジカの中手あるいは中足骨を縦に四分割した細長い素材を利用し、体部に左右対称の切り込みを入れることによって関を作り出したもので、裏側には髄腔壁が溝状に残る。保存状況が悪く鏃身の形態は明らかではないが、茎部に対して長い鏃身をもつ長頸型の骨鏃である。このタイプの骨鏃は、古墳時代中期に出現し古代にかけて、素材や形態など画一的につくられたとみられるもので、とくに古墳時代後期には副葬品を中心として地域を問わず数多くの出土例が認められる。本遺跡周辺でも、八幡地区の遺物包含層および河川跡から古墳時代中期のものが1点、後期のものが約70点出土している(菅原・吾妻：1994)。同様のものは多賀城跡作貫地区(多賀城跡第 38 次調査、高野・佐藤：1982)で9世紀後半以降のものが、また鳴瀬町江の浜貝塚でも平安時代のものが出土しており(加藤他:1989)、9 世紀初頭頃に位置付けられる本例を含め、長頸型の骨鏃が少なくとも平安時代まで存在したことが明らかになっている。なお、管見によれば、神奈川県鎌倉市由比ヶ浜遺跡の土壙墓出土のものが今のところ最も新しく、11世紀末～12世紀末頃に位置付けられている（宗臺：1995）。

②刺突具（第197図2）

鹿角を利用し、先端部を尖らせ、末端部を平滑に調整したものである。丁寧に調整が施され、完形品とみられるが、使用による摩耗痕および付着物や何かに装着した痕跡は認められず、刺突具以外の用途に使われた可能性もある。

③円盤状角製品（第197図4・5）

鹿角幹基部の幅広い部分を素材とし、研磨し薄い円盤状に加工を施したものである。4 は自然面が残らないほど丁寧に仕上げ、中央部には径5㎜程の孔を穿っている。5は素材や大きさ、二次加工の状況から、未製品とみられる。この種の骨角製品の類例としては、県内では鳴瀬町江の浜貝塚出土の平安時代のものが2点（加藤他：1989）あるのみであるが、全国的には弥生時代：群馬県新保田中村遺跡・愛知県朝日遺跡・大阪府亀井遺跡、古代：神奈川県由比ヶ浜遺跡・福岡県海の中道遺跡、近世：東京都三栄町遺跡などに出土例がみられる（宮腰：1992、中西他：1982、金子：1991、岡村：1996）。

弥生時代以降少なくとも近世に至るまで地域を問わず出土しており、大きさや形態などに大きな違いは認められない。用途としては形態的な特徴から紡錘車の可能性が高いものとみられるが、きわめて軽量であり、実際に紡錘車として機能し得るものか疑問が残る。

④把（第197図3）

金属製工具の把とみられる角製品である。焼けはじけによる破損が著しく不明な点が多いが、鹿角の枝の部分を素材としたもので、把頭部に向かってやや湾曲している。表面には自然面が残る。全長は8㎝程と推定され、柄穴の内径は1辺が約1㎝の方形を呈する。挿入される工具については推測の域を脱し得ないが、柄穴の形状からみて鑢や鑿などのような断面が角状を呈する工具が想定される。

⑤把手（第197図7）

鹿角幹を面取りして角柱状に仕上げたもので、やや湾曲した内側の自然面を残した面に2ヶ所の孔を穿っている。何の把手となるかは特定できないが、大きさや孔の位置などから工具等の握り部とみられる。

⑥卜骨（第198図12～15）

ＳＤ2000河川跡から5点出土した。すべて肋骨を素材とし、半截・整治した内側の海綿質部分に長方形の鑽を連続して彫り、その底面に焼灼を加えたものである。13はウマあるいはウシの肋骨を素材としたもので、上端を欠損している。卜骨の両側辺には刀子状の工具で削って面取りした痕跡が残っており、肋骨の半截は側辺に平坦な面を作出した上で楔などを用いて行ったものと思われる。鑽は海綿質部分を削って薄く平らに整治した面に幅狭の鑿状の工具を用いて彫り込んだもので、7×4㎜前後の横位長方形を呈し、2列18ヶ所で残存している。焼灼はこのうち16ヶ所の鑽底面に認められ、形状は径2～3㎜の円形もしくは楕円形を呈し、骨体が茶褐色に変色している。灼痕は反対側の面（卜面）までおよんでおり、中には焼け抜けている箇所も認められる。焼灼の認められなかった2ヶ所の鑽については、海綿質部分を彫り窪めているものの浅く粗雑であり、掘鑿途中のものとみられる。

このほかの卜骨については破損が著しく、また焼灼もほとんどものが円形もしくは楕円形に焼け抜けており不明な点が多いが、整形および焼灼方法は同様と思われる。素材は12・15がウマあるいはウシの肋骨で、14がニホンジカの肋骨を利用したものである。

ところで、県内においては、これまでに多賀城周辺や松島湾沿岸の5遺跡で古墳時代中期から奈良・平安時代にいたる卜骨の出土例が知られている。古墳時代の卜骨は、本遺跡八幡地区で中期のものが17点(ニホンジカ肩甲骨、佐藤・菅原：1994)と後期のものが約100点(ニホンジカ肩甲骨・肋骨、未報告資料)、奈良・平安時代の卜骨は、本遺跡以外に塩竈市表宇杉ノ入貝塚（ウマあるいはウシ肋骨？、伊東：1981）と七ヶ浜町東宮鳳寿寺貝塚（ウマあるいはウシ肋骨？、後藤1981）で奈良時代末～平安時代初期のものが各1点、多賀城跡「鴻ノ池」地区で平安時代（9世紀後半頃）のものが4点（ウマあるいはウシ肋骨、富岡：1992）出土している。これらの卜占方法についてみてみると、本例をはじめ古墳時代後期以降のものは、いずれも片面に横位長方形の鑽を 1～数列縦に連続して彫り、その底面に焼灼を加えるといった手法を採っているのに対して、古墳時代中期のものは肩甲骨の内外両面に粗雑な楕円形状の鑽と「＋」「－」の刻みを入れて、それぞれに異なる焼灼を加えるといった方法で卜

占を行っている。卜骨の素材については、古墳時代中期にはニホンジカの肩甲骨のみが素材として利用されているが、後期にはニホンジカの肋骨がこれに加わり、奈良・平安時代にはウマあるいはウシの肋骨がおもに利用されており、時期によって卜占に利用する動物や部位に違いが認められる。こうした狩猟獣から家畜獣へ、肩甲骨から肋骨へといった素材の時期的変化は、素材の入手し易さと一個体あたり得られる卜占用材の量を反映したものとみられ、古墳時代後期以降に卜占の目的や主催者および執行者、卜占の頻度が高まるなどの変化が生じた可能性も考えられる。

⑦その他用途不明の骨角製品（第197図6・8、第198図9〜11）

6 は、鹿角分岐部をそのまま利用したもので、角幹と枝先をほぼ同じ長さで切断して「Y」字状にし、基部側を丁寧に七角形に面取り加工している。分岐部には浅い孔を穿っている。

8 は、鹿角幹および分岐部の形態をそのまま利用し、面取り加工したものである。分岐した枝先の一端を嘴状に加工し、もう一端を平滑に整え孔を穿っている。刀子状の工具による粗い調整痕を顕著に残し、使用の痕跡は認められないことから未製品と思われる。用途としては把手の可能性も考えられる。

9・10 は、鹿角幹切断し、髄質部分に貫通孔を穿った弭状の角製品である。9 は破損により全形は明らかではないが、付着物および使用による痕跡は認められない。直接機能に関わらない付属的な用途が考えられる。10 は孔を穿っているが、整形段階の未製品とみられる。

11 は、ウシの左中手骨を素材とし、近位端の栄養孔を利用して前後から貫通孔を穿ったものである。保存状況が悪く、全体の形態や調整および使用痕跡などについては不明であるが、素材や穿孔の位置などからみて浮子の可能性も考えられる。

⑧加工痕のある鹿角

出土した鹿角のほとんどのものに、二次加工の痕跡が認められた。落角も多くみられ、同様に素材取りされたもの（写真図版88－19〜23）や板状に加工されたもの、加工の際に生じた破片および残片などが出土している。

⑨切断痕のある獣骨（第198図16・17）

16 はウシの右中手骨から「U」字形の骨材を採取したとみられる残片で、遠位部分を残す。骨材は環状を呈する骨に、鋸などの工具を用いて骨体の前面から7〜9㎜幅の切り込みを入れ、縦方向から連続的に叩いて割り取ったものと考えられる。かなり規格性をもった骨材が量産できたものと思われるが、骨材はもとより製品は出土しておらず、何に加工されたがは明らかではない。17 は切断されたウシの右橈尺骨の近位端で、16 と同様に骨材が採取された後の残片の可能性が考えられる。こうした採取後の残片は中世鎌倉の由比ヶ浜遺跡（室臺：1994、斉木：1994）や近世の葛西城跡（金子：1994）などからも出土している。とくに、由比ヶ浜遺跡では「U」字形骨材採取の原材となったウシおよびウマの中手・中足骨や橈骨、脛骨などの長骨が多量に出土している（室臺：1994）。

以上、骨角製品の概要について述べてきたが、量的に少なく、各区画ごとの出土状況をみても、河川跡と道路側溝に集中し、区画や区画内の特定の場所（遺構）に偏って出土するような傾向も認められなかった。しかも用途不明の骨角製品が多いことなど、当時の骨角利用のあり方を知るには部分的

な資料と言わざるを得ない。ただし、これは後述する動植物遺体と同様で、遺物の性質上、通常の状態では残存しにくいことが大きく影響していることも考えられ、未製品や落角および加工痕のある鹿角、切断痕のある獣骨の存在などからみて、実際にはこの周辺で盛んに骨角製品の製作が行われていた可能性が考えられる。とくに、「U」字形骨材採取にみられた規格的な素材を量産するような加工法は、中世における事業的な骨角細工職人に共通するものであり、骨角製品の製作に関わる工人の存在も想定される。

ところで、今回出土した骨角製品は骨鏃や刺突具などのように機能的な部分に骨角素材が用いたものもみられるが、把や把手など機能とは直接関わらない部分に骨角を利用しているものが目立つ。用途不明の骨角製品についても、単独で機能を果たすものではなく、他の素材の道具と組み合わせることによって使用された可能性が高い。骨角素材のもつ形態や加工のしやすさ、強度、あるいは素材感などで選択されたのであろうか。こうした機能的な道具から付属・装飾的な道具への骨角利用の変化は、金属器導入後にみられる特徴であり、該期における骨角利用のあり方の一端を示しているものと思われる。なお、中世においては、こうした傾向がさらに強く、装身・服飾具や刀装具、遊戯具などのごく限られた用途にのみ利用されるようになっており、由比ヶ浜遺跡や広島県草戸千軒町遺跡といった中世の首都や商都ではこうした骨角細工を専業とする職人が存在したことが明らかになっている。古代地方都市多賀城の一角に位置する本遺跡のあり方は、その初源的な様相と示しているものと思われる。

〈引用・参考文献〉

伊東信雄編　1981「考古資料編」『宮城県史』34

岡村道雄　1996「貝塚と骨角器」『日本の美術』No.356

加藤道男他　1989「仙台湾周辺の貝塚群」『東北歴史資料館研究紀要』第15巻　東北歴史資料館

金子浩昌　1988「主要骨角製品についての考察」「五松山洞窟遺跡」『石巻市文化財調査報告書』第3集　石巻市教育委員会

金子浩昌　1991『三栄町遺跡－骨角貝製品・動物遺存体編－』東京都新宿区教育委員会

金子浩昌　1994「葛西城跡出土の動物遺体の研究」『葛西城XⅧ』葛飾区遺跡調査会

神澤勇一　1976「弥生時代古墳時代および奈良時代の卜骨・卜甲について」『駿台史学』38

神澤勇一　1987「日本の卜骨」『考古学ジャーナル』No281ニューサイエンス社

後藤勝彦　1981「宮城野七ヶ浜町東宮浜鳳寿寺貝塚発見の卜骨について」『東北歴史資料館研究紀要』第7巻　東北歴史資料館

斉木秀雄　1994『由比ケ浜4‐6‐9地点発掘調査報告書』由比ケ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団

高野芳宏・佐藤則之　1982「多賀城跡第38次調査」『多賀城跡―宮城県多賀城跡調査研究所年報』1981　宮城県多賀城跡調査研究所

富岡直人　1992「多賀城跡第60・61次調査出土の卜骨・骨角器と脊椎動物遺体」『多賀城跡－宮城県多賀城跡調査研究所年報』1991　宮城県多賀城跡調査研究所

中西靖人・宮崎泰史・西村尋文　1982『亀井遺跡』大阪文化財センター

宮腰健司　1992「朝日遺跡Ⅲ」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書』第32集　愛知県埋蔵文化財センター

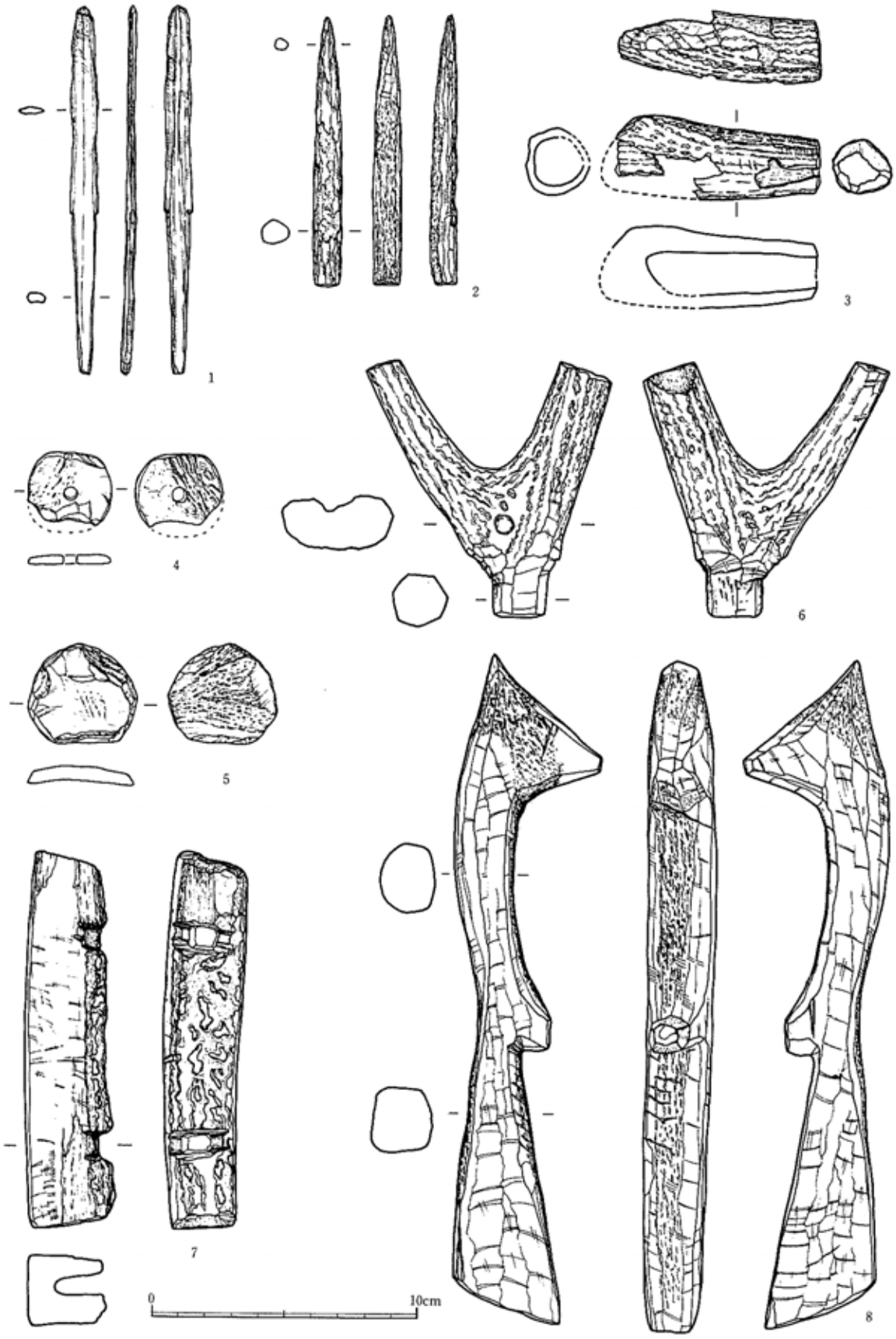
室臺秀明・室臺富貴子　1994『長谷小路周辺遺跡由比ガ浜三丁目228・229番外(No236)』長谷小路周辺遺跡発掘調査団

宗臺秀明　1995『長谷小路周辺遺跡由比ガ浜三丁目258番1地点(No236)』長谷小路周辺遺跡発掘調査団

遺構名		鹿角製		獣骨製	
東西大路	C 側溝	把手<197-7>			
・西２道路	D 側溝	不明角製品 (把手未製品？)<197-8>	不明未製品[88-18] 鹿角材残片[88-22] 鹿角材残片[88-24]		骨材残片(ウシ橈・尺)<198-17>
北１西３区	SB585B		鹿角材残片		
	SE892	円盤状角製品<197-4>			
南１西２区	SE50	弾状角製品(未製品？)<198-10>	鹿角素材[88-20]		
	SE3026	弾状角製品<198-9>			
	SK8	把<197-3>			
	SK1210		鹿角材残片(奇形角)[91-35]		
	SD1230・1240			不明骨製品(ウシ中手骨,浮子？)<198-11>	
南２西１区	SD2000　4 層	刺突具<197-2>			
・南３区	8 層				骨材残片(ウシ中手骨)<198-16>
	8～10層			ト骨(ニホンジカ肋骨)<198-14> ト骨(ウマ/ウシ肋骨)<198-15>	
	9 層		鹿角材残片	ト骨(ウマ/ウシ肋骨)	
	10層	不明角製品(叉状)<197-6>	鹿角素材[88-21]	ト骨(ウマ/ウシ肋骨)<198-12> ト骨(ウマ/ウシ肋骨)<198-13>	
	11層	円盤状角製品(未製品)<197-5>		骨鏃(ニホンジカ中手/中足骨)<197-1>	
	12層		鹿角素材(落角)[88-19] 鹿角素材(落角)[88-23]		

＊＜　＞は実測図の番号を示し、[　]は写真のみを掲載したものの図版の番号を示している。

第48表　骨角製品の遺構別一覧



第197図　骨角製品（1）

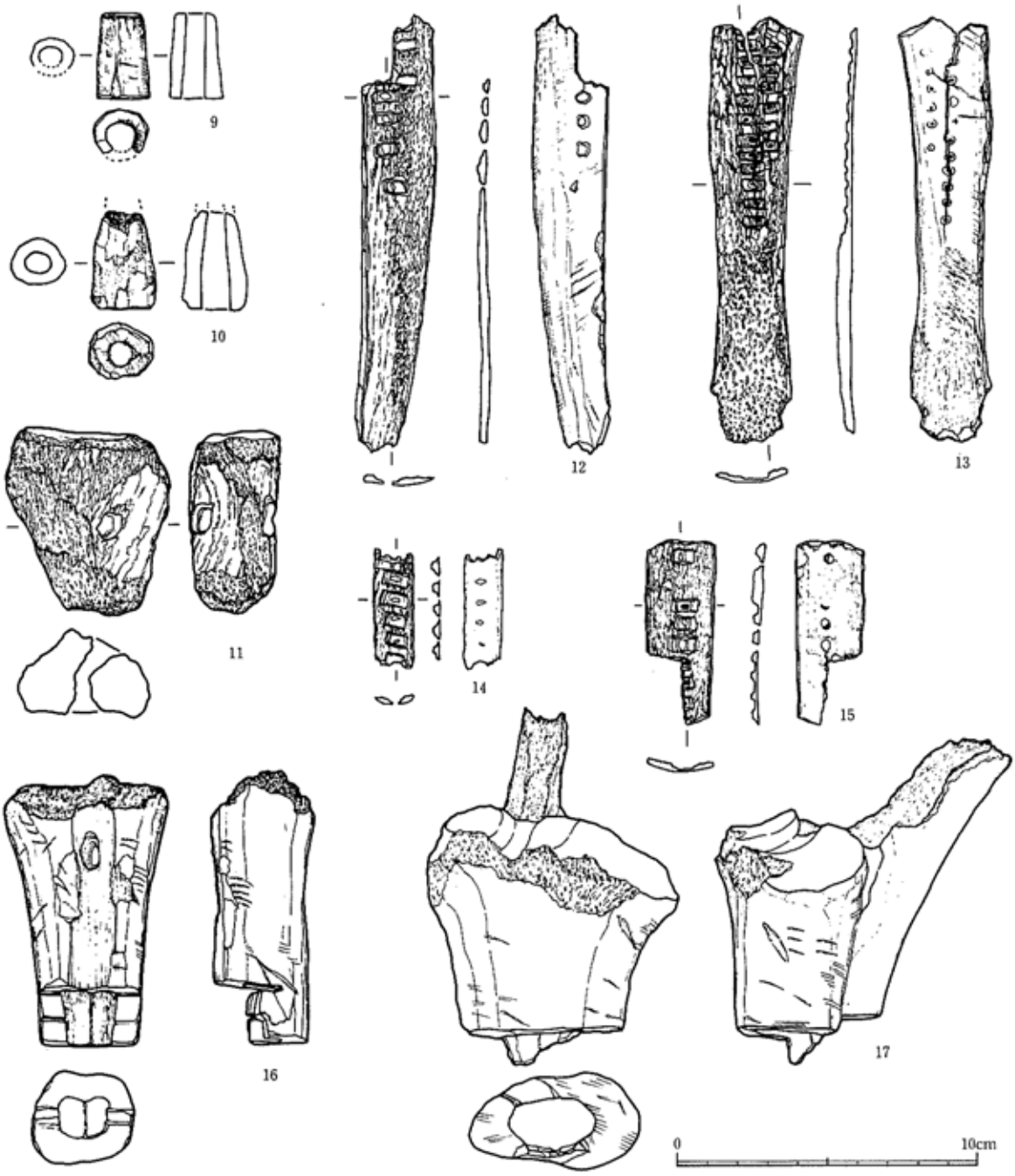


図	No.	種別	区画	遺構	層位	最大長	最大幅	厚さ	素材	備考	図版
197	1	骨鏃	S3	SD2000	11層	13.7	1.0	0.4	ニホンジカ中手/中足骨	鏃身先端部破損	88-1
	2	刺突具	S3	SD2000	4層	10.1	1.0	0.9	鹿角	先端および末端部を丁寧に整形。	88-2
	3	把	S1W2	SK8		7.5	2.6	2.4	鹿角	柄穴径約1.0、深さ約6.5cm。焼けはじけが著しい。	88-3
	4	円盤状角製品	N1W3	SE892		3.2	2.6	0.4	鹿角	孔径約0.5cm。薄く丁寧に研磨、整形。	88-9
	5	円盤状角製品	S3	SD2000	11層	4.0	3.7	0.5	鹿角	未製品？	88-10
	6	不明角製品（叉状）	S3	SD2000	10層	9.5	9.2	2.0	鹿角	叉状角製品。基部を七角形に面取り加工。	88-4
	7	把手	東西大路SX18C北側溝			14.2	2.8	3.0	鹿角	孔径1.0、深さ2.9、孔間7.5cm。股部の内側を除き、面取り加工。	88-5
	8	不明角製品	東西大路SX18D北側溝			25.2	5.3	2.5	鹿角	把手未製品？ ほぼ全面を面取り加工。	88-6
198	9	弾状角製品	S1W2	SE2026	2層	2.8	1.6	－	鹿角	径0.7～1.0cm の貫通孔。穿孔部で破損。	88-8
	10	弾状角製品	S1W2	SE50	2層	3.3	2.1	1.8	鹿角	未製品？ 径0.7cm 程の貫通孔。	88-7
	11	不明骨製品	S1W2	SD1230・1240		6.2	5.3	2.9	ウシ中手骨L近位端	浮子？ 貫通孔の径約1cm。海綿質が露出し、加工の痕跡不明。	88-11
	12	卜骨	S2W1	SD2000	10層	14.6	2.5	0.3	ウマ/ウシ肋骨	縁2列8ケ所（2ケ所未焼成）。縁0.9×0.3～0.5cm 横位長方形、灼痕0.2～0.4cm。	88-14
	13	卜骨	S2W1	SD2000	10層	14.2	2.7	0.2	ウマ/ウシ肋骨	縁2列18ケ所（2ケ所未焼成）。縁0.5～0.9×0.3cm 横位長方形、灼痕0.2cm。	88-15
	14	卜骨	S3	SD2000	8～10層	6.2	2.2	0.3	ニホンジカ肋骨	縁1列5ケ所。縁0.7～0.9×0.5cm 横位長方形、灼痕0.4×0.2cm。	88-13
	15	卜骨	S2W1	SD2000	8～10層	3.9	1.3	0.2	ウマ/ウシ肋骨	縁1列8ケ所。縁0.7～0.9×0.5cm 横位長方形、灼痕0.3×0.2cm。	88-12
	16	切断痕のある獣骨	S3	SD2000	8層	9.0	5.5	3.5	ウシ中手骨R	「U」字形骨材（幅3.3、厚0.7～0.9、高1.5cm 程）採取後の残片。	88-16
	17	切断痕のある獣骨	西道路SX20D東側溝			7.6	8.3	4.3	ウシ橈尺骨R	骨材採取後の残片	88-17

第198図　骨角製品（２）